

(題字松陰先生筆蹟擴大攝影)

昭和八年十二月發行

校友會雜誌

第參拾貳號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立萩中學校校訓

質
實

義
勇

協
同

萩中學校應援歌

新緑のらく指月山

萩の榮譽を讃へつゝ

み山嶺に吹く風に

健兒の意氣を託すなり。

熱風すこき夏の日も

我が鐵腕は雲に鳴り

嚴寒肌を劈けど

任務は重し我が選手。

あゝ感激に血は躍り

溢るゝ力は手に足に

若き我等の喜びを

歴史は世々に傳ふなり。

陣頭に胸を立て

小手を翳して眺むれば

風にボブラは鳴り合ひて

吾等の門出を祝すなり。



至誠の工夫と青年

會友金子乙助

誠とは眞實無妄の謂で、天の我等に賦與せる本然の道であるから、吾人は工夫を用ひて、誠の道を全うしようと思はねばならぬ。人々皆能く誠を思うて、人道の當然爲すべき所を盡さば、則ち念々皆誠ならざるはない。之を至誠と云ふのである。然らば至誠に到る工夫修養は如何にせば可なるか云ふに、これは學問思辨の功に依つて善の觀念を明にするここにある。善の觀念が明でなければ眞に善の有る所を知ることが出来ない故、善を爲すことが誠實でない。唯能く善に明であつて、身に行ふ所が誠實になるのである。されば吾人は、善を明にして身に誠あることを務めなくてはならぬ。能く誠を思ふの工夫修養を積み、至誠の域に達すれば、物として、其の誠心に感動させられないものは無いのである。吳因子曰く、「凡ソ人ノ意念一タビ眞實ノ處ニ到レバ、則チ天地モ格スベク、鬼神モ通ズベク、金石モ流スベク、禽獸モ化スベシ。況ンヤ人ヲヤ」と。至誠の自然に他を感動せしむる效驗は、此の如きものがあるのである。されば孟子は、「至誠而不動者未之有也」と云つてゐる。

さて松陰先生が、叙上孟子の語に就きて、深く工夫を付けられたことは、世の既に周知の事であるが、今先生が、家族、知友、門弟等に與へられたる書翰、及び、留魂録の中から、至誠に關するものを擧げるときは、次の如きものがある。

小田村伊之助(後の男爵樺取素彦)に與へられた者。

至誠而不動者未之有也。

吾學問二十年、齡亦而立。然未能解斯一語。今茲關左之行、願以身驗之。若乃死生大事。姑置焉。

此語他日有驗、幸傳諸世、勿致湮滅。若或索然無蹟、又幸焚之、勿貽醜友朋。渾仰老兄處分。

作間忠三郎(贈正四位寺島忠三郎)に與へられた者。

至誠而不動者未之有也。此語高大無邊な聖訓なれど、吾未能之信也。此度此語の修行仕る積也。

此事別に一書を作る積なれども、暇なくば子遠和作へ御通可被下候。(子遠は贈正四位入江杉藏一名九一の號。和作は後の正二位子爵野村靖。兄弟にして共に松陰先生の)

(家族)父杉百合之助。叔父玉(門弟)に送られた者。

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出来不申。非常之變に立至り申候。嗚々御愁傷も可被遊拜察仕候云々。

留魂録(松陰先生が死に臨まる、一日前即ち安政六年十月二十六日黃昏書き終へられた遺言書)

五月十一日關東ノ行ヲ聞キシヨリ、又一ノ誠字ニ工夫ヲ付タリ。時ニ子遠死字ヲ贈ル。予之ヲ用ヒズ。一白綿布ヲ求テ、孟子至誠而不動者未之有也ノ一句ヲ書シ、手巾ニ縫付携テ江戸ニ來リ、是ヲ評定所ニ留メ置シモ、吾志ヲ表スルナリ。

如上の文書に據りて見るに、先生が其の生涯を通じて、如何に至誠の工夫修養に、心血を凝がれたかを窺ひ知ることが出来るのである。

松陰先生は、至誠の空論者にあらずして、實に之が實行者であり體驗者であつたのである。不幸にして其の當時には容れられなかつたにしても、今日神に祀れて、至誠の權化と仰がれ、其の遺せる教訓と精神との、世を経るままに光を増して、高く明る輝き互ることは、至誠は、たとひ一時に屈するといへども、萬世に伸びるものであることを、如實に物語るものである。世には徒に筆舌を弄して實行の伴はない輕薄者流がある。自利のみに汲々として、毫も國家社會を顧みず、妄に權謀策動を事とする詐術家がある。此等は皆至誠の工夫修養を忽諸に附した徒で、先生の罪人である。

翻つて我國現時の社會狀態を觀察するに、到る處に非常時局の叫を高調して居る。之を外にしては國際聯盟退後引續き世界各國の對日經濟戰となり、且つ滿洲國の獨立を完成せしむる爲、多大の支援を必要とするなき、國際關係は非常に複雑を加へつ、あり。之を内にしては、思想問題の左右兩極端の甚だ憂慮すべき行動ありて、我が帝國は今後一層の非常時局に直面するであらう。かかる非常時局に當つて、之を匡救打開するには、眞に國家を憂ふる志士の至誠なる行動に俟たねばならぬ。これ何れの方面にも至誠的人物を要求する所以である。

抑青年は國家の中堅である。青年の意氣如何は、大に國運の消長に關係する。彼の幕末の非常時局に於ては、松陰先生を始として、高杉晋作・藤田東湖・坂本龍馬・横井小楠・梅田雲濱・橋本左内等の、至誠氣魄の雄大なる、國家の爲一身を犠牲に供して盡瘁努力した英傑が輩出したことは、今更賑々する必要はない。此の昭和の非常時局に於て斯の如き人物果して幾人がある。西郷・木戸・大久保・伊藤・山縣・井上・松方等の諸傑今何處にあるか。叙上幕末の非常時局に於ける愛國志士の活動は、多くは其の青年時代であつた。然るに昭和の青年の多くは、意氣銷沈して懦弱に陥り、國家的自覺に乏しく、至誠の氣魄に缺くる所のあるのは、實に慨嘆すべきである。

松陰先生曰く、
 人唯一誠あり。以て父に事ふれば孝、君に事ふれば忠、友に交れば信、此類千百名を異にすれども、畢竟一誠なり。と、之を要するに、一誠は萬善の本である。智識を磨き體力を練つても、至誠で一貫しなければ、決して國家社會の用は爲さない。常に用を爲さざるのみならず、却つて之を悪用して社會を毒害するもの比比皆是である。戒心すべきことではないか。されば聽て此の難局を匡救打開する爲に、社會に出でて活動しようとする青年生徒諸君は、此の際大に時局氣分を作興強調して、青年日本の意氣を發揚し、既往に鑑み現在に徴し將來を慮りて、須らく猛省一番平素に於て至誠の工夫修養を積むべきである。

(昭和八年十月二十三日稿)

山口縣阿武郡市町村別人口密度 (概報)

特別會員 岡庭秀男

一、緒言

人口密度は人口と其の占居する地域との關係を示すものである。其の疎密は地域性の反映であり自然人文の綜合的表現である。

茲に山口縣阿武郡を研究地域として、一市一町二十二村の市町村別人口密度を調べ、其れに地域性との關係に就いて一二の地理的操作を試みんとするものである。

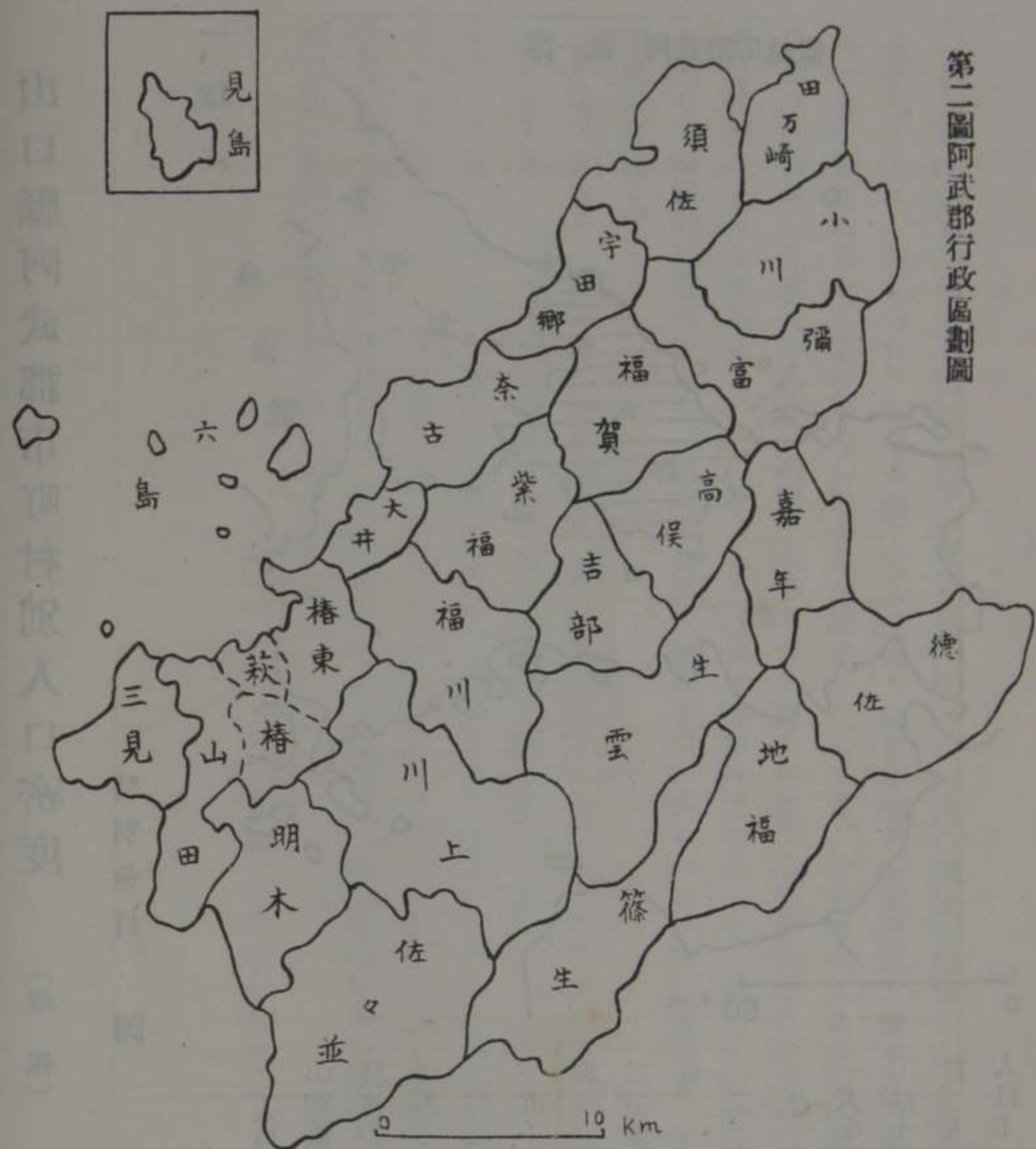
二、市町村別人口密度

註一 山口縣統計書等を参照して註二第一表を作つた。方里を方秆に換算に際しては小數第三位迄で出し四捨五入によつた。人口密度は普通の方法、即ち面積A人口B、 B/A で算出し小數第一位迄出し

第一圖 阿武郡の位置



第二圖阿武郡行政區劃圖



六
四捨五入した。

一、人口密度を地理學的研究の對象として取扱ふに當つて、行政區劃に従つて算出するのは是非に就いては、議論のある所であるが、註三町村の如き小行政區劃に依る時、それが全く地理學的に無意義なりと稱する事は出来ない。

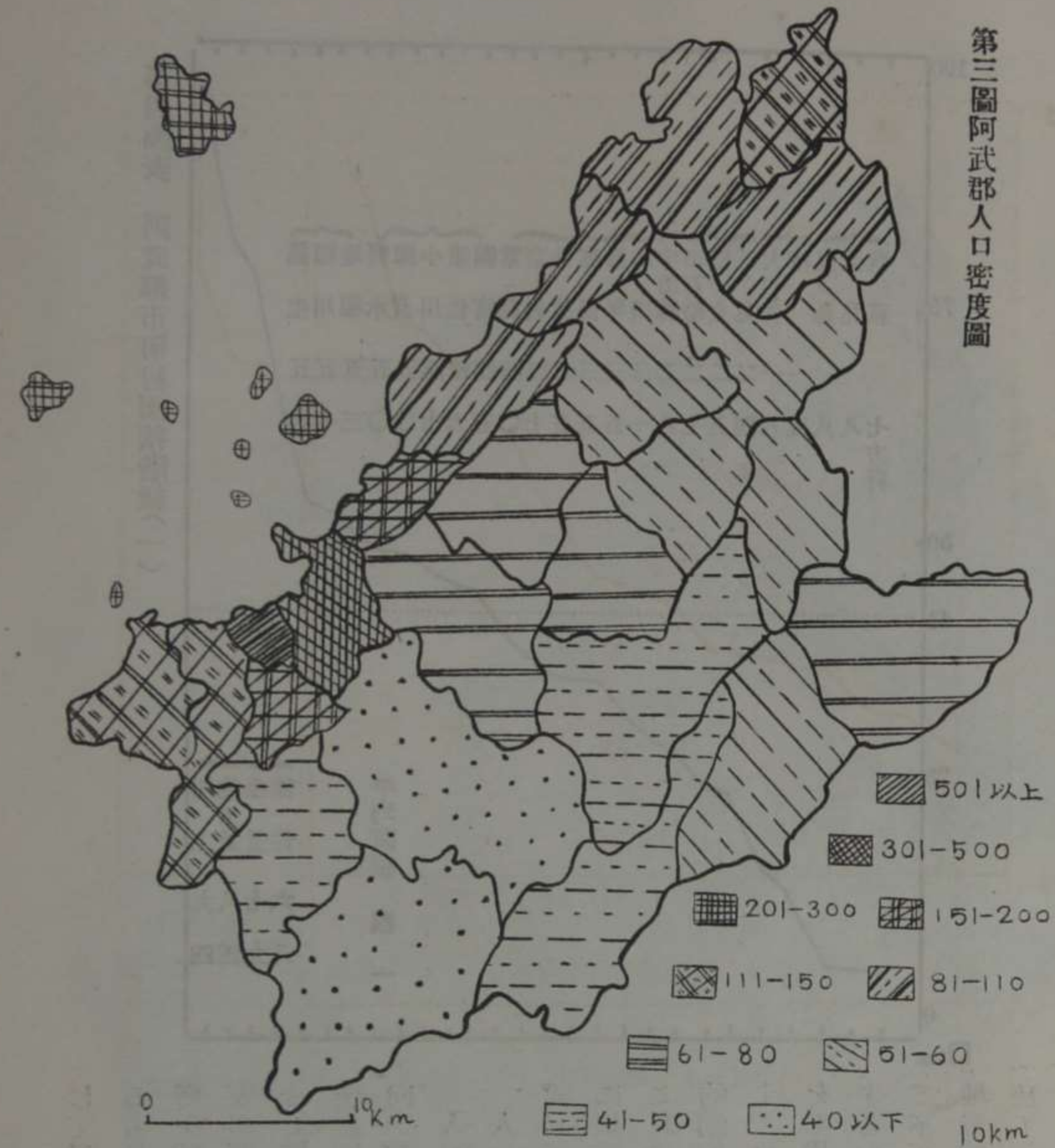
所謂地理學的人口密度を以て、地域の大きさを地形地質氣候との自然的性質に結びつけ、之と人口との關係を表示するとすなわち、後述するが如く阿武郡の市町村行政區劃が全く自然的性質に就中地形を無視して行はれた事は思へない、之を氣候から考へるに地域の狭小な點から言つて阿武郡が幾つかの特色

第一表阿武郡市町村別面積、人口、人口密度

市町村名	面積(方里)	同換算(方杆)	人口(昭和五年十月一日)	人口密度(一方杆)
三木村	1.0	1.0	1,323	1.3
佐田村	1.0	1.0	2,234	2.2
川上村	1.0	1.0	2,270	2.3
篠川村	1.0	1.0	2,705	2.7
生雲村	1.0	1.0	3,891	3.9
上雲村	1.0	1.0	3,137	3.1
雲生地	1.0	1.0	4,989	5.0
藤佐村	1.0	1.0	7,498	7.5
吉部村	1.0	1.0	9,896	9.9
福生村	1.0	1.0	13,749	13.7
賀年村	1.0	1.0	19,667	19.7
高嘉保村	1.0	1.0	26,660	26.7
福富村	1.0	1.0	33,333	33.3
福川村	1.0	1.0	49,896	49.9
茶福村	1.0	1.0	66,667	66.7
古大井村	1.0	1.0	83,333	83.3
紫福村	1.0	1.0	100,000	100.0
大井村	1.0	1.0	116,667	116.7
福井村	1.0	1.0	133,333	133.3
古大井村	1.0	1.0	150,000	150.0
福井村	1.0	1.0	166,667	166.7
古大井村	1.0	1.0	183,333	183.3
福井村	1.0	1.0	200,000	200.0
古大井村	1.0	1.0	216,667	216.7
福井村	1.0	1.0	233,333	233.3
古大井村	1.0	1.0	250,000	250.0
福井村	1.0	1.0	266,667	266.7
古大井村	1.0	1.0	283,333	283.3
福井村	1.0	1.0	300,000	300.0
古大井村	1.0	1.0	316,667	316.7
福井村	1.0	1.0	333,333	333.3
古大井村	1.0	1.0	350,000	350.0
福井村	1.0	1.0	366,667	366.7
古大井村	1.0	1.0	383,333	383.3
福井村	1.0	1.0	400,000	400.0
古大井村	1.0	1.0	416,667	416.7
福井村	1.0	1.0	433,333	433.3
古大井村	1.0	1.0	450,000	450.0
福井村	1.0	1.0	466,667	466.7
古大井村	1.0	1.0	483,333	483.3
福井村	1.0	1.0	500,000	500.0
古大井村	1.0	1.0	516,667	516.7
福井村	1.0	1.0	533,333	533.3
古大井村	1.0	1.0	550,000	550.0
福井村	1.0	1.0	566,667	566.7
古大井村	1.0	1.0	583,333	583.3
福井村	1.0	1.0	600,000	600.0
古大井村	1.0	1.0	616,667	616.7
福井村	1.0	1.0	633,333	633.3
古大井村	1.0	1.0	650,000	650.0
福井村	1.0	1.0	666,667	666.7
古大井村	1.0	1.0	683,333	683.3
福井村	1.0	1.0	700,000	700.0
古大井村	1.0	1.0	716,667	716.7
福井村	1.0	1.0	733,333	733.3
古大井村	1.0	1.0	750,000	750.0
福井村	1.0	1.0	766,667	766.7
古大井村	1.0	1.0	783,333	783.3
福井村	1.0	1.0	800,000	800.0
古大井村	1.0	1.0	816,667	816.7
福井村	1.0	1.0	833,333	833.3
古大井村	1.0	1.0	850,000	850.0
福井村	1.0	1.0	866,667	866.7
古大井村	1.0	1.0	883,333	883.3
福井村	1.0	1.0	900,000	900.0
古大井村	1.0	1.0	916,667	916.7
福井村	1.0	1.0	933,333	933.3
古大井村	1.0	1.0	950,000	950.0
福井村	1.0	1.0	966,667	966.7
古大井村	1.0	1.0	983,333	983.3
福井村	1.0	1.0	1,000,000	1,000.0

ある註四氣候的區分を爲すが適當なりとは考へられない。氣候上一地域として取扱つて差支へあるまいから、阿武郡市町村別行政區劃が地形的制約によつて爲され、これに依る密度であるとするならば、此處に表示したものが、地理的研究の對象として利用し得ないと斷ずる事は出来まい。

三、密度階級及び人口密度圖人口密度の疎密を考へるに當つて其の密度の階級を分つ。之は探るべき地域の廣狹疎密の狀態によつて註五種々なる標準が定められるであらうが、筆者は第二表に據つて第三表の如く階級區分を行つた。第二表に依り遷急點を知り、此の遷急點に



第三圖阿武郡人口密度圖

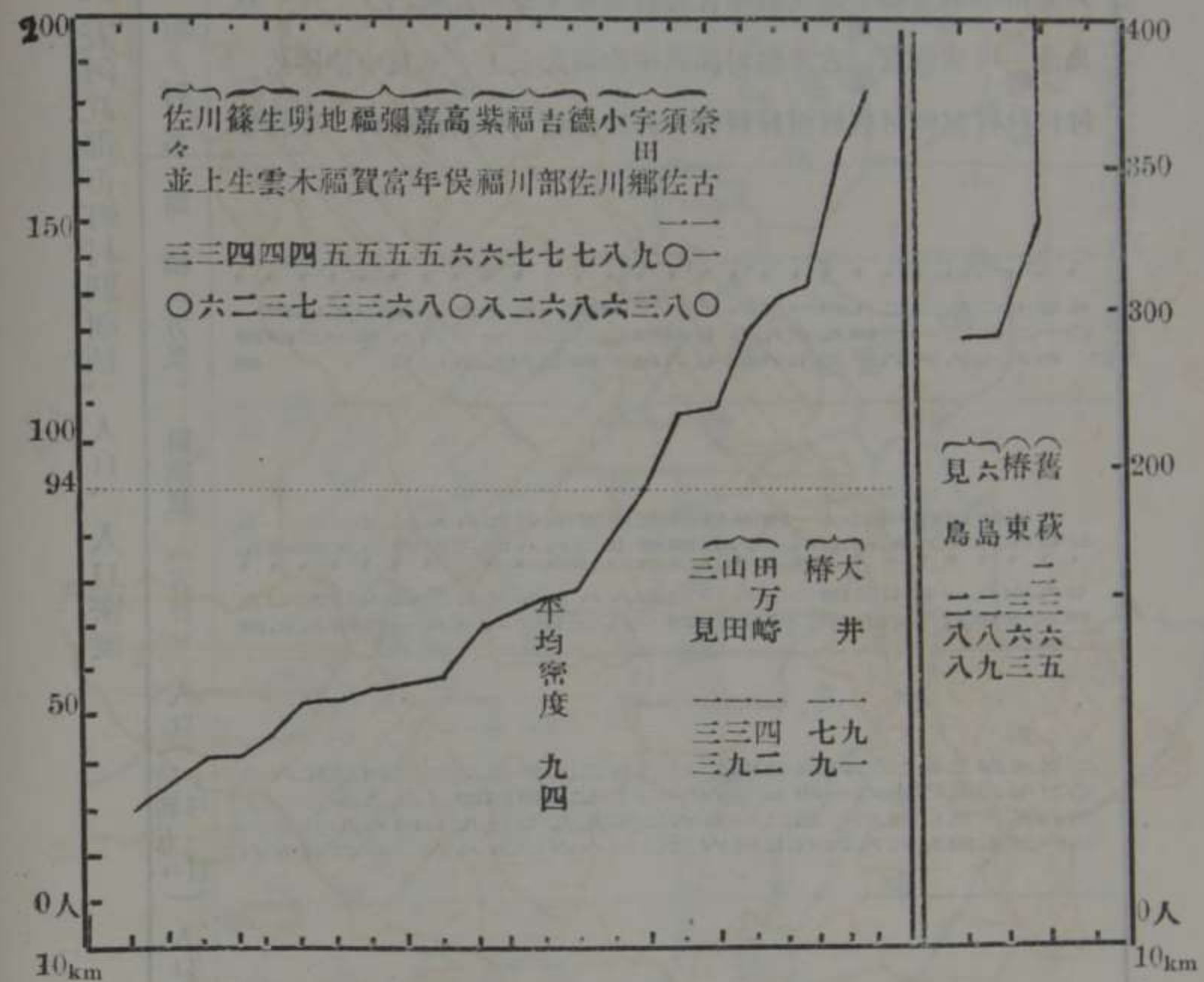
ものである。此の密度圖を素材として地理的考究の歩を進めて見やう。

四、人口密度と町村面積

人口密度と町村面積との間に如何な關係があるかどうかの問題に就いて註七竹内氏の研究がある。

氏に依れば「概略的に町村面積は地形及び人口密度に關係を有し、平地、中間、山地町村に従つて面積が増し。人口密度の小さな程面積の増す傾向があるが、或る場合には人口密度を無視して地形とのみ關係する場合がある。然し地形の相違に従つて面積に差の現はれない場合や、少しの密度の相異が其の儘面積に現はれない場合も可成りに存在

第二表 阿武郡市町村人口密度階級 (一)



第三表 阿武郡市町村別密度階級 (二)

區分	階級	當該町村
稀少	I 40以下	佐々並 川上
	II 41-50	篠生 生雲 明木
稀薄	III 51-60	地福 福賀 彌富 嘉年 高俣
	IV 61-80	紫福 福川 吉部 徳佐
稍薄	V 81-110	小川 宇田 須佐 奈古
	VI 111-150	三見 山田 田万崎
中位	VII 151-200	樺 大井
	VIII 201-300	見島 六島
稠密	IX 301-500	樺 東
	X 501以上	舊 萩

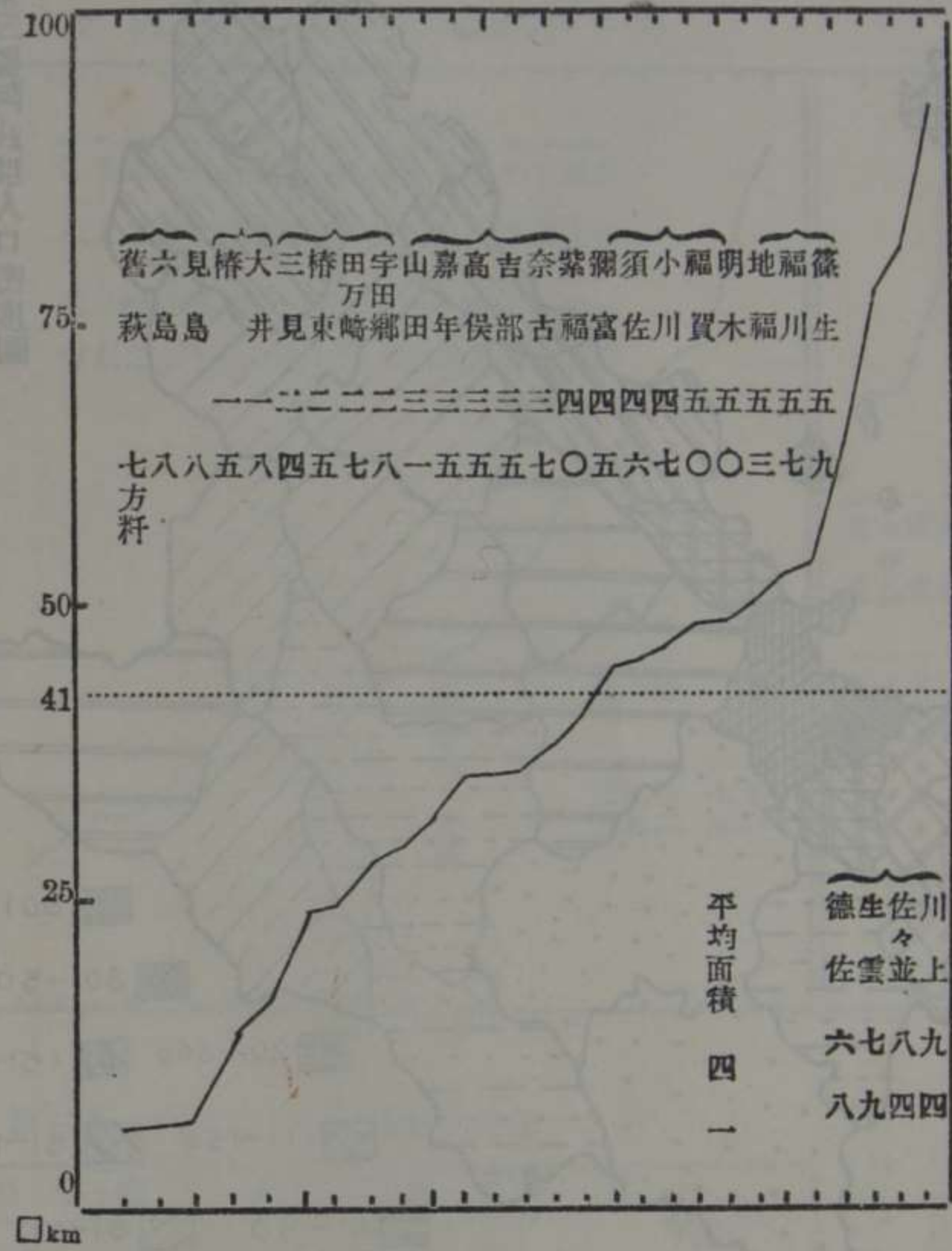
依つて六區分十階級を定め、之を原として第三圖密度圖を作成した。

六區分の疎密を表はす語は、註六我が内地人口密度、山口縣人口密度を限界として名付けた



阿武郡市町村面積階級(一)

第四圖表 阿武郡市町村面積階級(一)



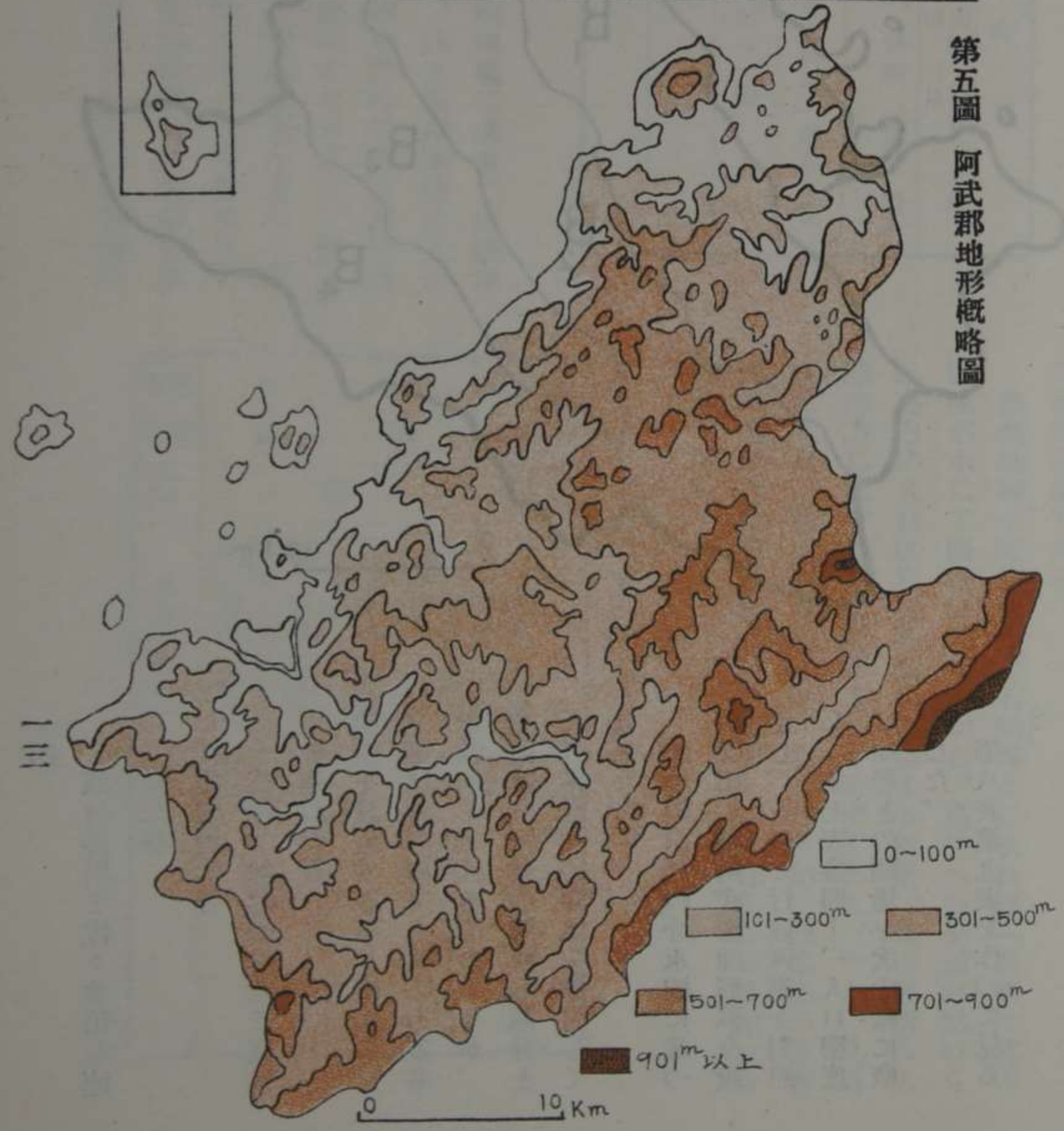
一〇

して居て、此等は他の事情に依つて起るものであらう。一と。筆者の行つた所を述べて見やう。面積階級を第四圖表の遷念點に依り、第五表の如く三分七階級を爲した。之を第六表の如く密度階級を組合せて見ると次の様な傾向を知る事が出来る。

人口密度の大なる町村は面積小
人口密度の小なる町村は面積大
而して此の關係が全く單なる面積のみに依據して現はれた結果であらうか。これは阿武郡の市町村行政區劃が地形的制約の下に決定せられ、第四圖参照に依る面積である以上、此の點を考慮した密度と面積の關係を以て解するの妥當である。即ち面積が地形を不可分である點よりして其の密度は地形的制約の下になる面積との關係に於て前述の様な傾向ありと斷するの

六見田小彌須福宇奈大紫福吉高嘉徳地生篠川佐明三山椿椿舊 万島崎川富佐賀郷古井福川部俣年佐福雲生上並木見田 東萩	町村名
8 8 6 5 3 5 3 5 5 7 4 4 4 3 3 4 3 2 2 1 1 2 6 6 7 9 10	密度階級
1 1 3 5 5 5 5 3 4 2 4 6 4 4 4 7 6 7 6 7 7 5 3 4 2 3 1	面積階級
稠稠稍稍稍稍稍稍中稀稀稀稀稀稀稀薄稀稀稀稀稍稍中稠極 密密薄薄薄薄薄薄薄位薄薄薄薄薄薄少少少少薄薄位密濃	密度階級と面積階級
小小小中中中中中中中中中中中大大大大大中小中小小小	面積階級

第六表 密度階級と面積階級



第五圖 阿武郡地形概略圖

第五表 阿武郡市町村面積階級(二)

區分	階級	該當町村
小	I	舊萩 六島 見島
	II	椿 大井
	III	三見 椿東 田万崎 宇田郷
中	III	山田 嘉年 高俣 吉部 奈古 紫福
	V	彌富 須佐 小川 福賀 明木
大	VI	地福 福川 篠生
	VII	徳佐 生雲 佐々並 川上

島嶼地域 海岸地域 山間地域がこれである。島嶼地域は既に明瞭であらう。海岸地域は山間地域との境界は大鳴山、白須山、三ヶ岳、唐人山、基盤ヶ嶽、鯨ヶ岳に至る北東から南西に走る一線に求める事が出来やう。山間地域を更に細分すると四つの山列に依つて四地区に分けられる。四つの山列は海岸地域との境界山列の如く北東から南西に走る線で、これは山口縣を走る山脈全体についても言はれる所で註九二十万分一山口縣地理模型製作に際し痛切に感じた。其の間に、田万川、大井川、の上流と明木川を連ねた谷

五、人口密度と地形
人口密度の大小が地域性の反映であるならば、地域の自然的要因に因つて密度の大小が成因される。註は實に自然的要因は人口密度の成因の重要なものである。筆者は此の自然的要因の一要素を爲す地形を採り、之を此の研究地域に於て検討して見やう。即ち阿武郡市町村別人口密度が地形との間に幾何の地理的意義を有するやに就いて概報せんとする者である。
二十万分一帝國圖山口圖幅を採り、等高線百米毎に之を辿り第四圖を得た。之を原圖として第五圖を作つた。之に依り阿武郡を地形上三大部に分けて見た。

第九表 地形區と町村人口密度 (二)

地形的區分	市町數	稀少	稀薄	稍薄	中位	稠密	極濃
海岸地域	10	1	1	6	2	1	1
山間地域	15	B ₁	2	4	1	1	1
		B ₂	1	2	1	1	1
		B ₃	1	1	1	1	1
		B ₄	1	2	1	1	1
島嶼地域	2					2	

山間地域の疎なる、其の地形的特性たる高距と起伏の状態とに左右せられて居るのであらう。註一高距と人口密度との關係に就いては、原則として高度を増すに従つて密度を減すると言ひ得る。又起伏の状態地形が幼年期か壯年か、老年期かの如何も疎密に大いに影響する。其地形的特性が經濟活動を著しく妨げて居るから、特殊な場合―鑛山とか保養地宗教的の土地とか―を除いては山間地に其の密度は小である。

以上で概論的説明を終り、町村別に地形的特性と密度とに就いて一二宛を指示して見やう。

海岸地域

萩、稠密區、椿東、椿、山田、萩を合しての平均密度は四〇五である。木間を除いて計算すれば此の數字はもつと大になるであらう。此の稠密度が阿武川の造つた所謂註一二萩三角洲平野を背景として居る點を否むわけには行

かない。

大井、中位區、大井川の造つた沖積平野が展開し、地形的制約に依る面積の狭少を考へたい。

奈古、宇田郷、須佐、稍薄區I海岸地域でも山脈の直ちに海に迫り來る所が多く、比較的平地が少ない。

田万崎、三見、稍薄區II、田万川流域の平地、三見市吉廣蔵本を中心とした淺く廣い谷に水田の大部と聚落が分布してゐる。

山間地域

小川、稍薄區I、根の様に入り込んだ田万川の刻んだ淺く廣い谷、全面積の凡そ三分一は百米以下である。山間地域で稍薄區を爲すのは此の村だけである。

彌富、福賀、紫福、福川、高俣、吉部、嘉年、稀薄區 アスローテ狀―東台、西台、千石台、羽賀台―トロイテ狀―代馬山 鍋

山―等の火山形態の間に開けた小盆地が耕地を供給してくれる點山間地域にあつても、川上、佐々並に比べると大いによろしい。等高線の間隔の緩やかなのも此の區地形的性情である。

德佐、地福、稀薄區 德佐は紫福、吉部、福川とは異なるけれども、彌富、福賀、高俣、嘉年、地福の稀薄區Iに對して同じく稀薄區のIIをなす地域である。郡内の盆地としては最大の德佐盆地が開けて居るからである。此の良き耕地を挾んで兩山麓に山麓線に沿つて聚落が列んでゐる。此の耕地を最も多く利用せん爲に飲料水を得る關係とであらう。地福は其の盆地の廣さが德佐に比して狭い。密度も稀薄區のIである。

川上、明木、生雲、篠生、佐々並、稀少區 同じ稀少區でも川上、佐々並は稀少區Iをなし、他は稀少區IIを成す。佐々並、川上は先きの四つの山列が、其の村を貫き、等高線の間隔相接してゐる點は他の山間地域に見られない。其の起伏が複雑である。阿武川の若返つた深い谷、これは耕地を供給してくれる所ではない。佐々並は二百米等高線が佐々並川の谷によつて一寸三杆許り村を窺いて居るに過ぎない。此の點に於ては生雲、明木、篠生の方がよい。それは生雲川、明木川、篠目川の谷は可成り幅も廣く、幼年の谷ではないから谷中に耕地を持つて居る。斯の如き地形的差異が密度の疎密の差を生ぜしめるのである。

六、人口密度と經濟との關係

人口密度が自然的要因に左右される事は前述した。然し之のみには密度が地域性の反映の全部としては受け取る事は出来ない。是に並んで註三人文的要因からの視覚を通して地域性の表現としての人口密度を解してこそ兩々相待つと言ふべきである。何となれば地域性なるものは自然と人文との相關に於て具現せられるものであると信ずるか

俎此の人文的要因の中で最も強く密度に働き掛けるものは何か、註四其れは經濟關係である。筆者は此の經濟關係の根本をなす産業との關係に於て人口密度を分析して見たのである。其の概報を述べやう。

不十分且拙劣な地理的分析ではあつたが、阿武郡市町村別人口密度が如何なる地理學的意義を有するやに就いて、面積、地形、經濟的―主として産業形態の差異―關係との相關に於て左記を要約し得た。

- 一、地形に依つて決定せられてゐる町村面積の廣狹と人口密度の大小とは逆比例的の關係を示し、
- 二、市町村別人口密度は海岸島嶼山間の三地域に從つて密から疎となり、
- 三、各町村が地形的制約に因つて著しく疎密の差を生じ、
- 四、島嶼地域―見島六島―は其の稠密度の島の束縛性に依據し、
- 六、田園的指數の大小は人口密度の疎密と相反する傾向があり、其れは産業的差異の然らしむる所で、

七、水産指數を田園都市的職業より獨立させて密度との關係を見る、に水産指數を計上し得る町村に密度が大となる。

以上で此の小篇を終るが、嚴密なる意味に於て此の分析だけで地理的に人口密度を説明し得たとは思はない。況んや其の分析、推理に於て正鵠なる手段、判斷に依つたかの不明なるに於てをやである。尙又人口密度が地理的要因にのみ因りて全部解釋し得ざる點のある可きを想ひ思ふ時には此の事を一層深く感ずる。

第一二表 人口密度と經濟的區別

海岸地域	町	村	都市的		田園的		水産	人口疎密	密度階級
			都	市	田	園			
海岸地域	須田	佐郷	36	53	11	12	11	12	5
		古崎	21	66	12	16	13	16	5
		崎見	32	51	13	13	6	16	6
		田崎	46	41	70	40	30	16	6
		三山	24	30	60	61	0	24	7
		大橋	24	39	61	28	0	24	7
		橋舊	48	88	61	11	1	24	9
		東萩	48	88	61	11	1	24	9
		見島	20	7	63	88	16	4	8
		見島	18	21	82	79	0	0	1
島嶼	山間地域	並上	21	69	0	0	0	0	1
		生雲	26	74	0	0	0	0	1
		木福	22	77	0	0	0	0	2
		賀富	29	71	0	0	0	0	2
		年俣	19	81	0	0	0	0	2
		福川	20	89	0	0	0	0	3
		部佐	18	82	0	0	0	0	3
		川部	19	81	0	0	0	0	3
		佐川	19	81	0	0	0	0	4
		小佐	15	85	0	0	0	0	4
山間地域	島嶼	佐川	24	76	0	0	0	0	4
		篠生	21	69	0	0	0	0	4
		明地	26	74	0	0	0	0	4
		福彌	22	77	0	0	0	0	4
		高紫	29	81	0	0	0	0	4
		福吉	19	81	0	0	0	0	4
		徳小	19	81	0	0	0	0	4
		佐川	15	85	0	0	0	0	4
		小佐	24	76	0	0	0	0	5
		佐川	21	69	0	0	0	0	5

	平均氣温		降水量		降水日數	
	夏	冬	夏	冬	夏	冬
萩	27.8	7.9度	759.5	284.5	39	39日
須田	27.3	8.5	685.7	286.5	32	39
徳見	25.7	4.1	870.8	297.4	43	24
佐島	26.3	8.4	751.7	220.5	38	39

参考文献(直接参考として教へを受けたもの、又直接教へは受けなかつたが、人口密度に關する研究と思はれるもので知つてゐるものを擧げた)

註一 山口縣統計書 (土地人口) 昭和五年

註二 萩市を舊行政區劃即ち合併以前の區劃にして密度を究研したのは小區劃にする程一層地理學的密度に近づき得る譯であるから此の意味よりすれば六島村も各島別に研究したかつたのだが、資料が手に入らなかつた爲に其の儘とした。

萩市面積が内譯合計面積と一致しないが舊行政區劃の面積は市役所の調査になるものに依つたので、調べたがわからなかつた。

註三 石橋五郎 人口地理學 地理學講座 第十一回

「郡とか町村とかの小區劃になるにそれが地形に制約せられて居る點に於て概ね地理的價值を有つたの通則の外にこれ等小行政區劃なるもの多くは、歴史的に發達したる聚落を基礎としたものであつてこの聚落は永年不變の自然と密接に聯絡を有してゐるから一層地理學的密度に近づき得る」

行政區劃に依つて人口密度に關するを研究したものに次の様なのが知られる。

石橋五郎 小野鉄二 大日本都市別人口密度及解説

田中館秀三 富田芳郎 齋藤文雄 東北地方市町村別人口密度表及密度圖並に解説

井上修次 本邦人口増加率概観並びに人口増加率と人口密度との關係に就いて、地理學評論第八

卷第十一號

註四 福井英一郎 中國地方の氣候區 日本地理風俗大系

福井英一郎 日本の氣候區 地理學評論 第九卷の一―四號

最も以上は一郡の如きに比すれば大地域の氣候區研究と言はれやうが日本の氣候に於て見ると「阿武郡は中部日本の太平洋岸區、北九州地方 筑紫地區」に包括されてゐる。

山口縣統計書(土地人口) 氣象の部 昭和五年

此の氣象の部により左表を作つた。夏は六、七、八の三ヶ月、冬は十二、一、二の三ヶ月をなして計算した。

註五 石橋五郎 人口地理學 地理學講座 第十一卷

麥谷龍次郎 統計地圖に於ける階級區分に就て 地理學評論二ノ一〇

註六 國勢調査速報(世帯及人口) 昭和五年

同書に依るに内地人口密度は一方村 一六九人 山口縣は一八七人である。

註七 竹内常行 新潟富山石川三縣に於ける町村面積と地形並びに人口密度との關係 地理學評論八卷の七號

註八 石橋五郎 人口地理學 地理學講座 第十一回

註一〇 六島の人口密度は大島に最大と思はれる

註一一 小野學士 滋賀縣の高距と人口密度

註一二 東木龍七 日本群島の三角洲の研究 地理教育 昭和四年四月號

註一三註一四 石橋五郎 人口地理學 地理學講座 第十四回

註一五一六 佐々木彦一郎 職業人口構成より見たる地理區分 地理學評論六卷ノ九號

冬の感觸

特別會員 森 本 德 雄

蕪村の句に、

手燭してよき蒲團出す夜寒かな

こいふのがある。行李の底から丹前でも引っぱり出して六疊の間の火鉢のあた、かみを愛する頃には、白い本の頁の上にも冬のけはひが感じられる。夕暮の寒い驛に北國の方から來た汽車の屋根には、雪と一緒に冬が乗つてくる。

或る夜、硝子窓の棧に白い砂糖のやうな雪を、吹きつける風が残して行つた。間もなく、その雪は幾らか融け始めて部屋の内側の棧にしみこんできた、かうした晩にはリプトン紅茶でも飲みながら、いゝレコードを聞けば相應しい。

霰がパラ／＼と乾いた音をさせて物に撥ね返される。年の瀬もおし迫つた頃にもなるこ、何か買物の包を持つてあわだしい師走の町を歩いてみたくなる。幸福さうに澤山の買物包を抱へた人トンを着てみ、すく、すくのやうに懐ぐあいの温さうな人々は、きつこい、正月を迎へるこいだらう。

歸省の汽車の朝、車窓の露を拭いてみるこ白々とした朝明の中を汽車は走つてゐる。大阪近くなるとガードを走る電車の騒音が霜空に摩擦する。

雪の多い地方に育つた爲に雪なしに冬を知ることには困難だ。萩は雪の少い方であるが、それでも三學期になるこ烈しい風の後で、午後から雪がちらつき出すやうな日もある。玄關傍のヒマラヤ杉の冷たさうな針葉にみぞれまじりの雪が降りか、り降りか、り降るのを教員室の窓越しに眺めてみると、いわれのない明るい心持になる。しかし講堂の

屋根の邊に、北風が金屬的な音をさせて、粉雪を窓の隙間から吹き込ませるやうな日は心も晴れない。

週末から雪になると日曜日の朝は早く起きて、高俣か嘉年のスキー場に行く。福井、吉部と田舎へ入つてゆくにつれて積雪の量が多くなつてくる。雪のガウンを重さうにまこした杉木立に朝日が輝く、白金と紫紺の明暗の縞を雪の上に落す。

ぐうツミエレベーターで降りるやうな氣で丘の上から直滑降して、さて願て、二條の線が頂上から引かれてゐるのを見るに愉快だ。途中でもんどり打つて白熊が這ひ出たやうな格好で、四五間も飛んでしまつた杖を探さうとする先手を發見することは、實に滑稽なものだ。歸つてきて石のやうに冷えた体を湯ぶねに沈める時は、全身綿のやうになつてゐる。二三日は歩行にも苦しむ程疲労が除れないけれど、心は、スキー場で見ると少年の眞紅な頬のやうな明るさを持続する。

スケートはスキーに較べてつゞみ優美なものだ。自分の体を運ぶエネルギーは何處にも働いてゐることは思へないのに、体は鏡の如き氷上を、流星のやうに滑つてゆく。湖水や川の氷でやつたことはないが昨冬室内リンクで氷の上を流れてゆく人の群に交つて、音楽に合せ滑つた面白さは忘れられないものであつた。そうして思はず夜の十時頃迄も時をすごした。オーバの襟をたて、歸つてくると、まこまでも自分の靴音だけがつき纏つてきた。石造建築は冴えた月光の下に青ざめて寐て居り、銀行の鐵の扉は、金融資本の嚴重な防禦として、まるで永久に開かないものゝ如く石段の上に凍結してゐた。

この木戸や錠のさゝれて冬の月 其角

萬葉痴語

特別會員 津村 義男

回山上憶良の歌一首

憶良らは今は罷らむ子哭くらむ其の彼の母も

吾を待つらむぞ一巻三

酔境に浸ることは酒量の多少には拘らない。靜を動に、理智を感情に、醜惡の世界を夢幻のユートピアに展開させる酒こそ人生の魔物である。唐土に於ても王績は醉郷を愛し、彼の阮籍は酒樽の上に白眼を刮き、陶潛は悠然として南山を望んでゐる。酒を知るものは則ち人を知り、人を知るものは即ち自己を知るものに違ひない。己を知つて後はじめて吾々は天地の悠久と人間の假面を知ることが出来る。酔へば唄ひ、賦して痛飲した杜甫も亦、はるかに幻影を撫してゐた人と云ふべきである。一酔ひはてて世に憎むもの一つもなしほと我もまたありやし——三千鳥足のまま逝つた牧水は今頃どこで、よよこまるる新酒の香に酔ふてゐるこもやら、否々、かかる酔境禮讚は姑く割愛して冒頭に掲げた憶良の歌に就いて漫録しよう。

私は宴會の席上に於て、そこはかみなき歸心が、いつ知らず此の歌になつて、蘇つて來るのを覺えるこがある。而も、自ら憶良の心境には全く同化し得なまいでも其の氣持を揣摩し付度し得ることを悦ぶ。

山上、憶良は柿本人麿、殆んき時代を同うした歌人、然も人麿の所謂形式派たる絢爛、豪華なる格調に染まる事なく

模倣多き斯かる時代の風潮を他所に、只ひたぶるに寫實寫意の境をゆける萬葉集中異数の奇才である。

憶良は、聖武天皇の神龜三年六十七才で筑前守に任ぜられ、國守として筑前の太宰府に赴任してゐる。現在残つてゐる憶良の歌は、その殆んど總てが、筑前守に任官して以後の晩年作で、それ以前のものとしては、

- (一) 在三大唐時、憶本郷歌一首
 - (二) 紀州岩代の有馬皇子が結松の址を見て、長忌寸意吉麿が悼める歌に追ひて和ふる歌一首。
 - (三) 七夕歌十二首。
 - (四) 詠秋野花二首。
- などを數ふるだけである。

偕て冒頭の一首の意は、かくれたる所なく、「憶良は、もう歸らう、子も泣いてゐるやうし妻も俺を待つてゐるだらうよ」と謂ふので、その詞書には山上臣憶良罷宴歌一首あり。恐らく彼憶良が筑紫にあつた時、太宰府廳の宴席より退出せんとする際ものしたのであらうと思はれる。「憶良らは」と云つて可愛ゆく自分に呼びかけたころ、「その彼の母」と云つて吾婦を現はしたるところ、稚氣漫々として素描の鮮やかなる、實に古今以後の歌人をして愧死せしむるの概がある。惟ふに彼は非常な子煩悩であり、而もその子が偶々羸弱であつたがために彼の心は常に子の上に懸つて居つたらしく、有名な「宇利波米姿」の長歌は勿論、この一首に於ても「子哭くらむ」と云つて先づ、むづかり泣く子を案じてゐるのを見ても這般の消息を明瞭に物語つてゐるものがある、「今は罷らむ、子哭くらむ」と短兵急に疊みかけて來た敘法にも充分に憶良の風貌が覗はれると思ふ。然し或人は、哭く子云ひ、その彼の母云ひ極めて重厚に敘し來つた所、思ひは全くその婦に懸つてゐたものであると云ふかも知れないが、私はこの説を退けたい。尤彼

憶良は、「悔しかもかく知らませば青丹よくぬちことごと見せましもものを」——卷五——とある如く有名なる愛妻家であつたが故に、斯かる説も一應は頷かれるが、憶良の作歌的態度よりして、如斯迂遠な細工をやらうとは思はれぬ。憶良の常に持する所は、素直と單明にあつた。彼の歌は何の巧むところ、何の構ふところなしに眞向兩斷絶えず大膽に肉薄して行つた。憶良の歌の有難さは實にこれあるに依つてである蓋し茲に深く咀嚼すべきは、人生詩人憶良の歌である。

(一九三三、一〇、七)

作文講話

特別會員 久 永 祐 藏

素材の選擇—觀照—素材の表現—内容と形式の一致—萩の自然

近頃生徒の書く作文は十年前よりは大分變つて來た。物の觀方も、表現法も、時勢と共に餘程進んで來た。明治時代に學窓を出た人は、口語體の手紙が書けないが、近頃の人は候文が満足に書けない、文語文が自由に書きこなせない。これ程變つて來た。それはよいとして今も尙、時勢相應に月並な平凡な文章ばかり書いて、それ以上に出られないのは、ど

う云ふわけであらうか。平凡な月並な文章にはうんざりした、飽き／＼した。もう少し工風をしてみたらさうであらうか。もう少し苦心して、目に見えてよい文章が出来るやうになつたら、本人も嬉しからう。それは出来ない相談ではない。出来る相談である。そんならどうしたらいいかと云ふに、もつと素材の選擇を上手にするのだ。(ここでは未だ、表現されない感情なり思想なりを、内容形式共に一括して假に素材と名づける。)素材が文章の原素になるのだ。素材の選擇が拙ければ、いつになつても好い文章は書けない。自然の事物は、多種多様で、又千變萬化である。その中から素材を求めるのだ。そして素材の選擇をやるのだ。古から殖えこそすれ、少しも減少はして居ない、自然の事物から、君達は種々の書物で讀んだ事や、人が平常云ひふらした事ばかり探し求めるから、即ち素材が古いから、いつも月並な平凡な文章しか出来ないのだ。不斷書物で讀んだり、人から聞いたりした事を土臺にして、もつと突きつめて、千差萬別の自然の事物を觀察して見給へ。もつと心を虚にして、丁度心を白紙のやうにして、自然の事物を心に映して見給へ。そしたら、あれ程複雑な自然の事だから、君達の心情に、自然は種々なものを映してくれる。習作時代には書物を讀んだり、人から聞いたりした事と同じ物や、或は多少それと違つた位の物しか、自然は映してくれないかも知れない。それは止むを得ない。然しだん／＼稽古をつむうちには、今迄ちよつと人の氣づかなかつた美や、誰も文章に書かなかつた清新な物を映してくれるであらう。何も奇を衒ふのではないが、自然の中には、それこそ數へきれない清新な作文の材料が、掘つても掘つてもいくらでも含まれてゐるのだ。個人各々の性質が異なるやうに、自然の中から求める物も各々異つて来る。そこに尊い個性が文章上に表現される。又併しながら、人間の心性は大方似よつた物であるから、その人が自然から求め得た素材を、立派に表現すれば、それは他人にも立派に了解が出来る筈だ。そこに共鳴が起る。立派な文章は、かくして個性が立派に現はれ、且又人が誰しも共鳴する物でなければならぬ。自然の事物をよく觀察して、純眞な物、即ち作文に書かうとする物を觀取り、聽取る事を觀照云ふ。素材の選擇は、即鋭い觀照云ふ事になる理由は、これで解つたであらう。そこで素材の選擇が悪かつたら、好い文章は出

來ない事を、先づ第一に頭に入れる必要がある。

偕て素材の選擇が出来たら、今度はそれを、さう云ふ風に表現するかが問題だが、それは譯はない。素材を順序よく並べて、即ち統一を保つやうに並べて、その心に感じたまゝを素直に表現するのだ。心に感じたまゝを素直に表現する云ふ事は、言ひ易くして、仲々むづかしい事である。君達は、それが出来ないから、さうかすると、心に思つてゐる事と一致しない言葉や、或は心に思つてゐる事は、似もつかない綺麗な、こんなでもない言葉や、生意氣な氣障な言葉を使つたりする事はないであらうか。それがいけないのだ。不正直だ。それだから文章が上手にならないのだ。自分の觀照が幼稚でもかまはない。一年生なら、一年相應に幼稚なのが當然だ。それが自分の心情のすべてだ。自分の心情は幼稚だと思ふ事が第一いけない。そこで、自分の觀照したものを、知つてゐる言葉の範圍内で、寸分も違はないやうに表現する。出来るだけ自分の心情の丸寫しをする。其人の教養相應に觀照したものは、其人の有つてゐる語彙で、自然に表現されるより外に眞實の途は無い。そこに純眞と云ふ價値も生ずる。それが出来たら、即ち自分の考へてゐる事がびつたり表現出来たら、とても愉快であり、満足である。その文章には稚拙ながら素朴な美が光り、伸びゆく楽しい力が籠つてゐる。下級生の作文には、よくそんな、無邪氣な、その人の特長まで現れたのがあるではないか。自分の觀照の幼稚を歎くな。確かな觀照から出發した人は、學年が進み、智識や教養が深くなるにつれて、學年相應に觀照眼が進み、語彙も豊富になるから、従つて苦心さへすれば、表現も内容相應に、上手になるのが當然である。

内容と表現形式とは、一致せねばならぬ云ふ事は、大事な事である。處が、智識も殖え、語彙も豊富になるに動もすれば、内容と表現とが一致しないと云ふ邪路に立つ時期が来る。盛んに所謂美辭麗句を亂用しようとする。内容に相應しない詞を、無理に當嵌めようとする、何故かさうしたい、さうせずにはゐられない、さう云ふ時がある。心すべき時期である。自分の觀照と教養が進めば、立派な美辭麗句も心に消化される。一度咀嚼し、消化した美辭麗句な

ら、自分が無理に捻り出さないまでも、さうしてもその詞でなければならぬ時は、自然に出て出来るのである。そこを考へて、自分の観照眼を高め、好い文章を多く読んで消化し、内容と形式とよく一致するように苦心して作文すべきが要諦であらう。

作文の稽古は、自然の観照から出發するのが確實である。そしていつまでも、春は山々に霞たなびき、蝶が舞ひでは陳腐に過ぎる。萩に住む人は、その自然観照の點でも、美しい程恵まれてゐるではないか。

君達は、まづ柔かい潤ひを有ち初めた、春さきの土から、新鮮な匂を感じないであらうか。風は寒くとも、薔薇の赤い新芽を見て、春遠からじこは思はないであらうか。五月の頃學校の植物園に行つて見給へ。白い山香子の花に、蜂が唸つてゐる。微風に、椽の木の青葉や、ニセアカシヤの枝がさ、やいてゐる。楽しさうな木影が揺れてゐる。ここに、マイクروفオンを据ゑつけて、靜かな五月の歌を、都會の人に聴かせ、さてそのマイクروفオンを野に運んだら、今度は、琥珀色に熟れた麥を刈る音も、巢を失つて青空に啼く雲雀の聲と、空車の軋りと、小川のせ、らぎも、快活な農夫の高譚とが生れたての田園交響樂となるであらう。

湯上りの出陣を吹く夕風に、思はず嘘をしたら、君達はまづ第一に、爽冷の初秋を感じないか。避病院前の石垣の茨の、赤い實を、小鳥がチヨツ／＼と啄きに来る頃は、金谷天神のお祭もすむ頃だ。

堀内のくづれた土塀の雪あかりの中に、橙が一際赤う／＼、濱風に揺られて居る。あ、今朝は海も企いだかと思つて、私は、登校の路を急ぐ日もある。

自然の美は、いつも、至る處に一杯ころがつてゐる。

一 問題に就いて

特別會員 玉井 世 履

九月二十八日鹿児島縣立川内中學校觀察のまき同校模範試験の中で次の問題があつた何れ何處かの入試問題と思ふ
△ABCノ内心ヲOトス B,O,Cヲ過ギル圓ガAB,AC或ハ其ノ延長ト交ハル點ヲE,Fトス レバEFハ△ABCノ内接圓ニ切
スナラシム

早速之を五學年第二學期第一回の統一考案に出して見たところ大体二様の解法を得た

○考へ方結果ヨリ見テ△ABCノ内接圓OガEFニ切スルニヨリOハ△AEFノ内心デスル

(證明)EOヲ結ブOEFハ圓内四邊形ナルニヨリ∠OEF=∠ACO Oハ△ABCノ内心ナルニヨリ∠ACO =∠OCB
OECハ圓内四邊形ナルニヨリ∠OCB =∠OEA 依テOFハ∠Eノ二等分線ニシテOAニ ∠Aノ二等分線ナルニヨ
リOハ△AEFノ内心ナリ

△Aノ二等分線OA上ノ定点Oヲ中心トシテ∠Aノ二邊ニ切スル圓ハ唯一ツナルニヨリ△ABCノ内接圓ハEFニ切ス
○考へ方結果ヨリ見テ同一ノ圓OガBC,EFニ切スルニヨリ半徑トイフ方面ヨリ見テOヨリBC,EFニ至ル距離ガ等シ
ク

(證明)EOヲ結ブOG⊥BC OH⊥EFトスレバ △OGC△OHEニ於テ∠OGC=∠OHE=∠R Oハ△ABCノ内
心ナルニヨリ∠OCG=∠OCA OEFハ圓内四邊形ナルニヨリ∠OCA=∠CEH 又OBハ∠Bノ二等分線ナルニヨ
リ∠OBC=∠OBE ∴OC=OE ∴△OCG≡△OEH ∴OG=OH 故ニ中心O半徑OGナル△ABCノ内接圓ハHヲ
過リHニ於テEFニ切ス



生徒作品

大木

一年 久芳一人

母校の榎の木は高さ二十米、いつも僕等の通學するのを眺めてゐた。

四方を壓する巨大な老木はさながら大地から生え出た手の如く、大空へ向つてゐる。

四方へ伸びた枝についた葉々は日光を縁にそめ、方々から。聞えて来る蟬の聲をじつと聞いてゐた。

落着いた、静かな、人を壓する力のある老木、此木は僕等によつて繪に書かれ、傷つけられ登られて、僕等の小學校時代の腕白の唯一の思出となり、有備館の南に巖

然こしてそびえ立つてゐる。

狂ふ海

一年 久保一郎

薄暗い今日の陽、海は荒れてゐる。

大きな波がきて岩に眞白にくだけてゐる、た、きつけられた様に悲鳴を上げてゐる、波の音空の一隅に出た黒雲はだん／＼と擴つて行く、あわたしい風の音風にじまつて雨が降り出した。ぼつり／＼砂の色が變つて行く。工場の汽笛が重苦しく響いて来る、濱の松が風にをどり

狂つてゐる。

すさまじい嵐だ。「またしけど、二三日止むまい」。祖父

は海をながめながらはけしい口調で云つた。

日は靜かに暮れて行く。海はますます荒れだした。

唱歌帳

一年 澤本良秋

二時間の休み時間になつた。念の爲に今一度机の中を調べて見たがやはり唱歌帳は見えなかつた。サイレンが鳴つたのでしかたなしにおすおすしながら講堂に入つた。

僕は席を立つて言はうさするさ先生はもうピアノを弾き出された。出そぶれてしまつて、折角今まで言はうさ思つてゐた事も言へなくなつた。仕方がない後で言はう。皆と一緒に元氣よく唱歌を歌ひ出した。

それがすむさ先生が黒板に向つて音階を書き出された。席を立つて先生に言はうさ思ふけれども字を書いてい

らつしやるので言ひにくい。

しやうがない誰かに紙をかりて書かうさおきらめた。

それでも先生におこられるさいけないからと思つて下を向いて唱歌の本を讀んで居た。

早くサイレンが鳴ればいゝと念じてゐると先生は教壇からをりて僕の方へ近づいて來られる。動機が激しくなつて來た。先生の目は僕を見つめてゐられる様だ。こんなこゝであつたら早く言つておくのだつたのだがさ今更ながら後悔される。先生は遠りよなしに近づいて來られる。今少して僕の前と思ふ頃先生は元來の方へ引きかへされた。僕はホツミ安心した。給使が一分間でも早くサイレンを鳴せばいゝのにと思つたが中々鳴らない。

僕は人蔭にかくれてゐて、一時も早くさ念じてゐた。間もなくサイレンが鳴つた。

僕はほつこして胸をなで下した。

水瓜

一年 三原 莊作

水瓜！水瓜！これ程僕等の心を引きつける、夏の果物は有るまい。

水瓜を食べる所は色々ある。隣家も良い、親類も良い水瓜畑も良い。しかし、唯、美味しく食べると言ふのなら、自分の家で食べる程良い所は無い。そして、それも夕方だ。

湯上りのさつぱりした身体で、明けはなした縁側にバシツ一枚ですはつて、風鈴の音を聞きながら食べるのだ。涼しい風がそよ／＼と吹き、空は晴れ渡つて一點の雲も無く。幾萬の星がきら／＼と輝いて居る。

原始的方法は水瓜畑で食べるのだ。薄暗いカンテラの光を頼りに、ざくりと庖丁を入れると、赤い身がほつかりと出る。思はずごとりとつばを飲む。——と言つても水瓜泥棒ではない。

通知簿

一年 山本 惠

僕は七月二十日に始めて中學の通知書を手にした。教室のすみで心配しながらそつと開いてみた。前から悪いとは思つてゐたが餘りの不成績に息がつまる様な気がした。僕の成績を心配しながら待つてゐるであらう両親にどうしてこの悪い成績がだされよう。待ちに待つた楽しい夏休今日は朝鮮に向つて出發する日で嬉しくてたまらないが成績の事を思ふと、つと暗い氣持になる。けれども幾ら悔んでも仕方がない事だから、二期期は力のかぎり勉強しようと、自分の心にちかつた。家に歸つて通知書をだした時、其の場にゐられないので、便所に入つた。出て見ると、父は通知書をにらめつけてゐるし、母は涙ぐんでゐた。僕もたまらなくなつて、其の場に泣き伏した。楽しい夏休も面白くなかつた。

せみ

一年 阿武 弘愛

此の頃はせみがたくさんゐる。小さい羽、針のやうな長い口、固い目、見るからに、かわいらしい。僕の家の大木に来て鳴く聲も又、じつにかわい。

僕の弟はいつも取つていじめてゐる。あゝかわい、せみ。木蔭で楽しく鳴くせみは、悪い小供等にいじめられてゐることをたびたび見る。その時の僕の心はたまらなくなるほど僕はせみが好きである。夏の日盛にも聲をそろへて鳴くせみは秋となればゐなくなると思ふと淋しくなつて来る。あゝ今居るせみ楽しく鳴けよ。いつまでも聲をそろへて楽しくなけよ。

下關の停車場

一年 梅田 昂之

山陽線山陰線の終點下關は、よい停車場である。もう早くからボーと汽笛をならすので中々やかましい。山陽線を、すさまじく、走つて来た急行は白煙を、シュ／＼

と勢よく、ふき出しながら、物すごい勢で、やがて下關停車場についた。乗り込む人、下りる人で、おす／＼の大にぎはひである。又關門連絡船の方へ、かけて行く者もある。やがて船は白波を立てて来た。今にも岸につかうとした時、鼓膜が破れるやうに、高い氣笛をふいた。一同はひや／＼とした。夜は「日和山より、海峽見れば、船の光がびか／＼と」、此のやうに、大きな、關釜連絡船が白波をけり、する／＼、とすべつて行く。嗚呼活氣のある下關停車場。

魚釣りの半日

一年 佐伯 哲郎

ボン／＼／＼と我が船八千代丸は白波を切つて進む。空はコバルト色。實に魚釣り日和だ。

さあ、落ちない様に、と上陸した、所は笠山の一番出張つた岬の所である。父や叔父が餌の鳥賊を切つて居る間に僕は一寸海底を鏡で覗いて見た。雄大豪壯な磐石、その上に波の寄するまゝにゆらり／＼と動く海藻、その間

を縫つて泳ぐ魚の一群、全く平和樂土だ。本當にこゝに大きな鏡をつけて世界中の人に見せてやりたい。

餌も出來た。これからいよいよ魚釣りだ。岬の大きな巖に腰をかけて糸をたれた。すると何處から出て來たのか、何拾となくたくさんの、のめりこが寄つて來た。これは口が小さいのか、一向釣れない。そこで、餌を動かして追ひつ拂ひつしてゐると、向うの岩影から、すうーと大きなぼてが來て、ぱくりとやつた。それつと上に乗けると長さ三四寸位のが釣れた。生れて始めての事であるから、喜んで振り廻すと又落ちてしまつた。あゝと僕は一旦竿をうつちやらかして泳がうと着物をぬぎにかゝつたが、又やはり釣りにかゝつた。

烈日の下に

一年 水津雅臣

今日は非常に暑い、有名な甲子園とは、どんな所かと思ひつゝ、電車や自動車を走らせ、やつと甲子園に着いた前は廣い公園、空は澄み渡つて、パイロットや、寶塚少

女歌劇と、大文字で書いた廣告の輕氣球が、さも身輕さうに、二三空中に浮いて居る。かつて見た事のない、大きい建物の入口には悉くべ切と記してある。仕方なく一般席に行き、人浪の中を押分け顔を出せば、スタンドは黒山の如く満員、緑の芝生のグラウンド、烈日の下に、元氣よく戦つてゐる、水戸商業、對大連商業の試合、大連商業投手、柴草君よく投げ、捕手藤原君よく受け、「アウト」と大聲で、審判が宣告すれば、見物人一時に雷の様な騒ぎ、中にはやちり出す者もある。烈日の下、此所甲子園野球戦ばかりは、全く暑さを超越した所である。

野菜畠

一年 山本智章

緑の葉に陽をうけて居る野菜畠、或時は肥料をもらつぶん／＼にははしてゐる。野菜は畠が吸ひ取つた肥料を我が物としてさもうまさうに吸ひ取つてしまふ。或時、畠に行つて見ると此の間植ゑられた馬鈴薯がひ

立派な人間にならう。

梨の木

一年 生駒良三

考へて見ると、あのひよろ／＼した梨の木に花が咲いたと言ふのは實に不思議な事である。或人の説によると梨の木は悪戯しないと花が咲かないと言ふ事である。始め木が生えた時は全く見當がつかないので數十本の中二三本程残して残りは皆引いて捨てられた。其の後木はだん／＼太つて屋根位の高さになつた。母は此の木に物干竿を掛ける爲に幾度か枝を折られた。其れが去年の三月の終りに七ヶ所に花を咲かせた。一所に三つ四つ位花を附けた。家の者は皆知らなかつたのを花賣の小母さんが「梨の花が咲きましたね」と言はれたので始めて其れが梨の木である事が分つた。父は

「一年目には花が咲いても實は落ちるものだ」と如何にも未練有りさうな口ぶりで言はれた。月日はぎん／＼立つて行く、梨の實もだん／＼太つてくる、もう母の親

よつこり、圓い頭を出して陽を仰いで居る。驚いて土をかけて置いた。その向ふには幾うねも大根が一行に行儀よく並んで、青々としてゐる。二三日もたつて行つて見ると見違へる程大きくなつてゐる。畠は砂地でやさしい土がよく耕されて居て、秋の野菜が見事に出來てゐる。

大木

一年 河野米太郎

風がふく、びゆう／＼と音を立てつつせまつてくる。木の葉がゆれる。ふきとばされる。小さい木は折れ飛ぶ。が、何百年もたつたと思はれるこの松の木、彼はびくともしない平然としてそびえてゐる。小木のさわぐのを靜かに見守つてゐるかのやうに。

實に頼もしい、力のあふれた感じのする木。僕もこのやうに、他から信頼を受けるやうな人になりたい。しかし、僕は今まで、こんな感じを他のものに持たしたか。？この大木を見たからは、大木にまけないやうなえらい

指位になつた。青い艶々しい實だ。まだ落ちぬ。父の言葉
葉を信じて居るから可笑しいと思ひながら日を過した。
ちい／＼蟬が鳴き出す初夏が来てはまだ落ちない。或日
父が「紙に包むに優しい實が出来る」言はれて背の届く所
を、紙で三つ包まれた。或日の午後氣紛れに畠に出た。
數へて見るに大事な梨の實が二つ足りない。落ちたのだ
らうかと思つて落ち口を見ると切り取られた痕がある。
誰の悪戯であらうか、悪い人も居るものと思つた。食べ
られない梨の實をもぎ取るとは。其の後又梨の實が
二つ足りぬ。父でさへ手の届きにくい處で有るから必ず
竹か何かで打ち落したのであらう。

紙で包んだ分は相變らず中で太くなつてゆく様である。
此れだけはさうか人に取られない様に大きくなつて呉れ
と僕は心からいのつた。

涼しさ

一年 金子 清

外は一面緑の田だ。青い青い稻葉が朝吹く風一しよ

に震へて居る。清い限りない空気に包まれて頭は澄みき
つてくる。四邊はまだ眠つてゐる。
から／＼／＼近所の戸をあける音が聞える。まだ明けき
らぬ向ふの川から吹きよせる朝風の涼しさ。畔道の草葉
々々に露が滴つてふんでゆく脚はひざままでぬれる。
夜が明けた。露は日光にてらされて五色の水晶の玉のや
うだ。涼しい朝だ。

停車場

一年 森井 潔

汽車の速力が鈍つたと思ふとスーと止つた。お、十一
時間乗通して待ちに待つた香住停車場だ。停車時間は三
十秒、重い荷物兩手にあせりながら漸くプラットホーム
に降りた。その途端に誰か僕を呼ぶ聲が聞える。見れば
父だ。につこり笑ふ父だ。僕の下車を案じ迎へに來られ
たのである。思ひがけない嬉しさに親なればこそと思は
ず顔をうつむけた。同時に惱みの通知書を問はれはしな
いか胸をさき／＼させながら預けた手荷物を受取に行

つたが僕のトランクは下し忘れて汽車が行つてしまひ、
なかつたので父が心安い運転手に次の自動車を受取つて
もらふやうにたのんでおいて、僕達はすぐ我が町さして
急ぐ自動車の人となつた。

蚊

二年 小橋安次郎

今夜は何となく暑苦しい晩だ。机に向つて鉛筆を走し
らせて居る手がしつとり汗ばんで来て、ともすれば止
り勝ちである。蚊取線香からは糸の様な煙が絶えず輪を
畫いて立昇つて居る。鼻を打つ臭に頭を刺激され逆上し
た様だ。はつきして氣を取り直し筆を置いた時「ぶん」ミ
微かな羽音がして何か耳の朶へ止つた様だ。そつと手を
やるに、又「ぶん」ミ音を立てて、一匹の小さい蚊が飛で
行つた。と見て居る内に香煙の中に巻込んで、くる／＼
舞ながら落ちて行つた。「こん／＼」と時計が九時を報じ
たので、今晚はこれまでと道具を仕舞ひに掛る。表變へ
をしたにはやかな疊の上には、点々と薄墨色の斑点の様

に酔倒の蚊が横たはつて居る。さつきの蚊もこの中に交
つて居るだらう。硝子戸を開けると皆思ひ出した様に表
庭の方へ飛び出して行つた。火を滅し消燈して寢床に入
つた時残つて居たらしい蚊が、最前の敵思ひ知れ、さば
かりに四方から攻め寄せて來た。今夜も又これ等の蚊に
たつぷり食はれることだらう。隣では妹の鼾聲が微かに
聞えて居る。

旅行

二年 上利 丈夫

「チン、ゴオツ／＼」。船は大きな音を立て、棧橋へ着い
た。船中の人々は昇降口より續々と吐き出される。やが
て僕等は神社の前に到る。大鳥居は折からの干潮に、太
い足もとまで目に入る。神社は幾棟か數限りなく東西南
北に建つて居る。それが長い廊下でぐる／＼と廻されて居
る。是等の景色は繪葉書など三寸分違はぬが、色が繪の
如く鮮やかに濃き朱ではない。
洗ひ清められた廊下を靜肅に傳つて、寶殿、國寶の源義

家の鐘、等等、拜觀しながら出口に来る。

無数の鹿に口を寄せられつゝ、平重盛手植の松、國寶弘法大師白木の木像等を見、紅葉谷公園を過ぎ、五重塔、二重塔を見上げて、町の中へ入る。道の兩側は一軒残らず、玩具、細工物を商ふ店で、「能くも此れだけの家が暮して行けるものだなあ。」と感心しつゝ、二三の物品を求めて、大鳥居を過ぎ棧橋へ出る。十分後、僕等は神社に敬意を表し、名残を惜みつつ、宮島を去つた。

櫻

二年 岡崎 寛人

一片の花瓣が音も無く地上へ落ちた。もう櫻も末路だな。僕は獨言の様に呟いた。突然、友のA君が、「何、これも仲々い、ぜ。」と云つた。地面は、だん／＼白く蔽はれて行く。「ばつ」と鮮に咲き、人の惜しむ間に又、「ばつ」心残りも無く散つて行く美しさ。そは、櫻花が我が國花と爲つた所以では無からうか。乃木大將の如き、爆彈三勇士の如き、彼等は此の櫻の精神、大和魂の權

四二

化だつたのだ。然し、美しい櫻も何の苦も無く、あの様な美しさを人に見せ得るのだらうか、否嚴寒を凌いで、始めて花は開くのだ。櫻咲く國、大日本帝國の臣民たる我等は、美しき櫻の精神を以つて精神とすべく努力せねばならぬ。

夕立

二年 岡村 大一郎

今日は晝から大變蒸し暑く、天氣も曇り勝だ。あまり暑いので表へ出てみると、向ふの山の頂に怪しい黒雲が出てゐた。と思つてゐる間に、はや雲は頭上まで擴がつて来た。冷い風がサーと吹く。向うの家の人が、大急で干し物を取込んでゐる。

ザー、もう雨は瀧の様に降つて来る。とん／＼と聞える雨だれの音も、だん／＼早くなる。庭も道も川の様だ。雷が恐しい音をしてゐる。弟が臍を抑へて此方へ走つて来る。

もう雨も次第に止み、墨の様な暮もだん／＼はけ、所々

に青空が浮き出して来た。雲の間から太陽かとほけた様な顔を出した。燕が二三羽楽しさうに飛んで居る。松の木の間がきら／＼美しく光る。屋根も石も木も草も、綺麗に洗はれて生々として来た。又遠くの方で雷がなつた。

成績通知書を觀て

二年 伊藤 大馬

一學期は餘りに遊んだから駄目だらうと思つて通知書をもらつた。やはり駄目だつた。氣候の非常に良い、努力も爲易い時期を奮闘も爲ないで空しく過した報だ。非常に残念であつた。然しもう如何に悔んだからこゝて追付くことではない。

思へば一學期がたつただけだ。まだ二學期も三學期もあるのだ。

大いに努力奮闘何物にも屈せず勉強して良い成績を取つて、父母からも賞められるやうにならうと覺悟してゐる。そらいふ風に一學期の成績を觀ると努力もしないで懶け

夏の朝

二年 田村 正好

た跡がわかる。これに鑑みて二學期は復習豫習を忘れずに行つて良い成績を取り、一學期の不成績を回復せねばならぬと思ふ感が胸一杯である。

寝苦しかつた夜が明けて、爽かな朝になつた。冷やりとした風が青い稻田を渡つてそよ／＼吹いて来る。霧口のあたり川に沿うて、眞白な霧が一面に濛々と掛つて、山々は頂だけを、ぼこり／＼出して居る。南明寺も霧に包まれて、今朝は薄ぼんやりと見える。向ふの蜜柑畑の小路から、村の青年が二人、仕事着の姿も凛々しく生々とした野菜のとりどりを、せきかこに山こ積んで、擔の棒も撓はに出て来た。庭の百日草には、早蜜蜂が訪れて居る。日照り草はまだ完全には開ききらないで、蜂は門を開ける／＼と戸を叩いて居る。此靜かに爽かな朝の景色も、今少したてば、あの太陽が強烈な光を送つて来るだらう。さあ朝食前の散歩がてら、昆蟲採集に行かう。

四三

競技會を觀る

二年 山根 忠雄

日本晴の好天氣。

午後の日光はグラウンド一ぱいに満ち、萬衆の觀覽者を照らして居る。

先づ百米第一豫選。選手はスタートに就いて今や遅しき出發を待つ。「用意」朗かな出發係の聲。萬衆は緊張して咳一つ聞えない。「ドン」スタートから一齊に白い塊が出て忽ち數人に分れた。各人の間隔は殆ど無い。萩中のH君が先頭に出た。「あつ」抜かれさうだ。併しH君は速い。ラスト物凄く、遂にテープを切つた。間もなくメガホンから流れ出る審判の聲。第一着萩中H君。タイム〇〇「ワー」歡聲が揚る。

かくして萩中の意氣は昂り、勝利の榮冠を贏ち得た。

我が趣味

二年 土井 千幸

私の第一の趣味は、繪を畫くことである。自然の美を、

ぐ歸郷を急ぐ心がぞく／＼として湧いて來た。汽車に揺られつゝ居れば今夜食卓を共にする父母や弟妹の顔が目の前にちらつく。進むにつれ田畑・山・海皆幼兒からの見覚えのある景色であつた。陽光の激しく當つてゐる海面や、青い山にも言ひきれない僕の喜を分けてやりたかつた。進んで江崎驛に着いた。汽車から降り馴染の自動車に乗り家に歸つたのは午後四時であつた。

夕立

一年 有田 敬

草木は繁茂して強さを競つてゐる夏だ。雲までも強さを持つてゐる。いや雲が一番強さうだ。ちよつとやそつみの風ぐらゐは弾き返されると思ふ。僕はそれが好きだ。僕は元來如何なるものよりも強さが好きだ。それで夏の雲々有つ、夏の空が好きである。その中で特に痛快に覺えることは、天の一方から夕立雲の襲來する時である。殊に薄墨色なのが漸々擴がつて來る時は、何とも云へぬ

四四

一本の鉛筆と、一本の筆で、白紙に立派に畫き現した時の嬉しさは、口や筆で現はすことは出來ない。繪の中で殊に趣味の深いのは家外の寫生である。新鮮な空氣を思ふぞんぶん吸込み「うん」「うん」畫いて行く中に氣心は次第に太つて行く。目を大きく、又細くして、自然を眺めては白紙を眺め、幾回もなく同じことを繰返へして、畫き上げた繪を遠くに置いて眺める。自然の美を取り上げた時の愉快さ、奥深く底深い、きつしりとした繪を、自慢しつゝ、ちつと見入つてゐる中に、日暮れになる。此れが僕の何よりの楽しみだ。

歸省日記

二年 小河 博

七月二十日晴。今日は歸省の日だ。午後一時寄宿舎を出て夏の陽光を浴びて玉江橋を渡る。下で二三人の子供が魚を取るのを見て、郷里の河で遊ぶ弟の顔がちらつく。松の間から指月山を願て玉江驛から汽車に乗る。發車するに又指月山を願る。何だか寂しい氣持になつたけし、す

威壓を感じるに共に、又言ひしれぬ畏敬の念が起つて來る。大自然の力に云はうか。神祕に云はうか。自然の前には我々の力が如何に微弱なるかと思はれる。それがやがて電光を放つ。雷鳴が轟き出す。突然猛雨を叩き付ける。もう此の時は、人間の小さな驕は全滅である。夏の空は、我々に何ものかを思はせずにはおかない。

游泳

二年 中島 正信

老樹森々と繁茂して、翠綠滴る様な木蔭で運動したり、或は方々の山々へ登攀して、暑さを凌ぐのも、夏の樂の一つであらう。しかし河や海で游泳するのは、又一段楽しいものである。のみならずクロール、バツク、拔手、平泳、横泳等種々の泳ぎ方を覚えて、競泳などするのは最も勇ましい。水泳は、海國男子として最も必要にして相應しい技である。されば年々講習會を開いて、此技を練習するもの多きは誠に喜ばしいことであると思ふ。

四五

西瓜

二年 大藤 威

「ウワイ、大きなが生つたぞ。」嬉しさの餘り大聲を立てた。去年までは榮養不良のペー見たいなのばかりだつたのに、今年は六疋もある大きいのが、彼方へごろごろ此方へごろごろして居るのである。叩いて見ると。狸の腹鼓の様にポコンベコンと鳴るので、持つて居た鉢で、一番大きなを摘み採り、直にそれを持歸り、「どうぞ紅くある様。」にと祈りながら、「西瓜太郎踊り出でよ。」とばかりに、切つて見ると、中は眞紅に熟れて微な香が漂つて来る。大に喜び、家族團欒して味ふ時の旨さ。又自家の勞作に因つて結實した云ふ關係上、彌が上にも甘く思はれた。楽しみながら忽ちの中に大西瓜を平けてしまつた。

夏の朝

二年 藤永 堯

曉起、寢床を離れて外に出づれば、四邊は霧に包まれ、

四六

もう蟬の一番がけに周囲の空気を震はして居る。東西に連る御岳の上峯を望めば、ここは靜に霧の衣を脱がんとして居る。見よ門田の稻葉を渡つて朝の涼しい風の吹き来るを。暫くして、東の空は紅く色どられて、朝日は將に山の端より昇らんとして居る。嗚呼爽快なる夏の朝よ。此の元氣を受けて總ての生物は、皆一日の活動を始めるのである。夏の朝は、夏季休暇にとつては、特に趣のあるもので、我等歸省學生の、故郷の夏の朝に臨むことは、故郷に對する一番の親しみである。

嵐の夜

三年 藤田 正

雨戸をびつしり閉めて、蚊帳の中に机を入れ僕は獨り本を讀んだ。電燈の光がとほくと消ゆかゝる、僕は其の都度机上の電氣をかばう様にして、いら／＼した。ビュービューーそれはものすごい風の唸りだ。ギーギーーそれは杉の木と杉の木とのさしる音だ。ビショ／＼雨が降つてゐる。その雨が戸にうちつけてバリバリ

月の夜

三年 水戸邦男

「ポーンポーン」何時かを知らせる教會の鐘が夜の静けさを破つて聞えて来る。床の上にくろけて居た私は思はずうつとりして鐘の音に聞きこまれて居た。「おい散歩に行かないか。」と云ふ兄の聲にはつとして早速散歩に出かけた。

今しも教會の鐘は鳴りひびいて居る。室内より外に出た私は思ふ存分に大氣を吸ひ込んだ。涼しい夏の風は尙更に涼しい様だ。

空を見上げると金銀をちりばめた様な星が銀河をなすキラ／＼輝いて居る。

月は星にもおさらじと、山の端より盆の様な眞圓く眞白い色彩を取つて下界を照らして居る。

實に氣持よき晴やかな夏の夜、又月の夜だ。

海面は月の光にキラ／＼と照らされて眼も明けられぬ程光り輝き、小舟はさもゆるやかに櫓の音靜かに海面を

四七

……園中の僕の家があまり小さいものか、強風はぐさぐさうごかす。あまり烈しい風なので、僕の心も自然と荒んだ様になつて来た。じーん心をおちつけてみると、強風の狂ふ間に間にコロ／＼チリ／＼さかばそく蟲が鳴いてゐるのが少しばかり聞える。その聲は嵐の中の白百合より、もつともつこ可愛氣であり亦寂しさうであつた。嵐はビューミ、うなつてその歌をもみ消す。西の濱も菊ヶ濱もゴーゴー山割れのする音の様に波の音が夜空にもつて聞える。晝間指月橋の上で見た山程の波が思ひ浮んだ。晝間より尙物凄く、夜が更くるにしたがつて嵐ははけしくなつて来る

便所の所の硝子戸際にふと立寄ると白月夜だ。「ほう嵐の夜に月が出てゐるこは、不思議のこつた。」僕は獨り言を云つて、指月山を見上るこ、こんもりとおぼろに、それでも平常の月夜より尙明る見える。家の前の桑の木もはつきり見える。月夜にきつこ一二羽逍遙する鳥も今

睨だけは出てゐない。

なで走つて居る。

波打際に立つて居た兄と私とは、打ち寄せて来る波の美しさに見入つて石を海の中に投げて居た。

最早十時だ。私は兄と共に海を後にして家にと急いだ。

月は今にも松の枝にかくれんとして居る。

大氣は自由に流れて居る。

煙 火

三年 貞本 尙

「今夜は壇ノ浦海岸で花火が有るぞ。」ミ夕食を取りながら皆が話に夢中になつて居た。「ズドン！パリツ／＼！」
「アラ、！」ミ皆臍の上に箸を置いて、氣をいら／＼させて居る様だつた。早速、兄さんと散歩がてら、見物に飛び出した。人々の黒山の上の空で、或る時は噴水の吹雪の様に、又連続的にパリツ／＼ミ空に錯裂する有様を、海岸でじつと見るのも、實に勇ましく、氣持がよい。
澄宮殿下の御來關をお祝し奉る花火まで、關門の精銳ぞろひの花火だ。次から次へと、種々様々に、赤青黄茶こ

四八

色調の變化は美的の至りではあるまいか。火の粉も時々散つて来て戦場の様な——「シュウ／＼！ズドン！」と弾丸の様な物凄さは氣分をすつこさせる。
やはり煙火は夏の夜の景物である。

山 路

三年 福田 寛雄

僕等は歩いて歩いても、なほ長々ミ続く山路を歩き續けた。西の山近くの空から照らす月の光の爲に深夜の山路も微かに白く浮き出して見え、其の先は黒闇の中へミ吸ひ込まれて居た。よくも今迄生きながらへて居たと思はれる様な螢は、それでもあたりを青白く見せては居るが、其の光は弱々しく見え、木の葉は露でしつとり濡れて居た。夏草繁き路傍には尾花の間から、はや夏も終りになつたミ云ふかの如く、秋の蟲の音が靜かに而も落つて聞え、何もなく初秋の氣分がひた／＼と身の周から迫つて來たのだつた。人も家も皆寢静まつて居る。此の秋も間近かな八月の眞夜中に、蟲の音だけは何處まで

行つても絶える事なく聞えて居た。

白い霧が又音もなくあたりにたちこめて來て、洋服も手拭も皆濕つて來た。月は山に没しかけて、雲一つない空には星が薄く各々隔たりを保ちながら瞬いて居た。然し蟲の聲丈は霧がかゝつても變らずに歌ひ續けられて居た。西の空をほんのりと白ませて、遂に月は山蔭に没してしまつた。星が一つ月のは入つた山の方へ、恰も月を追ふ様に流れた。流星!! 我々は其れを眺めつ、これから幾里かの暗い山路を次第々々に強くなつて來る星明りと懐中電燈の弱い光を便りに黙々と歩き續けた。

蜻 蛉

三年 中村 五郎

あまり暑いので縁側へ出た。

弟がぬき足さし足、ざくろの木に近付づいて行く。すつと手をのばした瞬間に大きなやんま蜻蛉が空に飛び去つた。弟は蜻蛉を取るのに大分苦心して居るらしい。弟の後には隣りの子供がついて居る。多分隣りの子供に取

つてやるのだらう。均整した四枚の羽がひら／＼ミ空を舞ふ。やがて竹垣の緒にとまつた。二人は又そうつミ近づくと、今度は見事捕へた。隣りの子供が網を張つた籠を出す。もう中には四五匹入つて居る。二人はしきりにほら、笑む。籠の中の蜻蛉の数のふえて行くのが楽しいのだらう。もう物にとまる蜻蛉を取るのはあきたらしいやうだ。今度は小屋から笹竿を一本持つて來た。向うにはしきりに精靈蜻蛉が舞つてゐる。弟はやにはに追いつけて行つて一匹た、き落して隣りの子の籠に入れやうとすると、隣りの子はそれを取らうとしない。やがて「精靈蜻蛉を取るミお盆が早く來ないミお母さんが云つたからそれは取らない。」ミ其の子は云つた。隣りの子供は盆の來るのを待ちわびてゐるらしい。弟は其の弱つた精靈蜻蛉の仕末に躊躇して居る。

風

三年 香川 朝政

ささささーミさつきからしきりに風が樹をゆさぶつて

四九

みる。窓からのぞいて見るに、西の空は一面に薄雲を流した様にさんより曇つてゐる。今にもばら／＼と雨が落ちて来さうな様子だ。さう又風が吹いて来た。左手の道路に臨んで生えてゐるさくらの木は大きく根本からゆら／＼とゆれてゐる。塀際の藤の木は風の吹く度に葉を波の様にひら／＼させ、屋根の上に延びた細長いつるをゆら／＼と上下左右に振つてゐる。「盆が過ぎたら風も涼しくなつて来る。」とお母さんが暑い盛に何時も言つて居られたが、成程今日なごは吹く風が大分涼しい。然し曇つてゐるからちつとしてみても眠くなる。ふみ風が止んだ、と思つて見上げるに頭の上で堅さうな青橙がゆら／＼と輪を畫いてゐた。雨も又ばら／＼と降り出した。

煙火

三年 田村克介

「オヤ、こんな物が落ちてゐる。」と言つて拾ひあけて見ると、それは支那人の人形を書いた紙の中へ花火線香の

五〇

様に巻いた物が入つて居た。家へ持つて歸つてあけて見ようと思つたがつひその日は忘れてしまつた。數日後、其の支那人の人形を想ひ出して、探して見ると戸棚の隅へ轉けて居た。今晚はして見ようと思つて忘れない様にして置いた。晩飯も済んで散歩に出て花火線香を想ひ出したので歸つて始めようとするに、妹達が兄と一緒に来た。兄が「俺がつけてやらう。」と言つたので、隣寸と花火線香を渡すに「飛ぶかもしれんから危いぞ。」と言つたので、妹達はそこをよけた。「さつ!!」隣寸をすり花火線香につけるに、ちり／＼と頭の先のでた所が燃えていよいよ頭につかうさした時、「ばん!!」大きな音がして頭が飛んでしまつた。妹はあれで終りかと物足りなさうな顔をして居た。僕は以外だつた。

水泳着

三年 田中正明

僕は今年水泳着を買はなかつた。その代り安い小さいへこを買つた。水泳着より遙かに安くて丈夫である。水

泳着を着てゐる友達は、皮膚が出てゐる所だけ黒くなるのを喜んでゐた。僕はそれが氣にくはない。おなじ黒くなる様なら身體全部黒くなる方がよいと思つてゐる。僕は水泳着がとにかく嫌ひだ。あつさり身體をさらけ出すのが好きだ。それが僕が小さいへこを買つた所以だ。僕の氣性がへこを買はせたのかも知れない。僕が友達にへこをすゝめるに、必ず誰でも「へこ一つでは體裁が悪い又野番に見える。」と云ふ。僕はその意味がわからない。僕は僕のへこを愛用してゐる。海でも川でもへこで泳がないと言ふ事はない。人に野番と云はれても僕は氣にしないで喜んでゐるぐらゐである。

氷泳着

三年 安野 謙

僕は七月に未だ學校のひけぬ頃、只の三度、海へ水泳に行つた。だけで、さう／＼夏休み中一度も海へ行かなかつた。

行かうと思つても何しろ海は遠いので臆劫ではあるし

、又その暇も殆んど無かつたから、つい行けなかつた。それでたつた三度行つた中で、その最後の日に、海から歸つて、水泳着を洗つて軒先の竿に吊して乾して置いた儘で、今だに一月以上も経つのに、未だその儘ではつてゐる。その水泳着は風が吹く度にゆら／＼と揺れながら、何故、お供をさせて呉れぬかと恨めしさうに僕を見下して白眼で居る様にも見える。僕も亦水泳着が恨めしいのでは無いが、何となく、それを見る度に恨めしい感じがするのだ。六月頃には、今年こそ眞黒になつて……。と思つて居たのに、と考へると自分の黄味が、つた青白い肌がつい氣にか、つて、實にたまらない。さう思ひながら不圖、例の水泳着を眺めやれば、折からのそよ風に、靜かに揺れながら、海へ行かう／＼僕を差し招いて居るやうに思はれた。

蟬

三年 居田 誠

親類から来た男の子供が蟬を取つて呉れさせがむので

朝早くから内を出た。眞夏も過ぎて初秋の朝日が照つて居た。あちらこちらの櫻の葉影から蟬の聲が聞えて来る。漸く一匹みつけて取らうとするとチツと逃げた。向うの木に止つて直ぐ鳴き出した。蟬は單純な者だ。もうチイ／＼蟬は居なくなつて、油蟬やシヤ／＼やミン／＼許りだ。

右往左往して木の間を縫つて居る間に五六匹取れた。足や下駄は露でびつしよりに濡れた。歸りに蟬は皆逃かしてやつた。子供は何かい、事でもしたと思つてゐる。

煙 火

三年 刀彌彌太郎

此の間まで體が悪いと云つて山口の赤十字病院に行つて居られた、長岡の伯母さんが一昨日歸られて御土産に煙火をいたゞいた。茶目な二番目の弟の守はもはやマツチを持つて来て「物置は暗いから晝煙火をしてもよい。」と云つても煙火をする氣でゐる。末の弟は煙火は夜するものであるから夜が來たらするのだ。」と云つてゐる。

火をして夜の更けるのも忘れて楽しく遊んだ。

嵐の夜

三年 山中健一

強い風が一風吹いて電線がヒュー／＼さうなる。隣りのいふがざわ／＼大揺れに揺れる。遠くで濱の松が、荒れ狂ふ怒濤の音と交錯して物凄しい。町では大抵の家は皆雨戸を立てきつてゐる。何處かで看板の落ちる音がした。まだ宵の中なのに通る人も稀だ。嵐は夜の世界を果てしなく暴れ廻る。僕は明日の豫習をする爲に机によりかかつた。二階のガラス戸がガタ／＼音立てて喧しい。戸を明を明けて二階の物干に出て見た。空は雲行きが非常に早い。時折雲の切目から月が出て下界を照した。母も戸の内から首を出して酷い風だミつぶやいて居られた。間もなくして、さつきまで止んでゐた雨が、俄かに降り出して來た。雨混りの風がざつとガラス戸を横なぐりに吹きつけた。

五二

一番大きい弟「はさんな煙火があるか開いて見よう。」と云つて包紙のひきを解き初めた。僕も開いて見たかつたので手傳つた。誰も皆さんな煙火があるであらうかと一心にひもを解く手許を見てゐる。やつと箱が開いた。皆一様に箱の中を見た……ある／＼……爆彈三勇士、のらくろ花電車、八重櫻、色々の煙火がある。僕はこれがよい。突然末の弟がのらくろを持つた。鐵砲の先が一寸折れた。大きい弟が「餘りひきくあたるから。」と云つてしかつた。「一本やつて見ようか。」と守が云つた。大きい弟は反對したが僕もして見たかつたので一緒に物置の中へ入つた。第一に野球の打手の形をした煙火を出して火をつけた。シュツと音がしてバットの先から火花が飛び出した。末の弟は手を打つて、喜んだ。

「もう一本だけ仕よう。」と守が云つた。大きい弟がきめなかつたので今度は爆彈三勇士をした。シュと云つたかと思ふとパーンと大きい音がして三勇士の繪がみんなだ。皆、まさか飛びはすまいと思つて居たので大變びつくりした。「爆彈だから飛ぶのだ。」と守は云つた夕御飯をいたゞくと云ひ合した様に二階の廊下に集つて種々の煙

笛

三年 高原 豊

あちこちで蟲が鳴いてゐる。近所の誰かが尺八を吹いて居る。僕は急に思ひ出して、小さな笛を持ち出して縁臺に腰を下した。靜かに口をあて、そつと吹いて見た。ヒューと靜かな音が出た。スピトホームを吹いてみた。半音さがりの變な調子になつたので、急にをかしくなつて獨り笑ひをした。同時に今は亡き兄を思ひ出した。矢張り今夜の様な月夜だつた。あの頃は此の笛は兄の物だつた。そして僕も一しよに縁側で涼んだ時兄は此の笛で歌を吹いた。「ドリゴのセレナーデを吹くぞ。」と言つて、そつと吹き始めた。半音さがりの變なふしだつたので、僕は「變な歌を吹きよるね、まるでなつみらん。」と笑ひながら言つた。兄は「今夜は調子が出んぞ。いつもはもつみ上手に吹くけんどね。」と言つて、「今夜はもうやめこころ。」と言つて眞面目くさつて居つた。そしてこの笛を着物のすそでぬぐつて居た。

併し今はもう亡い兄だ。僕は笛を吹きながらふと淋し

五三

い氣持になつた。そして今度はドリゴのセレナーデを吹して見た。矢張り半音さがりの變な歌になつた。もうこの笛は古物だからよくならんのだと思ひながら手でそつとぬぐつた。近所で吹いてゐる尺八は上手だ。「尺八やつたら良い音が出るんぢやらう。」と思ひながら、家の中へ入つた。

初陣

三年 山本長人

体育聯盟の武道對抗競技に臨みました。

僕は未熟ながら我校の柔道の先鋒として出場する事を得ました。商業學校こやるときには始めての事にて非常にあがり、又ふるへてしまつて立上るや直に一本とられました。すると後の選手達は立派な技倆を有して居られながら三人も負けられました。僕は皆さんに對してすまないと思ひました。青年組の時は先の汚名をわづかながらのぞかんとして立會ひました。幸にも勝つ事が出来ました。先輩の選手方も元氣よく

五四

戦つて勝つて下さいました。僕は不斷から先生や先輩の皆さんから、先鋒の働き如何で全体の成績が違ふと言ひ聞かされてゐましたが、今度實際に出會はして、更に責任の重大なる事を深めました。

我が庭の秋

三年 池田脩亮

からくくく、隅のあんずの木から枯葉が落ちて來た。池の中を見るに、緑や黄や茶色の色々様々の木の葉が落ちて居る。水の中の苔もや、赤みを帯びて來て、池の真中の浅い所にある圓くなつて居る茅は、祖父に葉をつまらせてがりく頭のやうになつて居る。ひでり草の葉は緑色がさめて莖、だけ眞赤にはつきり見られる。

櫻の葉や楓は赤味を大分ましたやうで、紅葉の見頃もこれからであらう。蟋蟀も庭のすみで、かすかな聲を立て始めて居る。かうして庭の木々は、否虫までも初秋を知つて身仕度をして居るのだ。我々も勉強しよしいシーズンを遊ばないやうに、今から心がけて置かうではないか。

夏の海邊

四年 佐久間 鑛太郎

波打際で白い月がゆらくゆらくのらいでゐる。紺碧の海上を悠々白雲が二三片流れて行く。

「シャブ／＼」と小波が足に纏れ掛かり、歩んで來た足跡を一つ／＼丁寧に消して行つた。

何物をも鏗かさずにはやまぬ様な八月の太陽は、黄金を鏗かした様な光線を美しく海に反射してゐる。足音に驚いた臆病な蟹が、大きな跡を掻けながら、岩の間に滑り込んだ。

浅い所で泳いでゐた小供等が、何か「キャツ／＼」と叫びながら砂遊びをしてゐる。啄木の詩を思ひ出した。打ち上げられた流木にも何かこつそりこつそりみたい様だ。

突然誰か飛び込んだのか、飛沫がバツミ岩をぬらし、大きな波紋がグ——と廣がつて來た。

「トン／＼」と静かな海の空気をふるはせ朗な音をあたりに響させながら、漁船が勇ましく乗り出して行く。美

しい小魚が波に揺られて泳いでゐる。

岩上では甲羅を干して眞黒い肌を競つて居る。何處からか蛇が飛んで來て身邊を三四回廻つて去つて行つた。

明日の暑さを約束するかの如く、眞赤に燃わた太陽はくる／＼廻りながら次第に西に旋轉を續ける。

かくて大地は平和の微笑みの中に暮れて行くのである。

亞細亞の動きと日本の使命

四年 能美忠廣

混沌たる亞細亞、今の亞細亞は實に混沌の二字に盡きる。歐米各國に鬪られ、共産軍に惱まされつ、ある支那。大英帝國の壓政下に苦しむ印度民衆。建國間もなき滿洲國。將た又獨立を畫策する同教徒。

斯の如く亞細亞を混沌たらしめたのは誰か。一つは白人の専横なるに由り、一は支那の無智による。白人は我等亞細亞民族を劣等視し、あらゆる手段を用ひて亞細亞を掠奪せんとした。支那は古來の遠交近攻策を用ひて、歐米の機嫌を取り日本に抗した。

五五

然しながら現在の此の混沌たる状態は單なる混沌ではなく、希望の滿ち溢れた混沌である。亞細亞諸民族は白人の横暴を打破し、黄人の天下に引戻さんとして居る。印度の獨立運動、回教徒の建國畫策、滿洲國の建國、皆此の現れである。

此等有色人の天下を礎かんご希望に滿つる亞細亞民族を指導する者は誰か。我が天孫民族でなくて何人であらうか。我が日本國民は確乎たる信念を以て事に當るべきである。内には國民各自が日本の使命を自覺せねばならぬ。即ち大亞細亞聯盟結成がそれである。而して使命を自覺すると共に、念願を達成させる爲に熱心力を養成すべきである。又後に來るものを覺悟せねばならぬ。それは白人の嫉妬と迫害である。そして信念に邁進すべきだ。外には無智なる支那民族を自覺させ、亞細亞聯盟結成の大精神を納得させるべきである。滿洲、支那、印度、暹羅、土耳其等と提携し、親善を計り、亞細亞民族に互に彼我を知らしめねばならぬ。又徹底的に我等を邪魔する赤い思想保持者を亞細亞より驅逐せねばならぬ。

歡喜と繁榮、自由と平和の鐘が亞細亞の空に鳴り渡る

日は何時か。これ一に天使、人道の擁護者たる日本民族の雙肩に懸つて居る。

常識

四年 藤本盛人

「常識は人生の燈台なり。」古人は言つてゐる。英國の教育方針が健全なる常識の涵養に重きを置く所以である。即ち徒に偏狭に陥らず、頑陋に馳せず、所謂臨機應變能く中庸の道を取ることは成功の秘訣であつて、此の原因をなすものは實に健全な常識の所有者たるべきことである。若し我等に常識を缺けば、恰も大洋の中を羅針板の無い船で航海する様なもので、自分の目的を全く相反した方向に進むであらう。そして變人として世間から輕蔑され、融通のきかぬ人間に一生を終つてしまふ。

彼の國家の運命を賭して戦つた日露戦争をも一向知らずに象牙の塔に閉籠つて自己の研究に没頭してゐた學者の態度は、其の眞理を追求する点に於て我等の十分に尊敬するに値するであらうが、社會人として、國民として

通りに常識を缺いた不具者であると言はざるを得ない。文化の發達は世間を益々複雑にする。この荒波を泳ぎ切る唯一の武器は圓滿に常識の發達した頭腦である。故に將來世間の中に泳ぎ出て行く學生は宜しく常識の圓滿なる發達を期すべきである。

徳川家康

四年 新谷幸治

徳川家康小牧の義舉は徳川三百年の覇業のスタートなり。然れどもその敵をよく知れる彼は、山崎の合戦後旭日昇天の勢を有する秀吉に従ひ、小田原征伐に偉勳を樹てし後關東に封ぜられ、江戸城をその居城と定め大いに人心を收斂せり。慶長三年秀吉薨じ、ついで前田利家薨するや、天下の權は自ら家康の手に歸し、而して關ヶ原の一戦は徳川氏の覇業を樹立せしむるに至れり。慶長八年家康征夷大將軍に任ぜられ名實共に覇業を完成せり。抑々家康は賦性俊逸、亂世の英雄たると共に治世の名將たるに適せり。

その江戸に覇府を開くや、諸法度の制定、諸大名の配置その宜しきを得、幕府の威權を舒張し徳川三百年の基礎を定めたるは偉大なり。

思ふに彼の成功はよく時代を達觀し秀吉に従ひし事、物質の豊富なる關東平野を背景とする江戸を居城とせしこと、その成功に急らず、忍ぶ可からざる事をも能く忍びしこと等に起因す。

家康は亂世の英雄に有勝の殘忍酷薄の一面を有せり。彼の殘忍性はよく骨肉を殺して我が家に及ぼす禍を防ぎ親族關係を有し、且つ主筋にあたる豊臣氏を滅ぼして恬然たりき。これ後世の最も遺憾とする所なり。

然りとも雖も、織豊二氏の後を受けて天下を定め、黎民を塗炭の中より救ひたる彼の功績は、長く汗青を照らすに足るものといふべし。

中華民國の動向と我が使命

四年 吉津孝甫

滿洲國に對する列國の態度は今尙消極的で曖昧なるを

免れない。然しながら東方民族間には滿洲國創立の意義を認識する事益々深くなり、随つて亞細亞の大同團結といふ事が日滿の各方面に愈々深刻に考へられつゝある。即ち亞細亞は亞細亞人の亞細亞なりといふ歴史的、種族的、地理的、經濟的共通性がある譯だ。日本が常に東洋平和の大義を提唱し來つた根本理由が此處にある。然し大亞細亞主義の提唱は、それが愈々常識化し具体化する迄には幾多の屈折があらう。我々は先づ支那民族の覺醒に努む可きではなからうか。最近の民國政府の對日空氣の好轉は日支停戰協定の成立から、北支那に於ける黃郛氏の努力に源を發し、政府の首腦部蔣介石並に汪兆銘氏等の支持によつて、今や支那の對日政策の主流となつた。』と論ずる人がある。何時の間にか蔣介石は親日感情さへ持つてゐるかのやうに認識されて了つた。あまりの認識不足と言はねばならぬ。しかも歐米各國との借款交渉に、

聯盟の對支技術援助に狂奔して歸國した排日家、宋支文の暗躍、米支間の航空秘密協定は何を物語るものであらうか。列國の軍備擴張論に刺戟されてか、近來支那にても軍備擴張運動が起り、空軍建設三ヶ年計畫が眞面目に論

議されてゐる。この事實より演繹すれば、蔣介石の軍備擴張の眞意が那邊にあるか分る。明かに日本を假想敵國として擴張である。彼は東洋の覇者を夢みてゐるのだ。我々は親歐米熱に浮かされて居る彼等々邦民族を憐に思はずには居られない。彼等は今や自滅の道を辿りつゝあるのだ。且つ露西亞の赤化思想は外蒙古より、新疆より、青海より、漸次侵擾し、支那共產軍は跳梁を恣にして政府首腦部を手古摺らしてゐる。英國の西藏に於ける勢力も亦侮る可からざるものがある。

今や我が帝國は、内は思想問題から發生する國体の危機に、外は人種問題から發生する國防の危機に當面して、眞に内外多事、國步艱難の秋である。加之我々には支那民族覺醒の一大任務が課せられてゐる。非常時は更に非常時中の非常時に進展しつゝある。難局を打開して榮光の彼岸へ、同胞よ、猛進しよう。

危地に立つ日本の行くべき道

四年 田邊實彦

今日、日本の重要産業は、殘念ながら其の原料を、殆

んど外國の供給に待つてゐるのだ。原料を自國に有し、且つ植民地を關稅で封鎖する歐米の産業諸國に對立してこの貧弱な資力で、太刀打しようといふのだから、正しく龍車に双向ふ螻蛄の無謀さ言はねばならぬ。至難といふよりも、寧ろ不可能といふのが本當かも知れぬ。

世界第一の人口増加國で、而も海外に於ける移民數は數ふるに足らず、郷土崇拜の極、比較的に國外移住熱に乏しい日本、退いて國內産業の振興を圖るも、施すに策なき今日の吾々日本人は、今や正に生死の岐れ路に立ち死線の上を彷徨してゐるのだ。眞剣に考へれば考へる程日本の前途は一休さうなるものか、全く暗澹たるものがある。

國民が心配するのも道理だ。寒心に耐へない。此の儘で進んで行けば當然の自滅を將來する外はない。袖手自滅を待つは愚人の策、何とか轉回して、國運を打開すべき一大更生の方途なきものか、起死回生の大國策なきものか。

あり、唯一つあり。私の考へに依れば今日の日本を救ひ將來の日本を開くべき唯一の活路は「極東大陸進出」

の一事あるのみだ。滿蒙及び露領極東地方の一帯に亘る大陸に進出して、極東に於ける資源の活用と産業開拓とによる一大移民政策を實行し得て、始めて祖國を自滅の運命から救ふこゝが出来来る。私は敢へて斯く確信し、斯く斷言する。

沃野千里廣漠たる平原、鬱蒼たる森林、人烟稀少、資源死藏の接壤地域に、我が過剩人口を移民し、資源を開發するのは、自然が與へた自由必然の一大鐵則だ。滿蒙と云ひ、沿海州と云ひ、我が國民が開發の特權を有することは、世界の誰人でも一言の異議を唱ふることは出来まい。いや異議だなどは奇怪至極だ。日本國民が血と劍とに依つて辛うじて獲得し確保し得た、正當の權益である。

行け滿蒙へ!!日本の特權だ、天賦の權利だ、日本、危地にある日本を救ふ唯一の道に向つて。

受験準備中の友を激勵する文

四年 高橋達人

拜啓、滿山樹木の色、且暮の冷い大氣に秋の深きを感じ

ぜられ候。學兄には益々御健勝にて御勉學に御専念の事
ご存じ候。小生も御蔭様にて元氣に候間、御放念被下度
候。

「光陰矢の如し」さか、思へば昨年の十月、君を將來を
語り合ひ、君は現今の日本を洞察して非常時國防の重要
性を説き、將來祖國國防の重任に當る可く陸士の牙城へ
志し、小生は一學究たらんを高校入學に決心致してよ
り、既に一ケ年の歲月は夢の如くに過ぎ申し候。今や既
に季秋、來年の聖戰を目前に控へての重大時期に候。

我等は既にルビコンを渡らんを驀進しつゝ、あるものに
候。一卷の書に魂を投じて、俗塵を外に研鑽三昧の境に
入る、昨今の君の日常は蓋し斯の如き事の連続ならんを
存じ候。

成否は天に在り、努力は我等に在るべきものに候。馳
て來ん櫻花薫る日、君を手を取り合つて、故山の山河境
れよと許り凱歌を絶呼せんが爲め、十二分の御自愛と御
勉勵とを祈り候。御一同様に宜しく。 敬具

一九三六年

四年 津野 一一二

昭和十一年！僕は昭和十一年の危機を屢々聞かされた
ロンドン條約の改訂期である。英米の國防工作完成の秋
である。現下極東を狙ふ白魔、米國は米支協同作戰を畫
してゐる。支那の空軍充實計畫でもその一端を窺ふ事が
出来る。大建艦案を發表した米國は着々として多數の艦
艦を建造しつゝある。工廠は鐵槌の響に満ちてゐるロサ
ンデゴに集結を完了した米國太西、太平洋兩艦隊は連
日砲を磨き猛烈な演習を行つてゐる。

赤露は、あの毒々しい赤い軍旗を朔風に靡かせ、灰色
の外套を着たソビエツト軍は、黒龍江を隔て、青い眼
玉をむいてゐる。空にはアーエンチー超重爆撃機が弧を
描いてゐる。見る、兜虫の集團たる裝甲機械化兵團の威
力を！

世界に誇る諜報機關が、べ、ウ十五萬は光輝ある帝國
の情報蒐集に餘念が無い。
英國老いたりと雖も、日英戰爭唯の空想ではない。將

に現實化される憂がある。然し現在彼等は表面的な事は
口に出さない。其處に底氣味の悪い嵐の前の静けさがあ
る。

山雨將に至らんをして風樓に滿つ。一九三六年、危ふ
い哉、三六年。彼等は吾等に大なる壓迫を加ふるであら
う。

その壓迫に挫けた時、即ち日本の死である。
我々はかく論じ來つた時、戰慄を禁じ得ない。若し日
本が彼等の要求に應ぜざる時、そこには決裂が起るであ
らう。我々も又決然袂を拂ふであらう。彼等は正義の敵
人道の破壊者の名を以て我々に迫るであらう。

かくて天地を震動させる嵐が吹き起るかも知れぬ。
吾々は厄難日本を光榮日本に轉向させるに充分なる膽
力を養つて置かねばならぬ。祖國よ準備はよいか。

海外發展を論ず

四年 本石 獨芳

海外發展なき國家が自滅の階梯を辿る事は既に歴史の

証明する所である。今日世界に覇を唱へつつある歐米諸
國を見よ。いづれも海外に植民地を保持せぬものはない
ではないか。地球の圓形であるかさうかさへ判然しなか
つた十五、六世紀の當時、一葉の扁舟に身を托して死の
大洋を横切り、新大陸を發見したコロンブス、海水沸騰
すを信ぜられた赤道直下の海を航して阿弗利加を迂回す
る航路を發見したバスコダガマ、彼等こそ時代の波に
乗つた眞の海外發展者であらねばならぬ。又彼等を出し
た歐洲諸國は海外に膨大な領土を獲得するを共に、その
國運は着々と向上の途を辿つたではないか。いやローマ
カルタゴの時代以前已に強國は地中海に自由に發展した
アテネの昔、已にミレツス・ビザンチオンがあり、スパ
ルタにシラクサ・タレントゥムがある、一方海國日本はど
うであるか。神功皇后の軍船新羅の海を歴し、阿部比羅
夫の水軍日本海の金波銀波を蹴散らして海外を征した時
代には、天日四海に輝き蠻夷皇威に戦き、國運は隆々と
して旭日昇天の觀があつた。秀吉の朝鮮征伐亦然り。降
つて徳川氏鎖國政策の世となるや、海の子は彈丸黒子の
地に於て徒に武陵桃源の夢を貪り何時覺むべしも見え

なかつた。然らば國民に海外發展熱は無くなつたのであ

らうか。否々、八幡大菩薩の旗を海風に靡かせながら日本刀を揮つて外國の邊海を掠めた倭寇、暹羅に不朽の功業を樹てた山田長政等は之を覆して餘あるではないか。

鎖國の禁!!それが日本人の積極的精神を一時的癡痺の狀態に置かせたのである。眞の海國男子は不合理な彈壓に海を憧憬する心を失ひはしなかつた。一旦黒船來るの聲に泰平の夢を醒まさるるや、再び國民の心は海外發展に向つて勇躍し猛進した。忍耐強い、器用な日本人の手によつて米國加州の果樹園は開かれ荒れ果てた原野もメロン香る沃野に化した。更に忠勇義烈の日本兵士の血で肉で三千万の同文の友は軍閥暴政の牙より逃れ得て大同の慈政に浴する事が出來た。一方南洋方面に於ける日本雜貨の進出は歐米諸國の頭痛の種となり、印度への日本紡績はランカシアの綿工業を壓迫して、英國の悲鳴は終にシムラ會商となつて現れた。更に力強い一事は問題化した新南群島に既に邦人活躍の足跡を見る言ふ。コーヒ―香るブラジル、高粱繁る滿洲は雙手を舉げて我々を呼んでゐる、さあ地平線の彼方、怪鳥翔る南洋へ、赤陽輝

ネルソンにせよ、彼等の名聲は、彼等の功績は、彼等の所有する勇らしさの發露に歸着するのだ。勇らしさ……それは實に偉人偉業の本領である。斯く考へる時、吾人は飽迄も勇らしくなければならぬ。勇らしい……それは吾人の將來を有利に導き、且つ國家の發展に寄與する方法である。

スピード時代

五年 長谷和夫

茫洋として際限なき大洋上を、巨鯨の如き汽船が黙々として靜に矢の如く這つてゐる。荒漠たる大陸は、今や汽車自動車によつて網の目のやうに縦横に驅廻られてゐる。そして無限の天空は航空機―今や科學の發達により最高文明の人間が作り得た最大速度の航空機―によつて爆音高く征服されつゝある。世は正にスピード時代である。然も満足する事を知らない人間は、此等高速度の交通機關に満足を許さないで、益々此等の改良進歩に努めないものはなく、或は更に進んでロケットの應用に完璧

く滿洲へ、同胞よいざたて。

六一

勇らしさ

五年 土田正治

「勇らしい」……それは男性の最も誇りとする優越を歌つたものである。それは女性にては見ることの出來ない男性の美點であり、眞髓であり、根幹である。その眞髓根幹は一体何を意味するか。それは機に臨み、變に應じ決死の覺悟と意志とを以て、あらゆる難事を貫徹しようとする勇らしさを意味する。而して此の美點は日本男子の唯一の矜持であり、幾多の國民に比して一步も譲らない長所である。明治三十七八年戰役に於て、武人の典型として多くの將士がその武勳を世界に歌はれたのは一に勇らしさの所産であるに斷言してよい。近くは上海事變に於て壯烈無比と歌はれた爆彈三勇士にしても、斯くの如き偉大なる功績を成就し得たのは、その精神に嚴乎して犯すべからざる勇らしさが潜んで居たからである。或は東郷元帥にせよ、西郷南洲にせよ、或はナポレオン

を期しつゝある。

満足しない事。それが發達の一要素であらねばならぬ。満足すれば其處に發達は止まり、満足しなければ満足せんとして努力するが故に此處に發達が生れるわけである。世がかくの如くスピード時代と稱せられるに至つたのは他ではない、唯々満足するを許さなかつたの由るものである。

然らば何故に人間は高速度の交通機關の發達に努力するのであるか。名聲を得んが爲か。然らず。名を後世に残さんが爲か。然らず。唯々科學者として、科學の使命を全うせんとするのである。科學を應用し以て人類の福利を圖るに云ふ偉大なる使命を盡す爲である。吾等の祖先に比べて何と吾等は幸福な事でしょう。然し其處にも矛盾あるを免れないのである。禍福は糾へる繩の如し、と古人も言つてゐるではないか。幸福の反面にはやはり災害の潜むあるを知らねばならない。交通事故、即ちこれである。世はスピード時代である。交通事故も益々多くなつて行く。何とかならないものであらうか。交通整理の叫ばれてゐる所以である。交叉点に立つてゐる巡查

六三

彼の示すゴウ、ストップを見よ。雑沓を極めるべき交通も彼の示すゴウ、ストップによつて整理されてゐるではないか。

かくして廣大な世界も彌々狭くなるのを感じ、昨日の十里は今日の八里となり、今日の八里も亦明日の六里とならざるを得ない。かく程まで世界は短縮され又忙しくなつて行く。百年後の世界。今より百年経つた時の世界は想像するには餘りに困難な世界でしよう。

スピード時代。涯は地球の引力何ものぞ、月へ行かう火星へ行かうの時代が来るのである。

宗 教

五年 林 幸 男

我々が困窮して天を呼び、疾痛して父母を求めるのは一の宗教である。人に話すことの出来ない苦悶を心に懐いてゐる時、心から神の救ひを求めずには居られないのである。そこには唯天ミ親とが我々の爲を思つて、犠牲にもなつてくれようし、我々の望をも叶へて呉れるので

六四

ある。我々はそれだけに神が懐しく父母が戀しい。眞意識に神を信じてゐる。父母は神であり佛である。宗教はかくして自然に生れて來たものである。

未だ宗教意識の發達しなかつたその昔、争鬪に一生を終へた野蠻人も、神の出現に依つてその濇い胸に懷れて神の感化に依つて心が和げられ、藝術的、文明的な氣分にもなつたのである。信仰は人の心を朗かにすると同時に和けて呉れるものである。

宗教と言つても佛敎もあり、神道もあり、キリスト敎もあれば、マホメツト敎もある。だが要するに此等の宗教の唱へる處は人生の眞善美であり、高遠なる理想的境地である。唯その表現の違ひである。佛敎ミ神道が相容れざることなく、キリスト敎ミ儒敎ミが相斥けあふ事は無い筈である。

我々は心に無形の對照を信するよりも、有形の佛像を作る方がより解り易く、實際効果も大である。佛像は唯單にこんな簡單な理由から生れ出たものではあるまいが、佛敎は佛像の力に依つて大いに廣められ、力附けられた我々は佛像を見るに何かしら奥ゆかしさを漣を胸中に波

打たすものである。

試に見よ。その圓い滑かな肩の美しさ。清楚な然もふくよかなその胸の神々しさ。清らかな、のび／＼した圓い腕。肢体を包んで靜かに垂直に垂れた衣。さうして柔かな無限の慈悲を湛へてゐる様なその顔——そこには命の美しさが、波の立たない底知れぬ深淵の様に、靜かに凝視してゐる。それは表に現れた優しさの底に隠れる無限の力の強さである。人間のあらゆる尊さ美しさは、人間の肉體に依つて現はされ、而も人間の肉體を人間以上の神々しさに高めてゐる。それは自然に即して、而も自然の奧秘を掘出したものである。其處に佛像の生命があり、祈りの明かな對照となり得るのである。

我々が神の前、佛の前に正しくぬかづいて、掌を合せた時、我々は人生の最上の美を味はひ、宇宙の眞理を知り盡した様な有難さ、何かしら首を垂れずには居られない神々しさを胸が一杯になる。朝の祈りは一日の幸福ならん事を神に願ひ、夕の祈りは其の日を平和に送り得た事を神に感謝するのである。

古來政治ミ宗教との關係は複雑ではあるが、要するに

一面から觀れば政治と宗教は同じ物であるミ斷言し得、又他面から觀れば全く異つた物とも思はれよう。唯眞の王道は爲政者がキリストミなり、釋迦ミなりきつてしまつて始めて云はれる筈のものである。

要するに宗教は宇宙の眞理を極め盡してゐるだけに有難く必要なものである。宗教を唯變人の玩具とのみ考ふるは愚の骨頂ではあるまいか。

生 命

五年 金 山 繁

生命、その一言を聞いたゞけでも力強く生き／＼した新鮮な感じを受けます。實に生命こそは此の世の中に於てのみ見出し居る美はしい亦微妙な働きを持つた頼もしい存在なのです。破れた月の浮んで居る晩秋の夜の田舎道を自然の無形な力におびえながら、無意識な歩を運ぶさき、鄰の子達の歌ひ聲の近づいて來るのに氣附いた時の何とも言へぬ嬉しさ、心強さ、ほつとした安堵の溜息無論何の頼りにもならぬ小供であるのに。此れも生命そ

六五

のものゝ頼もしさ、力強さの爲ではありませんまいか。生命はすべて希望を有して居ります。一路その希望に向つて進歩し伸びて行く所に、生命の尊さがあります。生命の斬新な美はしさがありません。生命を有する我々が理想に向つて突進するその前に於て、あらゆるものは征服され屈服せらるゝ筈であります。そこに初めて我々人間の生命の美はしさが、發露されるのではありますまいか。

圖書館

五年 三吉二三男

光線が遮られて、机に暗い陰影を畫いて居る。空氣が冷い様な氣がする。人が居る様な感じがする。私はほんやり何か考へて居た。前には書物がローマの詩人の様にオリンピックの祭を想出させるやうに並んで居る。そして其本はそれ程古ほけて居るのだ。人がゐる。然し何も云はない。此處が圖書館なのだ。

圖書館は頭の休息所であり、頭の試験場であるのだ。

六六

ほんまうに其の感じがする。確かに勉強する所でもある。窓越しに庭の紫陽花の揺れるのが良く見える。我々は天國に居る様な氣がする。我々は詩境に迷ひ込んだ様な氣がする。やはり周囲は静かである。時々風の音が聞えるだけだ。其の後はやはり静かである。

無言の内に影が動き、無言の内に影が陰影の内に逃げ込む。人が動いて居るのだ。大きな辭書を持つて、目を本につける様にして、歩いて居る。

お伽話の本を読んで居る者が互に批評しながら読んで居る。ほんまうに無邪氣そのものだ。「米國恐るゝに足らず。」「日本恐るべし」と云ふ様な本を読んで溜息をついて居る人もある。新聞を読み、大勢を論ずる人が眼鏡の奥から目を光らせて居る。

平和な圖書館である。田舎の圖書館の方が一層平和である。圖書館に居る間はほんまうに楽しい時かも知れぬ。圖書館の傍にある本校は楽しいかも知れぬ。

宇宙

五年 佐伯孝友

晴夜靜に天空を仰ぎ見よ。然らば無數の星の吾が頭上に懸りて燦然と輝けるを見受けるだらう。而して我が地球もその無數なる星の唯の一つに過ぎないと思ふ時、宇宙の言語に絶した廣大無邊なるに驚嘆せざるを得ない。

今此に太陽系なるものを考へて見るに、太陽を中心火星、木星、土星……等九大遊星、及び一千有餘の小遊星と多數の衛星等より成りたる膨大な太陽系と、日常吾々が考へ來つたあの大きな我が大地、即ちこの地球とを較ぶるに、地球はその何分の一ぞ。曰く何十万分、何百万分の一なりと聞くに至りて、如何に太陽系の大なるかを知ると共に、その太陽系と同種の物が宇宙の中に無數に存在して居ると聞くに及びて、更に太陽系の小なるを知り、又之を知ると共に、宇宙の如何に想像外に莫大なるかを知ることが出来る。かくも莫大なる物から微細なる物に至るまで、一切合財を含有せる宇宙に較べて、あまりに小さい地球、その地球に生存せる、それよりも更

に／＼微細なる人間、その吾々を考ふるに、狭ま苦しき地球上に衣食住を求めて汲汲とし、利慾を追つて相争ふ殺人、強盜、放火、喧嘩等、碌でもない記事で新聞の三面を塞ぐ日々の出來事の如きは、廣大なる宇宙に較べて何たる小事か、何ぞ哀れむべき事ではないか。

國家非常時に對する

學生の覺悟

五年 柳井清

私は先づ現代の日本を視る。其處には混沌とした世相が描き出される。即ち宗教も、文學も、工業も、政治も外交も、經濟も、總てが混沌とした行詰りの姿だ。

其行詰りの淵に偉大なる巨岩が投ぜられた。即ち聯盟脱退の報知だ。此の報一度傳るや、日本全土津々浦々迄も、淵に描れた波紋の如く急速に非常な興奮を以てきよめき渡つた。警報は全日本民族の胸中に沁込んだ。

皇國日本は今や世界的に孤立したのだ。此の際感じ易い我等學徒の胸には如何なる覺悟が必要であらうか。そ

六七

は只一語にて解決されるのだ。即ち青年としての責務を盡すに存するのだ。我等はより善き社會の出現と、より良き時代の建設とに資せんが爲、今やその準備の過程を辿つてゐるのだ。

深遠なる學理を研究する者、藝文の園深く分け入らむとする者、經國濟民の術を修めむとする者、劍を執りて祖國の護らむとする者、己が自々その道の研鑽に務むる者、皆よし。要は三千年の光榮ある皇國日本の繼承者たらむとし、將又世界人類の福祉に貢獻せんとする崇高雄大なる根本觀念の下に終始すべきだ。今日日本は純眞にして眞摯なる學生によつて、其光明を欣喜を加へて呉れる事を渴望してゐるのだ。我等は今眞面目に非常時たる皇國日本を認識して、常に關心を失はず、目下の軌道を誤る事無く勇往邁進すべきだ。非常時日本は、稍もすれば萎微沈滞に陥らむとする社會に、汚濁濁濁を來さむとする人の世に、若き青年の名に於て、潑刺たる生氣を送り、且つその淨化に務めんとする純眞無垢の我等を待ち望んでゐるのだ。即ちよき我等の努力、そのものが明日の日本の答案として示されるからだ。今や我等の階

段は非常時日本打開の暁に向つて開かれたのだ。

我等は今、大丈夫の名に於て、大和男子の光榮を害はざる大仕事の覺悟を固むべきだ。其時萬古以來輝く日本帝國の姿が浮ぶのだ。

光は東方より

五年 玉木和彦

目も遙かな海上に東雲が瞬いて、赫々たる太陽が黒潮の蒼々とした波の唸りに浮び上る時、眞先に金色に照らし出される國土、それぞ世界の王者たる使命を帯びた我が日本帝國の姿でなくて何であらう。抑々天祖が廣濶な大陸を避けて、東海の孤島を吾が子孫の王たるべき地なりと宣せられたのは何故だらうか。西に廣漠たる亞細亞の大陸を抱き、東に渺茫たる太平洋の大海原を控へ、延々として千有餘里に亘る雄姿は、我が帝國を今日あらしめた一大要素でなければならぬ。この形勢こそ、三千年來、世界に冠たる特絶の皇基を擁護して、内大和民族の結合を強固にし、外四方の文化を吸収消化して、その

精髓を蓄積した原因である。

然しこの平和であつた東海の孤島にも、世界の時代思潮の波はひた／＼と打ち寄せて來た。深刻な不況の嵐は黒潮の彼方から太平洋を渡つて吹き來り、パンを求めて路頭に泣く失業者の群を巷に汎濫させた。一方中堅たるべき青年の思想は動搖に動搖を重ね、遠大な生活標識を失ひ、目前の偷安之事とするやうになつた。顧みれば、我が國がジュネーブ湖畔に正義の凱歌を奏して、國際聯盟を脱退して以來、歐米列國の日本に對する壓迫は經濟界に於て、外交界に於て、日々新聞紙上に報道されて居る。

然し我等が此未曾有の國難をば、東洋の盟主たるべき命を遂行する爲の天の我等に與へた試鍊と考へる時、吾人は胸中に鬱積したる愛國的熱情の油然として高鳴るを覺える。お、！今こそ帝國が白人の壓迫の域を脱して亞細亞の東に、東洋独自の新文化の炬火を煌々と掲ぐる好機會だ。

米國大統領ルーズヴェルトは嘗て云つた。昔、羅馬帝國の衰亡と共に、地中海時代は終を告げた。大西洋文明

の時代は目下その絶頂にあるが、是れ亦遠からず枯渴を見るに至るであらう。而して、其の後に來るものは、實に太平洋時代である。惟ふに太平洋時代は、前記三時代中最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容したものであるから。と。太平洋時代は既に到來した。而して是に大文明の起るべき機會に遭遇したのである。日本民族の使命は實に重大と云ふべきである。

太平洋の地圖を開いて見よ。赤い夕日の沈む沙漠の向うにはあの世界一の陸軍を誇る露西亞の赤軍が爛々たる荒鷲の如き眼を光らせて居るではないか。又風浪靜かなる太平洋の彼方には世界第一を誇る艦隊が長蛇の様な陣列を布いて巨大な砲口をおし向けて居るではないか。又佛國は、新南洋群島占有問題を提げて、東洋にその魔手を伸ばさんとして居る。英國また遠く日本に經濟的壓迫をなしつつ、ある。

日東帝國は極東亞細亞に、根強く建設された國家である。だから、國民は陛下の御旗の下に、忠勇の血を流して權益擁護の爲に起ち、亦、帝國海軍の精銳は、花の様な軍艦旗を翻し、燃ゆる愛國心を大洋の怒濤に闘はせ、

皇國の守りについて居る。

嗚呼!!東亞の空に黎明は訪れた。暗黒に閉ざされた亞細亞民族相互の間の醜い争鬭の夜は今や、ほのくゞり明け放れて、眞紅の日輪は昇る。

立てよ!亞細亞民族よ!手に手を取り合つて、高らかに亞細亞行進曲をコーラスして、大亞細亞建設に進まうではないか。

輝かしい太陽こそ、明日の亞細亞民族の飛躍の象徴だ。今や展開されんとする太平洋時代の、日本帝國を盟主とする亞細亞諸國の雄飛こそは、「光は東方より。」の理想を實現するものでなくてはならない。

君聞かずや、殷々と鳴り渡る希望の鐘の音を、亞細亞人種の日覺むべき時は今だ。
お、!亞細亞の前途に榮光あれ!!

感激

五年 小倉吉高

外物に對して精神の甚しく興奮せる時の感情を、感激

七〇

の二字に表すけれども、その語の簡單なる如くに、吾人の感情は簡單なるものではない。何が故に感激してゐるのか、その原因の存する所を言葉で言ひ表す事は出来なだらう。そんなにその時の心の波は複雑である。吾人はその日／＼を細かく觀察して、一日の精神の動搖を顧るごき、大なり小なり感激の語で言ひ表すことの出来る心の動きを見るだらう。然しながら我が日本民族の共有する精神は、國事に努力せる時の行動が、最も我等を感激の高潮に達せしめる。此の時の感情は、實に血湧き肉躍る言ふ語に適切なる精神の働きを見るこゝが出来る。國外に於て國家の爲粉骨碎身努力をなす將士を見る時、或は外交史の一頁を飾る松岡全權のジュネーブに於ける奮闘を思ふ時、我等の感激措く能はざるものがある。畏き邊の下人民に對せられる御憐憫の御心を感じる時、或は人の爲に盡す慈善家の行を聞く時、美しき行動に對して絶大の感激を起す。感激の心なき者、それは人間の屑である。感激あつてこそ、我等は尊き生きかひのある生涯を送ることが出来るのである。

卒業生通信



神戸高等商船より

同校航海科 岡重夫

神祕とローマンスに満てる海の子の搖籃。

六甲山麓深江の海岸に一段と聳立つ赤い煉瓦のビルディング、五階建の時計塔と、陸上帆船昭和丸の雄姿は、斷然阪神間の一名物である。其處に起臥する四百の若き海の子等は、其猛烈なる fighting spirit に於て、又紅顔味がかつた健康色に於て、蒼白き一般學生に對照して一見海の勇者としての面目躍如たるものがある。

異國情緒豊かな神戸の街頭を袖に描ひの三ツボタンの制服姿で闊歩する時、將又、ヨットの満帆に六甲嵐を一杯

に吸ひ込んで大船巨舶の輻輳する神戸港を、海のメロデーを口ずさみつゝ縫ひ走る時、自ら湧く優越感は如何ともする能はざるものだ。其の湧き出づる源泉を探ぬれば、其處に、上級者の一指乱れざる統率の下に、整然と動く下級者がある所の寄宿舎生活だ。統制の完備を期する爲に加へる涙の鐵拳制裁も、家庭的平和郷に必要な刺戟劑に過ぎない。ストームに閉口たれる如き者は、將來怒濤と闘ひ、帝國産業の第一線に活躍すべき重大任務を帯ぶる商船士官には到底なり得ないのだ。

毎朝唸唸たるラツパの音に、加ふるに文明の利器サイレンを以て世人未だ南柯の夢を貪る曉に起き出でて、海の子達の目ぐるましき活動は開始される。一日七時限の

七一

學科を終へて、疲れた頭腦を慰すべく、或はボートに、或はスポーツに、或は讀書に、或は音樂に、各自趣味のある所に行動する。武道（劍道、柔道、弓道）は正課として一週一時間課せられてあり、運動各部は學友會の組織する選手制度で、他校との試合も相當盛に行はれて居る。之等の激しき活動に疲勞せる心身の慰安所でも云ふべきか、毎夕食後酒保が開かれる。喫煙立ち罩める室内に猛烈なる食慾を充しつゝ、口角泡を飛ばして談ずるは何か？ 或も第三者の想像だにも及ばぬ光景である。

斯くして三年の寄宿舎生活を了へて實習生活の第一歩横須賀海軍砲術學校に半ケ年、帝國海軍豫備少尉の肩書嚴めしく、帆船練習生活に進む。（但し機關科は陸上各地の工場實習）

深き紺碧色の大洋に、眞白き船体を鮮かに映じて、海のローマンチストを以て任ずる我練習帆船は、其翼を擴げるや、今日は椰子樹の影により、明日は北極光オーロラの美を稱へ、月をやさしき母を見て、星を波路の友として、怒濤を闘ひ、波間を漂ひ、あくせき世の生存競争を知らぬ顔に航海を續けて行く。之に續いて一年間の汽船實習は一

層完き able seaman に磨きあげたる若き海の男兒を生み出す理だ。

此處に現在の我帝國を思ふ時、軍事上、國際上は言ふに及ばず、經濟的方面の全く行きつまる國情は、何人も認むる所だ。この國難打開の方法は數多あるが其最も近道が海運業なのだ。今や我海運業は從來の補助的産業の域を脱して、貿易外の收入を以て最重任務とする、重要な獨立産業の地位を占むるに至つた。然るに、惜しむらくは、往年の鎖國制度の影響か一般國民の海に對する理解の乏しき事だ。希くは、本誌を通じて諸兄の海に對する親愛度を幾分でも深められん事を祈る次第である。

次に、本校入學試験に就て、從來の傾向と、不肖輩の體験を併せて述べれば、先づ身體検査に於て、規則書を見ても解る如く、其嚴重さは陸士、海兵のそれと何等異らず、或は以上かも知れない。學術試験。英、數、國の三課目。英語は、和譯及英譯で、小野氏の英文解釋で十分だ。和文英譯は會話體のものが多い。數學、代數、平面幾何、三角、何れも性質よき種類の問題ばかり。代數は岩切氏問題集を久保先生に鍛へられ、非常に助かつた。

双手を舉げて待望して居る。

西陵ヶ岡より

長崎高商 石田 博

秋容清爽之砌諸先生を始め本校生諸君、圖らずも、今回母校校友會雜誌部の御依頼により、紙上にて諸彦に見ゆる事が出来ました事は、小生の非常に光榮とする所でありませぬ。

緒御依頼の事項に付、具體的の御返答申し上げ様と思ひます。先づ本校の紹介より始めます。

本校は山口高商と全様、創立明治三十八年で全國高商中の最古のものであります。本校の卒業生は本校のモットーとするが如く、世界を舞臺として或らゆる方面に活動し、今日相當の地位にあるものは枚舉に遑なき状態であります故に、今日の就職難時代にも拘らず、七割と言ふ就職率を有する事は、之れ本校の他官立高商と異なるものでありまして、本校は經濟界方面よりも第一位、即第一流高商と認められて居ります。教授の談によりませぬ

幾何、三角法は教科書で澤山だが、三角法は相當重きをなすことに注意されたし。國語。解釋、書取、作文、四年の教科書及國文解釋をやつて置けば恐るゝに足らない。總括的に、各課共問題は至極素直なものばかりだと思ふが、注意すべきは、各課平均に力を用ひることである。

最後に本校卒業生の状況を簡単に述べます。

近來世界を通じての不況風が、全國に只二ツの特殊專門學校たる高等商船にも、往年の盛況に比して稍々衰微を齎した事は已むを得ない事實だが、一般の專門學校に比すれば、斷然頭角を現はして居る事は勿論だ。殊に最近海運業の重要性が叫ばれ、同時に我國海運業者の自覺せる營業振りが出現して、益々將來發展すべき運命にある海運界なのだ。又今日の世界状態に鑑み、國防充實の必要上、我々海軍豫備軍人は甚だ期待される所重く現在本校卒業生が、海軍飛行場に入營して盛に活躍しつつある等、不況時代豈恐るゝに足らずやの状況である。

將來、帝國々防、竝に産業の第一線に雄々しく乗出し敏腕を振はんとする勇者の來校を、國家は我等と共に、

と、今日經濟界に於て第一位高商と認めて居ますのは、本校、名古屋、山口の三校ださうであります。本校は實に二十七年云ふ長き歴史を誇り、現在本科以外に海外貿易科、貿易別科、特別特設豫科（中國人の爲）あり職員八百名であり、收容人員より見るも官立高商中のNO.1であります。教授は各専門の大家連で、就中我國交通の一大權威武藤教授、マルクス人口論の伊藤教授等はあまりにも有名なる方々であります。その上濃厚篤實の、只見校長を推戴し、教授と生徒一体となり一致團結此上も校風の發揚に努力して居ます。

次に入學試験に付きて述べる事とします。

本校は試験者毎年一千台を割る事全くなく、毎年一千二百名位であります。而して收容人員は二百六十名ですが、實際は二百七十名位採用して居ます。本校の入試は英、代、國漢であります。英語は毎年極めて難しき問題が出て居ます。英作は近年は單文が出る様な傾向があります。單語を充分に覺ゆる事が必要です。次に代數、之れは相當の實力があれば満点を得る事は困難ではありません。而し一問題はかなりこみ入りたる問題が出る様

です、特に注目すべき点は級數、對數、複利法、指數、之れは毎年必ず出で居ます故特別に準備される事が肝要です。次に國漢、國語は古文一問、現代文一問、而して現代文は古文との混合せる様なもので、それと書取がよく出ます。作文は昭和七年度より課されて居りません。漢文、國語何れも左程難しくはありません。國文、漢文の解釋を完全にマスターすれば大丈夫でせう。最後に本校には小生目下第二學年在學中ですが、只一人であるのは實に残念に思ひます。

在校生諸君此に於て、小生は一條の意見を述べさせて頂き度い。

本校には以前は萩中卒業生も相當來て居た様であります。然し近年は入學試験を受けるものすら無い状態があります。此れは實に萩中にこりて悲しむべき事と思ひます。山口高商には毎年多數の諸君が受験される様ですが、首尾よくパスする者將して幾人でありませうか。十人に足らない状態ではありませんか。諸兄は高商と云へば先づ山口を聯想するでせう。然し山口よりも優ることも劣らざる高商は他にあります。諸兄よ！近くにある長崎高

商の儼然たる存在を忘れてはなりません。我國の綿製品は今や英國のそれを抜き世界的に飛躍して居ます。然し乍ら本年英國植民地就中印度に於ける、關稅引上は我國紡績業者に一大打撃を加ふるに至りました。此に對する我國の對抗策を致しましては、目下の急務は新市場の獲得であります。諸兄よ注目せよ此に！

萩中の活舞臺は山口のみではないのであります。他地方へ躍進し全國高商に向ふ必要はありませんか。山口高商に假令ひ多數の諸兄が受験されても、結局は同志討ちなつて居ます。本校は九州の長崎高商でなく、日本の長崎高商であります。遠くは滿洲、中華民國、内地をしましても樺太、奥羽より關東、近畿あらゆる地方より集つて居ります。本校は地方色に左右されず、絶對的公平であります。その証據としましては御膝元たる長崎中學よりも毎年二十五名位であります。諸兄よ、諸兄は山口縣内でもなくともつゞ廣く諸兄の近くに存在する、我長崎高商の存在を認識し、萩中スピリットを以つて本校の難關を突破されん事を！

さすれば我西陵ヶ岡健兄、山口縣人會全員は双手を舉

げ諸兄の御入學に歡迎の意を表するでありませう。最後に各位の御健康及御奮闘を祈り擲筆致します。

大分高商より

同校 中村 昇

秋風搖落の梢に悲琴を弾じ哀愁の韻うた、感興を高む、燈火親しむべし、秋冷の候學生の誇は勉學にあります。恰も農夫の土地を耕すが如く努力を拂へば收穫亦自ら大となりませう。殊に秋に於て然りです。自己の目的に一路猛進彼岸の彼方に到着されんことを祈ります。

扱て大分は別府灣に臨み氣候風土其他あらゆる点に於て殊に勉強するには最も好適な處と思ひます。夏は順風常に頬を掠め大した暑さも感ぜず、冬は南國の爲か雪を見ること甚だ稀です。市の中央に城址ありて（中に縣廳あり）大友宗麟が居城でありました。即ち城下町にして優雅な處です。大分高商は市の南端にある小丘の一角を占め全市を眼下に見下し校風は他校に比し優るとも劣る所は無いと確信します。教授と生徒と常に融合し正に樂

園を現出して居ます。

學課目として他別に變つたことはありませんが選擇外國語として英語、獨逸語、佛蘭西語、支那語があり入學後自由に選擇出來ます。其の内現在支那語が最も多く全体の約二分の一を占めて居ます。本校の入學試験は別に他校と異なる處はないと思ひますが、例年の様子から判斷しますと極容易な方でせう。此れを完全に答へるここが最も必要です。六ヶ敷い問題より却つて馬鹿になりません。本校には開校以來秋中から來る者至つて少なく三、四人位ですが山口縣全体殊に、山口、下關、長府、徳山方面からは相當多いです。縣別に見ますと大分縣第一で次に福岡縣第三番目が山口縣です。小生入學當時は四十人を越えて居ました。秋中卒業生の大分に居る者は小生の知つて居ます所では、我々先輩たる第四回卒業生の和田正敏中佐殿が居られ、現在大分高商の教官をして居られます故我々後輩には此の上無き好都合です。他に小生の知つて居る方はありません。

大分高商の學友會には總務部がありまして三年生中三人を選舉し彼等が學校の年中行事其他種々な仕事に任さ

れて居ます。而して此の學友會には特別會員と普通會員とあり。特別會員は本校職員及び本校卒業生で普通會員は本校生徒です。普通會員は次の第一、第二、各一部以上の部員たることを要します。

- 第一、講演部、語學部、文藝部、音樂部、
- 第二、劍道部、柔道部、弘道部、庭球部、

- 野球部、陸上競技部、ラグビー部、
- 山岳部、相撲部、水泳部、籠球部、

其他學友會以外に排球部、乗馬部、射擊部、廣告研究會、書道會、航空研究會、童話會、基督敎青年會、都山流尺八章美會、滿蒙研究會等があり何れも勝手に入ることが出來ます。

扱て以上大体を述べた積りですが、もつと詳細に御知りになりたい方は小生の處に御知らせ下されば出來る限りの努力は惜しまぬ積りです。來る可き三月の入學試験には成る可く多數大分高商に志願され且つ其の目的を達せらるゝ様希望致します。

時正に非常時に直面し吾大日本帝國の經濟難、外交難思想難の三難の内其の根本を爲すは經濟難にして此の經

濟難を救ふは亦他の二難を救ふこと、なりませぬ、我々の職分はこの國家の基礎を爲す經濟の根本概念を會得し以て此れを事實に適合し、吾光輝ある大日本帝國を理想の國家と爲す可く万難を排し目的に突進す可きであります。願くば諸君も我々を一心を一にし即ち百万一心國家の繁榮に一路邁進されんことを祈ります。

最後に其目的を貫徹する爲の第一歩たる勉學に此の燈火親しむ可き秋に當り一層勵まれんことを衷心より希ふ次第であります。誠に愚言を述べましたが少しでも諸君の御参考にもなれば幸甚の至りです。

廣島高校より

同校 木藤正典

秋も漸く耐えなりの諸兄には日夜御勉勵の事存じます。扱廣島高校に關して二三御紹介したいと思ひます。何か諸兄に御参考になる所があつたなれば、幸甚に存じます。

先づ所在地の廣島について申せば、中國一の大都會な

る事は申すに及ばず、瀬戸内海に臨み、大田川のデルタに位し、日本三景の宮島を控へ、その環境は學生生活に最適と言へませう。殊に生活費が安い事は注目すべきだと思ひます。

學校は郊外にあり、勉學には都合よく出來てゐます。

本校は本年丁度開校十週年に當り、創立後日淺く、従つて歴史こそないが、校舍其他諸般の設備はよく備つてゐます。校風としては別に變つた所もなく高校としてはまあスマートな方でせう。又思想問題や生徒教授間の感情の對立等なくてなごやかな學校と言へませう。生徒の半數は市内の者で、廣島縣内の者は八割以上に達します。

他縣人では飛びぬけて山口縣人が多い様であります。次に高校間でやかましい大學入學率の問題であります。本校は東大には比較的少數しか入學致しませんが、京大には非常に入學者多く、同法學部へは今年の如きは三十數名入學してゐます。學校全体から言へば理甲が最も入學率よく、さこの高校でも同じですが理乙は最も入學率が良くありません。

入學試験については特に變つた事ありませんが、本

校は高校中でも標準的な方でせう。理科の方には國漢の問題を少くし、文科の方には數學の問題を少くしてゐます。で理科へは國文解釋一問或は二問で、漢文は送假名のみ（解釋なしの事が多い）の問題一問だけです。明年も多分さうだらうと思ひます。又文科のみの國語の問題には必ず歌が出る様です。課目別で言へば英語が一番難しいでせう。最も和文英譯の方はそれ程でもなく、一問は諺か格言の様なものです。數學は平凡ですが、比例がよく出て、又容易だが一寸注意して書かねばならない、所謂山の問題が一問位はあります。それからもしも暗記物が博物（礦物をのぞく）です。田中市郎先生がよく課された様な小さな問題か、さもなければ非常に大きな問題が出ます。例へば昨年様な「日光の植物にあたる諸作用を書け」なんてのがあります。僕が理科に居る關係で文科系統の問題の事は残念ながらよく存じません。猶本校の傾向は本校最近五ヶ年の問題を熟讀されたらよくわかるだらうと思ひます。次に秋中卒業生で本校に在學中の者は、一年に大島、頓野兩君、二年には渡邊、西田、芳野の諸君及び僕、三年には芳野君一人、計七人

であります。本校の山口縣人中長州部の中學としては多人数の方です。今年も廣島としては高師、高工には七八人の受験者がありましたのに、本校には唯二人しか受験者がなく非常に淋しく感じます。秋中から本校へ受験する者は殆んど合格率百パーセントですから、本校を受けられたならば、合格は大丈夫受あひます。昨年の如きは四人も入學してゐます。家庭の都合上山口高校を受けられる方へは強ひて申しませんが、山口高校以外の高校を試みられる方は是非廣島へ來られん事を切に希望します。一高、三高や五高を受けられるよりは廣高を受けた方がどれだけ良いかは入學されたならば感ぜらるる事と思ひます。重ねて申します、高校ならば山口高校か、然らずんば廣高と。

終りに臨み諸兄の御奮勵を祈ります。



旅行地	福岡 熊本 阿蘇 別府 耶馬溪
期間	昭和八年七月二十一日ヨリ五日間
人員	生徒二十六名 教員二名

四年 松尾美男

七月二十一日
待ちに待った我等の修學旅行もつひに來た。時恰も七月二十一日。暑中休暇を利用してやる非常時中の非常時にふさはしき修學旅行。

我等汽車旅行團は岩本、岡庭兩先生に引率されキャンブ隊と共に四十名の一小隊を編成し雄々しく九州地方への旅路に立つたのである。

修學旅行記

僕は太井驛で奈古から來た松浦と一緒に山陰線を一線に残し玉江驛へと向つた。驛に近付けばプラットホームに一團ミなつた同輩が汽車の走るのを遅し待ちこがれてゐる様だ。ふと目を轉ずれば校長先生始め、金子、河野、柳屋、福田、池田諸先生がわざわざお見送りに來て下さつてゐる。僕は嬉しかつた。これは生れて始めて味はつた嬉しさである。いつか列車は勇しくホームにすべり込んでゐた。福田先生が列車の人ミならぬので一抹の淋しさを感じた。一息する間もなく汽笛は鋭く青空に鳴り響いた。と忽ち萬歳の聲が何處迄も澄み切つた碧空にミろいた。勇ましい愉快な旅立だ。戦争にでも行く様だ。

僕等は田中、松浦、吉賀達ミグループを作つた。窓より外を眺むれば遙か彼方に奈古の遠嶽山が天空にぬつと突き出て、その兩方より笠山と鶴江台が静かな落付きのある景色を見せてゐる。すぐ目の前には指月山が聳えてゐる。實によい景色だ。トンネルに入つた。出た。入つた。出た。と目も舞はんばかりに列車はフルスピードを出し、夏の線路をすべつてゐる。間もなく正明市についた。此處で第一回の乗替え。一路馬關へ向つた。海岸線を始めて通るのだ。栗野驛で和田の見送りを受けた。いつしか列車は下關驛に到着。さすがは西日本の門戸丈けあり偉大なものだ。あのプラットフォームの長さと言ひ、蜘蛛の巣の如き線路と言ひ、皆吾々の目を轉廻せしめる。直ちに連絡船に乗つた。ポーツミへぬる汽笛を合圖に門司に向つた。するさ兵隊さんの姿をチラツミ見た。「おや」と皆んなは叫んだ。お、目前には、「バイカル丸」「ウスリイ丸」筆太に書いた大汽船がその雄姿を下關海峡にさつしりと据ゑてゐるのではないか。船は門司に着いた。上陸して見れば驚きの外、先刻の兵隊さんが、貴き命を滿洲の野に埋めた遺骨が上つたのだ。直

を仰ぎつ、向ふの社殿へ行つた。戸が閉めてある。どうも不思議だ、日頃は戸が閉めてあるのだらうかと、思ひつ、も禮拜した。所が後で先生達と一緒に待つて見ると、それは裏側であつたのだ。恥かしくもあればをかしくもある。今度は偉大な社殿が堂々たる雄姿を見せてゐる。「敵國降伏」の額もある。誰か「寶物館がある、見に来い」と叫ぶ。「何え」と萩言葉丸出しの自分達が飛んで行つた。中へ入つて見るに、一寸驚く程の物が陳列されて居る。中をぐる／＼見て出ると先生達は若い生意氣な様な奴と何か問答してゐられる。さうも普通と違つた様子なので行つて見るに、何んだ拜觀料を呉れと言ふのださうだ。生意氣な!!松下村塾では拜觀料はさらんぞ、と言つてやりたかつた。第一回の記念撮影。中尾先生のカメラに入つた。それより東公園だ。夏の光線は嫌と言ふ程照りつける、汗は瀧の如く流れる。東公園へついた。學生や紳士等が散歩してゐる。自分達は先づ日蓮上人の像を見んものゝま真直ぐ急いだ。大きな目玉は恰も鬼の目の如く、驚きは言語に絶する程だ。ところがまだ／＼大きな驚きがあ

ち直立不動の姿勢で禮拜した。それから約卅分休み、再び列車の人となり、福岡へと向つた。「アイスクリーム」ミ小倉驛で叫ぶ、二杯も買つて食べた。右を見れば無限に續く玄海灘。一點の雲もない。やがて工場地帯に入つた。製糖會社、セメント會社、あらゆる工場が並列してゐる。嘗て地理の時間北九州は、東京、大阪、名古屋と共に日本四大工業地帯であると言ふことを學んだが、その北九州を今僕等は走つてゐるのかと思へば、急に偉くなつた様な氣持がする。八幡に着いた。これぞ見逃してはならぬ、東洋に冠たる製鐵所を思ひ、窓より覗いてよく見た。煙突は倒されたと言ふ話を聞いたがまだ／＼澤山立つてゐる。又海岸に出た。水泳する者がゐる。急に泳ぎ度くなる。正午を少し下つた時宮崎ステーションに着いた。愈々九州第一の大都會福岡に歩を踏んだかと思へば急に心が踊る。もう誰か、向ふの店屋へ集つてゐる。何んだらうと思つて行つて見ると博多人形の陳列だ。ソラ／＼面白いのがある。スマートな少女の人形もある。然し自分はあるな物は買はない。それで二人で宮崎八幡宮へ參拜した。大きな鳥居がある。それ

つた。ルンベンのグループだ。萩のやうな刺戟のない所に住む吾々には現在の不景氣が此のルンベンの寝ころんでゐるのを見て始めて分つた。そこで一息し、龜山上皇の銅像をうや／＼しく拜み、元寇の押し寄せた當時の歴史的情景を懐想しつ、西公園へミ電車に乗つた。賑やかな博多の街を貫ぬいて西公園前に着く。福岡教護聯盟主事佐伯直治氏の案内で西公園に上り光雲神社參拜。山の上から博多全市街を眺めた。そこは風もよく通つてゐたので今迄の疲れも過半抜けた。其處で「放送局があれです」「あそここの高い建物が玉屋デパートです。」と一々説明された。福岡の街は丸で碁盤の様だ。それから又下り始めた。今度は宿屋へ行くのだから皆んな元氣だ。山を下りて大きな美しい池の畔に休む。涼しさうな木の影がゆら／＼と映つてゐる。再び電車に乗り、到々憧れの高島屋旅館についた。僕等は三階の大きな廣間だ。さあ、吾等の天下だ。直ちに飛び込んだのは風呂だ。田中に少し遅れて二番風呂、一番風呂になれなかつたのが残念だ。然し氣持のよい事百パーセント。ゆつたりした氣分で、美味しい夕食をとり、自由散歩に出掛け、吾々カー

キ隊はあの大きな街を大道闊歩した。そして第一夜を博多で過した。

四年 新谷幸治

七月二十二日

さすが九州第一を誇る福岡の朝は忙しさうだ。活氣がある。賣物屋の聲、往來の人、交通機關あらゆるものに於て。

我等旅行團は高島屋旅館の二階に於て此の日の旅行の準備を済ます。まだ出發には二時間からある。パツチ／＼と將棋をしてゐる香氣な連中も居る。寝轉んでゐる連中が居るかと思へば日記を書いてゐる者も居り、部屋中旅行氣分で一杯だ。僕は松尾、田中の連中と近所の人形屋へ押寄せた。「此れは幾らですか。」「十錢です。」「これは?」「此れはい、なア!!」皆んな買ひに來たのか見に來たのか。その中に松尾が擇りに擇つて金二十錢也の人形一箇を買ひ、我等は宿屋に引擧げた。

旅装を整へ晝の兵糧に宿の辨當を貰つて驛に向ふ。九時五十四分福岡を出發、一路熊本へ。車中の僕は前日の疲れの爲か眠りに襲はれた。車の動搖に目を覺した時、

八二

皆んな晝食の最中であつた。早速僕も宿の辨當を擴けた。隣の連中まだ食ひ足らぬらしく外の人の辨當を襲うてゐる。ミヤかくするうちに午後一時四十三分汽車は上熊本のプラットホームに停車した。今日泊る宿屋の人が迎へに出てゐて下さつた。我等一行は二台の自動車に分乗して——宿屋の人の案内で——先づ錦山加藤神社に。神社は古松蒼然と茂り、境内寂として敬神の念を深うした。清正公の靈前に額づく。社務所で皆の者が記念スタンプを押してもらつてゐる。誰か、「又金を取られはしないか!!」ミ警告を發す。昨日の箱崎八幡宮の件が忘れられぬらしい。此所を辭して本妙寺へ車を走らす。

寺前で車を乗捨て櫻並木の——左右子院二三を含む——間を進む。今日は清正公信者の休日か。南無妙法蓮華經のお題目の聲も聞えず、又癩病患者の存在も見當らず悉く期待に反して何んだか物足らぬ感を懷く。たゞ眼や足の悪い數名の物貰ひが櫻の下に居たのが我々に人生の悲哀を感じしめた。

眞夏の午後の日光は一段と熱度を増してじり／＼と照りつくる。櫻並木の間を過ぎ長い／＼石段を油汗を拭ひ

乍ら喘ぎ／＼上る。その下で子供が四五人遊んでゐた。眞白なコンクリートの大鳥居を仰ぎみ、店屋の並んでゐる間を通り御靈廟に近づけば線香の匂が盛んにし初む。

五色で塗り立てられた立派な建物は成程法華宗だなアミ領かれる。その左側に朝鮮風の苔むした墓が在る。公の朝鮮征伐の際慕ひ附いてきて、公の死に臨んで主の後を追つた鮮人金官の菩提だど宿屋の人が説明してくれた。

同じく右手には殉死者大木土佐守の墓石が一人淋しくその君を永久に守つてゐるかの如く……この君にしてこの臣あり。その偉大なる徳は鮮人にまでも及んでゐるかと思へば一層敬虔の念を深うした。清正公の寛恕の徳に富んで居られた事を表したかの胡孫が朱筆を手にし縦横に書物の上に長い線を引きつゝる所の像の側を通り歸路につく。土産物の賣店の前に立止まる。公に因んだ色々のものを賣つてゐる。「これを買つてやらうか。」「よせそんなものを買ふミ家へ歸つてからお父さん達はうちの子を旅行にやつたばかりに日蓮宗狂ひになつたつて悲しむぜ。」「さや、秋の日蓮宗の南無妙法蓮華經(ドンドコドンドン)とお題目勇ましく歩いてゐる坊さん達にこの太

鼓を土産にしようかと思つて!!」なき冗談を撒き散らして笑はせてゐる者も居る。僕はハンカチを買つて再び窮屈な車上の人になつた。

大道を疾驅し第六師團司令部と嚴しい表札のある處から大粒の砂利をザツ／＼と踏みしめて熊本城内へ。先づ第一天守閣の跡。第六師團司令部の廣場から最初のミスター熊本の全姿に接した。宿屋の人があの附近が新市街、活動館はあの附近に在りますと全市について説明して下さる。活動ファンは「何處の活動が面白いですか。」「どこは何をやつてゐますか。」「活動の様子を盛んに聞いてゐる。此處を下り熊本城の地圖を敷石によつて巧みに書いてある處を観て清正公の築城に於ける用意周到さに驚いた。固靴を脱いで宇土櫓を見學する。貴重な歴史参考品を參觀して急な階段を登る。二階三階には歴代師團長の寫眞が掲げられてゐる。その中に郷土先輩の寫眞が点々ミ掲げられてゐるのを見て感懐を深うした。天主の上層より再び熊本全貌と會見する。福岡に比して森都を誇る熊本は木による自然融合の爲か稍々落つきがあると感じた。熊本城を出て水前寺成趣園に向つた。

八三

晝の疲れでぐつすり寝込んだ。明日の阿蘇を夢みて。

四年 田中達樹

七月二十三日

熊本の一夜がほの／＼と明けた。今日も晴天だ。天も今日の我々の阿蘇登山を祝福してゐるかの様だ。

階下へ下りて旅装を整へる。スポーツマン來島君が腹痛で青い顔をして寝轉んでゐる。「どうした、くく。」と聞くと、「昨夜の氷がこたへた。」と言つて唸つてゐる。實に昨夜の氷は物凄かつた。ドンブリ鉢を少し小さくした様な鉢へ山盛り二杯食べたがの僕もふるへが付いて止まなかつた。今思ひ出しても腹のあたりが急に冷へる様な気がする。そこへ岡庭先生が赤革の靴を提げて二階から下りて來られた。お醫者の恰好よろしく診察されて薬を飲まされた。薬が利いたらしく來島君少々元氣回復。

自動車に分乗して水前寺驛に向ふ。午前七時五十五分發車。汽車は未だ見ぬ大阿蘇に想ひを馳せる我等を乗せて一路坊中驛へ進んで行く。昨夜の睡眠不足がたつたか大分舟を漕いでゐる。鼻に提灯をとぼす者、口から液

近代的建築物の櫛比せる大道を疾走する事や、久しうして別天地成趣園に到る。公園に入る第一歩は實に綺麗だ。云ふ感で一杯で第一印象は満點だ。冷泉到る處に湧き出づる池の中を自由に泳ぐ鯉の群。小山を作り、土手を作り、或は富士を象つた萌出るが如き緑の芝。總てのものが悉く我が目を喜ばす。福岡の東公園もその比に非ず。西公園もその比にあらずと讚美の聲しばしやむあたはずである。動物園に入る。白熊、黒熊、獅子、虎、豹、鷲、鷹と世界の猛獸猛鳥を始め。オットセイ居れば河馬居り、駱駝居り、美しい名禽はその數を知らず、世界の動物を網羅した一大縮圖地の感を懐く。何時まで経つても盡きそうにない滑稽極まる萬歳を演じてゐたのには、しばし我が足を止めた。驚嘆に始まり驚嘆に終つて、名残り惜しく今夜の我等が巢たる迎賓館へ急いだ。

生れて始めての定員三名也の木風呂に入り、夕食をかつ込んで、一同夜の熊本、青い火、赤い火、ネオン、サインの乱飛する處へ流れ出た。我等が耳目を喜ばす大道を潤歩して夜の歡樂境へ。都會に迷ふは田舎者の常で、搜し／＼て宿に歸つた。

体を流す者、大變お行儀がよい。車窓にもたれてあたりの風景を眺める。遙か稻の波が盡きる所に大阿蘇の外輪山が大空にゆるやかなスロープを畫き緑色の絨氈を敷きつらねてゐる。今夜はあの山の内側で寝るのだと思ふと一寸不思議な氣持がした。あれやこれやと思つてゐる中に自分もいつか夢の國に遊んでゐた。白河の鐵橋を通過する音響に目が覺めた。阿蘇五峰が見え初める頃汽車は漸く外輪山を抜けて火口原に突入して行つた。立野驛だ。アイスクリームの非常に美味だつた事と記憶してゐる。車掌さんに阿蘇の説明を聞いた。急に汽車は止つて後退し初めた。暫くするに今度は前進する。下を見るに今通つた線路が見える。又後退し前進して暫時高所に登る設備になつてゐるらしい。

此の頃から漸く空が雲つて來た。美しい瀑布が眼前に表はれて直ぐに消えた。近代的建築の京都帝大火山研究所が其の巨体を向ふの丘の上にさつしりと据ゑてゐるのが見える。九時二十分坊中驛着。

直ちに驛前の小山旅館出張店で木劍を買ふ。あつちでもこつちでも「このそあなんばでありますか。」とお國な

まりを連發して賣る人を面喰はせてゐる。買つたばかりの木劍にスタンプを押して、案内人の先導で一同勇みに勇んで登山。

岩本先生は來島君をつれて先きに旅館へ行かれることになつた。岡庭先生は上衣を手拭で結んで肩にかけ藁草履をはかれ腰に豫備を一足下けられて勇氣凜々として先頭に立つて進まれる。舊道を探つたので道の悪い事又格別で道は狭くて大きい石がごろ／＼して歩きにくい事一方でない。一同難行軍だ。新道に出た。銀色の登山バスが徒歩の我々をあはれむが如くに軽い爆音を殘し、ガソリンの臭氣をふりまいて行つた。又舊道に入つた。三合目と書いた木の柱が立つてゐる。茶屋の爺さんが「ラムネを呑んでくれないかな」といふ様な顔をしてゐるのを尻目にかけて進む内に大分廣い所へ出た。非常に眺望がよい。外輪山は遙か左手の斷口より始まり蜿々として連つてゐる。將來此の外輪山頂上を一周する三十里にわたる大ドライブウェイが出来るそうだ。一息入れて又前進。四合目の茶屋で七錢のラムネを値切つて六錢、水は何杯呑んでもたゞの一錢だ。ラムネを二本呑んで又登る。そ

う／＼皆疲れ始めた。案内人はさすが商賣柄だけあつてたゞ歩く機械の様だ。一見山男然たる風貌をしてゐるが誠に親切に我等の質問に答へてくれる。松浦、岩城兩君の健脚は遠く我々を離して斷然他の迫従を許さない。

青々とした山々には諸所に放牧の牛馬が點々として草を食んでゐるのが目につく。のさかな自然の大牧場だ。

元來此の山には木は一本も無いが七合目頃からはいよいよ一本の草もない眞黒な噴出岩を踏破して行く。佐伯君はあのダルマに手足をつけた様な偉大な体を持て餘して弱つてゐる。心臓の弱い馬屋原君もへたばつてしまつた。

岡庭先生は馬屋原君の雜囊水筒を肩にかけて益々元氣旺盛だ。八合目頃から臭い硫黄ガスに惱まされながら行進する。噴火口は地底がゆれる様な物凄い咆哮を續けてゐる。

九合目に至ればガスの臭氣益々鼻をつく。石造の小屋があつた。流れる汗も冷氣に何處へやら引込んだ。

遂に我々は頂上に達した。しよぼ／＼と降り出した雨は益々激しくなつて服はびしょぬれだ。猛烈な風も加はつて洋傘をさしてゐる連中は火口の中に吹き飛ばされさ

うだ。第二、三、四の火口の周圍を廻つて山を下つた。此の第一火口の中には現在人の死体が五つ位埋つてゐると云ふ事だ。

やがて小山旅館支店に到着。辨當を食べ、別に肉飯を食べたが實にうまかつた。

今度は廣々とした新自動車道を通る。小雨に煙る草千里ヶ濱の附近は幾百もなき牛馬が遊び。まるで泰西名畫そのまゝの風景だ。つい道路のすぐそばまで来て間のぬけた鼻面をつき出す横着な馬もゐる。又小路に入る。雨後の事とて道はバナナの皮をふむ様によくすべる。ズツクを履いてゐる林君は小さい爲か轉んでばかりゐる。岡庭先生もズボンは裂け尻には黒い泥をつけてゐられる。全員皆轉ばない者はなかつたが。皆元氣は旺盛だ。案内人の後に従つて、岩城君と二人で第一着に栃木温泉小山旅館に到着。岩本先生は登山自動車で坊中から頂上まで往復されたさうで既に來島君をつれて宿に着いて居られた。

旅館は溪谷中であつて、すぐ下には溪流がある。聞こゝるは對岸にかかれる瀑布の音。温泉の湯の音ばかりだ。

けて行つた。

四年 林 茂 夫

七月二十四日

俄かに起つた笑ひ聲に驚いて目が覺めた。いつもの癖の朝寢を笑はれたと氣がつく。露台へ飛び出した。そこここに三四人と集つて瀧の音を聞きながら、涼風に顔を撫でられ、楽しい旅行も半ば過ぎた淡い哀しみを表はして話してゐた。熊本、水前寺、阿蘇山、噴火口、それからそれへと限りなく續く。舊噴火口は周圍三十里、口内に居住する人五萬人餘、谷あり、岡あり、川あり、瀑布あり、温泉あり。曾てある本で讀んだ通りを目撃しては阿蘇の偉大雄壯さには感歎せざるを得なかつた。朝食を取ると直に支度。平和郷栃木温泉にも昨日泳ぎ廻つた温泉プールにもグッドバイ。自動車のエンジンの音も輕やかに立野驛へ下つて行つた。八時四十四分、汽車は驛頭に獨り淋しく別れを惜しんで見送る木村君を残してぐん／＼遠ざかる。赤岩の露出した外輪山は紫にけぶつて聳え連つてゐる。轆て汽車は喘ぎ／＼進む、トンネル又トンネル、坂を上り林を通りやつと火口壁をぬけてゐた。

實に優雅閑散な土地だ。自分は否他の者も皆この大阿蘇と小山旅館の思ひ出を死んでも忘れないだらう。浴場が三つ、温水プール、娛樂室、談話室、弓場と設備も整つてゐる。「温水プールはこちら」、こいふ立札に誘はれて松尾、松浦、吉賀、上田、永田の諸君ミプールへ飛び込んだ。まるで大きい綺麗な野天風呂に入つてゐるといふ様な感じがする。後から／＼皆泳ぎに來る。岡庭先生も泳がれた。プールは萩中健兒の獨占場の様だ。先生は松浦君と競泳をやつて見事に負けられた。而して先生曰く「松浦は奈古の海邊の育ちで俺は上州の山國育ちだから負けたのだ」と。暮れ方に又泳いだ。部屋の前に張り渡してある針金には黒い水泳褲やパンツなどが阿蘇の五峰を吹き下す風に翩翩と翻つてゐる。

夕食に舌鼓をうち、夜は會費十錢也の茶話會が開催された。松尾君の劍舞、永田君の浪花節、寄宿舎の諸君の詩吟、岡庭先生の上州民謡等々。腹が痛い筈の來島君までも、餘りの賑やかさに床から起き出して佐渡おけさをやつた。盛會裡に閉會。晝間の疲れで皆も故郷の夢を見てゐる頃、水音以外に何も聞へない山峽の夜は次第に更

大分、大分の聲に夢を破られて、聽て晝過ぎあこがれの泉都別府驛のプラットフォームに立つた。

數台の自動車に分乗して直に地獄廻り、不老泉、陸軍療養所、公園の横を通つて一路八幡地獄へ。先づ白灰色の粘土のぶつ／＼湧きかへるのを見物し逆る湯熱氣の噴出に一驚を喫し、所謂地獄の鬼骨を見て自動車に乗込んだ。「思つたより小さかつたの」、「大したことはない」

「第一説明がなつちよらん」なきまがや／＼話すうちにもう鬼山地獄へ到着。積み重ねた石の間から蒸氣を吹き出し、熱湯の流れ出るのが鬼山地獄だつた。再び自動車に乗り白雲の去來する鶴見獄を左に見上げ青葉の陰濃きドライブウェイをグ／＼とエンジンの衝動を身に感じつ、坊主地獄に向つて疾走。坊主地獄では白灰色の熱泥沸騰してゐて、小なのは椀大、大きなのは電燈笠大に粘土がパチャリ／＼と大きくふくれたり小さくなつたり、止むかと思へば又ミビ上りするのを見て、皆、思はず「氣味が悪いのう」ももうした。運轉手の話で豫備知識を蓄へつゝ海地獄へ。明礬を含んでゐる爲海の様は青々として、底知れぬ熱湯の池から白い蒸氣の上る海地獄を背景

に皆カメラに収まつた。うるさい店屋の呼び聲を後に最後の目的地血の池地獄へ。血の様な赤褐色の粘土の湧く熱湯の地獄で、温度は非常に高く、深さも知れぬが蒸氣はあまり立上つてゐなかつた。地獄見物を終へて、愈々歸館。途中到る所に蒸氣の噴出してゐるのには皆驚いてしまつた。我等の一夜の宿、高砂屋は、別府灣、別府港、遙かに遠くかすむ佐賀關の製鍊所の大煙突を一目に眺め得る海岸の一部を占める景色のよい旅館であつた。

風呂から上ると間もなく夕飯になつたが今まで大人扱ひに御膳であつたのが、急に長い一つの食卓だつたので心中憤慨の矢先、松浦君が女中に向つて言つた「婆、御飯」には皆快哉を叫んだ。楽しく賑やかな夕飯をすますと皆外出したが、自分は四、五人と宿に残つて、銅鑼を鳴して別府港を出帆した汽船の灯が、眞黒な海の中に遠く小さくとけ込んで行くのを眺めて、それからそれへと何時までも話し續けてゐた。

七月二十五日

四年 藤本盛人

靜かな波の音と共に別府の一夜も明け昨夜の雨も名残

りなく晴れて綺麗な海岸の空氣を自由に呼吸することが出来たのは嬉しかつた。食事もそこ／＼に服裝を正して最後のコースを辿るべく出發。カーキ色の服に木劍を持つた一團は異様に町の人の目を惹いた。ガタンミ自動車は一揺れして湯の町別府に「おさらば」を告げた。今迄は異つて海岸近くを走るので眼界が開けて非常に氣持がよい。暫く行くと雨が降り出した。皆は連日の疲れの爲か今日は靜かだ。自分も何時の間にか夢の國を迷つてゐた。

「おい／＼」と言ふ吉田の聲に眼を覺ますと皆兵糧の話込みに忙しい。早速自分も輸入に取りかゝつたが、何しろ寢た後の事で一向振はぬ。雨は相變らず降り續いてゐる。吉田と森田の話に耳を奪はれてゐる間に汽車は中津の驛に滑り込んだ。此處で下車して有名な耶馬溪へと志して小さな輕便鐵道に乗り換へた。汽車もいつても全く廢物利用で機關車の番號等も1と鮮かに其の年齢の程を表はしてゐる。人間も或る程度迄は服裝で其の人格が知られるといふが、我々の耶馬溪への憧憬は少からずこの汽車の存在で傷けられた。速力の遅いくせに馬鹿にひきく

揺れる。桑島や田の中を進む中に左手の方に大きい四角の穴が連つて見え出した。有名な青の洞門である。村人達の嘲笑を物もせず一意専心道路の開發に力めてゐる尊い僧の姿が目の前に浮ぶのを禁じ得ない。

暫くするに汽車は木造のきたない驛に足を止めた。羅漢寺驛だ。下車して愈々耶馬溪探勝だ。時間の無い爲に急いで出て行くと、直ぐ山國川が流れてゐる。「これが耶馬溪か」と思はず聲を出す。無論奥深く入つた譯でないので餘り比較は出来ぬが、この邊の景色は阿武川に大きい岩を入れて兩岸を山にした位の眺めである。見事に期待を裏切られあんぐりしてゐると、側から佝僂の男が自分の背丈より高い様な寫眞機を持つて寫眞を撮らせてくれと言つて來た。吾々は雨上りの小道を通つて川の中でカメラに向ふ。随分文句を言つた揚句に漸くパチャリ。

これで我が萩中旅行團の耶馬溪探勝の終結を告げた。再び驛に戻つて岩本先生に報告する。先生は吾々の荷物番人として驛に残つて居られたのである。皆が盛に耶馬溪の値下げをするので驛長は愛郷心を發揮して「耶馬溪も新耶馬と舊耶馬とがありまして……」と先生方を捕

へて仲々負けずに其の奇景を吹張する。然し其の言葉を信用するには餘りに我等の豫想が事實に反してゐた。一同幻滅の悲哀を味ひつつ又例の汽車に乗る。よく氣をつけて見るミブラットフォーム等は汽車の杭木の焼いたのを積み重ねて其上に土を置いたものであつて、至極簡單で要を得てゐる。宋の蘇東坡は「廬山ノ烟雨浙江湖云々」と歌つてゐるが實に古今を問はず名所見物をした人の感じる失望である。耶馬溪、耶馬溪ミ寫眞に本に、餘り多く其の奇景を知り過ぎてゐた。長門峽と比較して考へて居る中に又雨が降り出した。暫くすると急に車内が騒がしくなつた。見ると汽車の天井から雨が洩り初めたのである。「何とぼろ汽車だらう。」と感心せざるを得ない。實際今迄に汽車の天井から雨が洩つた様な經驗を持たぬ自分には非常に珍らしかつた。皆も多分同様だらう。改めて見廻してゐる間に案外早く中津に着いた。

中津から門司へ、門司から下關へ、上陸第一歩に文明都市の氣分が覗はれる。車の音、汽笛の響、あらゆる機關の金屬的な音が雜然ミ交錯して耳を打つ。二時間許り休んで、再び列車は山陰線を東に進んでゐる。

僕は湯淺と同じ合つて席につく。「これで安心だ」今まで張り切つてゐた緊張が飛び去ると、もう車内は歡喜の爆音が反響する。正明市を過ぎる。「鬼だ〜」誰かが叫んだ。思はず首を窓から出す。和田がわだ〜見送りに粟野驛へ出て呉れたのだ。緩み切つた車内の空氣が一新される。彼は本校の柔道選手として武徳殿へ遠征するのだ。「鬼」と云ふ敬稱を奉られてゐる事でもう彼の強さが察せられるだらう。「鬼頭張れ!」「頼むぞ!」

激動の聲を残して列車は滑り始めた。「此處からが要塞地帯だ!」ミコダツクの連中へ注意しながら汽車はいつか下關の大ホームに軽く停車する。流石西日本の玄關だ。混雜する構内に初めて旅行中だを感じた。早速棧橋に向ふ、純白のスマートな麗姿が吾々を待つてゐた。靜的で單調な菊ヶ濱のみに慣れてゐる僕の眼には近代文明の粹を結晶した様な兩岸の光景、工場、汽船は唯驚異としか映らない。

「馬鹿云へ、小倉に製鐵所があるから」
「でもあの煙突の多い事を見ろ」

る。「さう〜五日間の旅行も済んだのか」と思ふと、何だか淋しい様な物足りない様な氣がする。そして阿蘇の煙や水前寺公園の水や、文化燦然たる福岡の市街が、パノラマの様に頭の中で展開されて行く。岩本、岡庭兩先生の御慈愛の下に無事に旅を終へたことを感謝しつつ、途中下車して家路に向ふ。

キャンブ旅行記

四年 辻 田 稔 次
全 能 美 忠 廣

七月二十一日 憧憬の旅への門出
興奮の爲か眠られぬ一夜は遂に明けて二十一日が微笑してゐる。快晴だ。

快く胸部を締め、生れて始めての背囊を降して休む。玉江驛は汽車旅行團とキャンブ隊員合せて約四十名の美しい期待の花で一杯になる。校長先生、金子、河野、柳屋、福田、池田先生のお見送りに全員感謝の中一番列車に飛び込む。「万歳」の聲に送られてホームを離れた。見る〜先生方の姿が見えなくなる。

上陸!九州上陸だ、これからが大工業地帯だと思ふミ胸の躍るを禁ずることが出来ない。約四〇分の自由行動。W A Y O U Tへ出た時だ、急に驛員が「道を開いて呉れ」ミ叫んで來た。吾々は直に悲しい光景に接しなければならなかつた。戦友の温情に抱かれた三箇の棺の悲壯な凱旋だ。「英靈よ安らかに!」と心の中で思はず頭を垂れた。スピードと音響の交響樂の奏でられる都會門司市見物に歩く。忙がしい空氣を忙がしく呼吸しながら湯淺とぶらつく。門司通の彼は何だか高い公園の様な所に案内した。

「スリ御用心」の注意板も珍らしく感じながら一路福岡さして列車は揺れる。汽車は海岸に沿ひ工場巡禮の様に林立した煙突の煙の中を泳いで走る。「オイ〜、あれは何かい!」

「うん製鐵所じやろう」
「馬鹿云へ、小倉に製鐵所があるから」
「でもあの煙突の多い事を見ろ」

實際吾々はこの工業の盛況に不景氣は何處にゐるのかと疑ふ程だ。

「オイ今度は本物だ」

成程セメントの長い壁が鐵道線路に平行線を描いてゐる。複雑な機械が、熔鑪が、所内の汽車が次々に後方に飛んで行く。汽車の奴、もつとゆつくり歩いてくれればと思つたが、目を射る様な眞赤な焰やゴーゴーと打ち寄せる音響は非常時中の非常時をピンと頭に感じさせる。

野を走り、松原を走り進みに進む。海原の様な筑豊の大平野の稻を嘗めて來た微風に撫せられながら、遠賀川の大鐵橋を渡る。箱崎はもうすぐだ。

まだ見ぬ地に對する懼れの爲か元氣よく箱崎驛に下車する。人員點呼の後暫時休憩する。忽ち驛前の賣店に驚進、カーキ色の塊が店内に吸ひ込まれた。ここのお神さん、儲けたな！と思ひながら僕も塊りの一分子となる。

博多人形の陳列の前には「あれは何ほですか」の連發で買ふ勇士は僅か二三人だ。残りの者は觀賞だ、美的情緒が養はれた事だらうと思ひながら店を出る。驛前を眞直進むと官幣大社箱崎宮だ。あれが伏魔門か

吾々は丈餘の松を遙か下に見て、青空に聳える日蓮上人の像の豫想外に大きかつたのに驚いた。徑一尺もありさうな目玉をグット玄海灘にむいて、威嚴のある容姿に全体からほのかな温情を匂はせてゐる。

身邊に迫る災禍を毫も恐れず法敵ミ闘ひ國難を憂へた其の膽、これを現在の人に求むれば僕は松岡全權を推すに躊躇しない。

狂的に像の周圍を廻つてゐた「南無妙法蓮華經」の聲が少し下火になつた時、腰をあげて電車で西公園へ行く。

車ミ、警笛との都會の空氣に酔はされて、ふら／＼になつて西公園に着く。舊藩主黒田氏を祭神とする光雲神社に參拜後、眺望のよい公園の一角のベンチで汗にまみれた肌を微風に當てながら見渡す。松の間から靜かな博多灣にベチャ／＼白い膝を洗はれてゐるミス福岡が遠くは名島の飛行場から未だ粧ひ新たな松屋、縣廳と美しいパノラマを展開する。

再び電車にて博多驛前高島屋旅館に落着く。今夜は一時にキヤムプの者は汽車團と別れて夜汽車で熊本に向ふのである。兎も角吾々は都會の一隅に一寸ながら住む光

と思ひ乍ら森嚴な氣にうたれて禮拜する。一寸休憩する珍しげな寶物館の前をうろつく。と社務所の人が「お這入りなさい」と窓から首を出した。コンクリートの暑苦しい館に這入る。外観に似ず中は骨董屋の店頭を歩く様だ。期待に背かれて失望の中に館を出た。

「オイ何だらう？」思はず振返ると先生ミ例の社務所の人苦笑しながら對談だ。「何だらう？」と忽ち先生の許に集る。聞けば寶物館の拜觀料が要るとの事だ。無論僕等は無料だと思つてゐたのである。このインチキ野郎奴と思つたがもう及ばない。仕方なく先生は若干の金を拂はれた。

亭々たる松の下で可愛い鳩のクローと云ふ聲を浴びて皆が「よそゆき」の顔をしてレンズを覗む。専門家を思はせる手付で中尾先生の手がシャッターに觸れると平生の顔となる。第一回の記念撮影の光景だ。

折角の神聖な敬神の感情も例の事件で目茶苦茶になり、すつかり幻滅の悲哀を感じつつ東公園へ歩む。カン／＼照りつける陽を逃れる様にしてやがて東公園の松蔭に歩を止めた。

榮に浴したのだ。

汽車團は三階だかキヤムプの者は二階の部屋で疲勞を醫す。恐ろしく無愛想な姐さんが麥茶を運んだきり、幾ら待つても夕食にありつけぬ。退屈まぎれに三階の汽車の連中を襲撃せんといが栗頭を集めた時、愛想のよい姐さんが、吾々がゴトリミ唾を飲むのを横目で見ながら三階へ夕食を運ぶ。忽ち會議を解消して飯にありつく。絹ちやんミ呼ぶ秋生れだ云ふ姐さんが給仕して呉れた。

晝の疲れも何のその、ミばかりにカーキ色の一隊は交錯するライトを浴びながら夜の町見物に。まだ一時まで時間があつたので陰氣な裏町を散歩して見た。

一時になる、三階の連中に氣取られぬ様にと靜かに博多驛に向ふ。岩本、岡庭兩先生に見送られて夜でも混雑する博多驛から乗車する、偶然秋高女の先生達に遭つた僕等ミ同様阿蘇登山の旅行だ。

睡氣の立ち込んでゐる車内で、夜の靜寂を破るカタカタといふ機械的な音響の子守歌に誘はれていつか夢の國に遊んでゐた。

(辻田)

七月二十二日 阿蘇山へ

がたん!! 汽車が一揺れしたので目が覺めた。見るとまだ鳥柄だ。「寢られんなあ、」思はず聲をあけて溜息をついた。「おいおい、」誰か僕を起した。眠い目をこすりながら熊本で乗換へ。

夏の事として汽車は登山客で一杯だ。元氣のよささうな洋装の女生徒、リュクサックを背負つた學生、夫婦連等々、汽車は暫時熊本平野を突進して居たが、やがて阿蘇外輪山にさしか、つた。喘ぎく、だるさうに汽車は登る。向ふの山に白川の発電所が見ゆる。汽車はZ字型に外輪山を突破して行く。

坊中驛に着いた。乗客の大半は登山客で坊中驛前は一時賑つた。驛前の店屋で杖を求め、水筒に水を詰め込んで登山。

廣い自動車道を少し行くと、何處かの消防隊が登山して居た。道に不案内な我等は後に隨つて前進。自動車路から離れて大木の間の山道を少し行くと、草原へ出る。遙か向ふまで青々こ續いて居る。牧場の垣を通つて段々

を如何せん。やつこの事で立ち上り登り始めた。此の邊から山の眞黒な地肌が出て居る。段々登る中に八合目に辿り着いた。此處には草とては一本もない。眞黒い硫黄臭い土や岩があるだけだ。おまけにびゅう／＼と吹く風は土を飛ばし目も口も鼻も臺無しだ。手拭で顔を蔽ふて行く。後れた消防隊のをちさんと一緒になつた。「もうすぐだよ」とをちさんは僕が非常に疲れて居るのを見て慰めて呉れた。あそこが頂上だな、こ重い足を引きずりながら来て見れば、頂上はも一つ向ふの峰だ。洋館まがひの石を組んだ避難所を通り、硫黄ガスに惱まされながらやうやく頂上に達した。

見れば噴火口の中央も思はれる所で萬雷の落ちた様な音を立て、茶色の煙が濛々と立ち昇つて居る。又或物は噴火口に硫黄の熱湯を湛へ、濛々と蒸氣を出して居る。實に何とも言へない男性的な美を感じた。

先生方の着かれるのを待つて居ると、寫眞屋が職業意識を發揮して、愛想よく話しかけて來た。寫眞屋の話による噴火口は大小合せて七十餘りもあるさうだ。噴火口を一覽した我等は噴煙の立ち昇る火口を背景に記念撮

行くこ、白い杭が立つて居る。一合目だ。「あゝ未だ一合目か、歩けるか知らん、」こだるい足を引きずりながら、皆の後を歩いて行く。其處此處には牛や馬が仲好く草を食んで居る。

やつこの事で五合目に着いた。外輪山、九重山を眺めるのに一番よい所だ。見渡せば、東北に九重山が緑の衣を纏ひ、魅力ある體を横へて居り、外輪山はすく／＼と延び行く緑の稲田を抱いて、屏風の如く視界を限り、其の中に内牧、宮地の町々が青く浮島の如く浮んで居る。實に好い景色だ。地理的にも外輪山なるものをはつきり印象づける事が出來た。

一休みして又登り始めたが、岩本、中川、伊東等の健脚にはついて行けず、段々と後へ残された。久保田は弱り切つて夢遊病者の様にふらり／＼歩いて居る。

六合目、中尾先生が餘り遅いので待つ事にして、水一杯つぎ込んだ。健脚連中はもうすつこ上の方まで登つて居る。

「おうい、早く來んか。何をして居るのだ、」と元氣さうに呼ぶ。「今行くぞ」と僕は言ひ返しはしたものの、此の體

影を取つた。

さあ愈々降りるのだ。今度は遅れまいと急いで降り始めた。避難所の傍の店で繪葉書を求めた。十三錢のラムネにぐ／＼なる咽喉をおさへて下山。周囲には幾百となく牛馬が遊んで居る。近づいてもさわつても温順なものだ。中尾先生を待つべく五合目の茶屋に腰を掛けた。茶店の婆さん「ラムネは如何ですかね」と言はんばかりに此方を見てにや／＼笑つて居る。もうたまらん、一同ラムネに貪りついた。ラムネ二本十四錢也を拂つてまた降り始めた。

坊中まで降りて、或るお寺の境内で飯を焚く事にした。時は正に二時。腹は空つぽ。おい交渉係、お寺へ薪の交渉に行け。買物係、米と澤菴を買つて來いと分業かひがひしく晝飯の用意に取り掛つた。交渉係や買物係の出て行つた後で、用なしの僕はテントを敷いて横になつた。睡眠不足のだから休は何時の間にか夢の國を彷徨つた。「おい／＼」と辻田の起す聲に目を覺して見ると、飯盒の飯はもう煮えて、皆は旨さうに飯盒に嚙りついて居る。眠い目をこすりながら飯を口へかき込んだ。飯をすませ、

お寺の堂の縁側で晝寝をした。疲れきつて居る私はすぐに高軒だ。

一時間の晝休みの後、四時半雄大な阿蘇を後に坊中驛を出發、熊本へ向つた。緑の衣を着て、裕々と煙を吐く阿蘇と名残を惜みつゝ、Z字形の難路も無事に熊本着。驛の傍の或旅館に荷物を置いて、田舎者は市中に彷徨ひ出た。水前寺成趣園や熊本城を見學する餘裕もないので、當もなく町をぶら／＼ぶらついた。電光の輝く不夜城歡樂境、がつしりした事務街、繁華な商店街等を歩き廻つた後、腹拵へをして歸り、夜行列車に乗車。座席を捜すのに一苦勞して席に着くや否やもう夢の國をたどり始めた。(能美)

七月二十三日 鹿兒島を経て霧島へ

何日の間にか目が覺めた、「水俣」ミ呼ぶ驛員の聲が耳にこびり付いて離れない。眞暗な闇を汽車の燈火が僅かに野、山、川を辨じつつ睡眠劑の様な音響をたてながら進んでゐるが再び夢の國に迷ひ込んでゐた。

變なアクセントの談話がはつきり聞える。もう覺めた

むした墓石に神聖さ匂はせ、線香の薫りに交つて鮮やかな花の香ひが附近に漂つてゐた。眞心から拜し終つて記念撮影に移る。

町角の親切な立て札によつて南洲翁洞穴に赴く。途中翁の戦死された所による。

洞穴は高さ一丈位の横穴で中は光線がよく當つてゐた。案外大きいなと思つたが大きい西郷さんには手頃だつたかも知れぬ。早速目前の城山公園に登る。途中大小の洞穴や立派な菜園が目立つた。公園は高い所ではあつたが灌水の爲に視野を妨げられて市街も見えないので少し下つて空地に出た。市街の一部分が見える所だつた。

快い木蔭を求めて腰を降す、二三人の子供が草花をつんで遊んでゐた。鹿兒島と云へば其の異様な言葉と南洲翁が頭腦に飛んでくる。で、吾々は一樣に無心に遊ぶ子供等の會話に傾聴したが、スイスカ南米パラグワイに旅行してゐる様なものだつた。しかし荒川が一人のこゝろミ子供の間にドシンと腰を据ゑて

「あんたは名は何ちゆかの」ミ尋ねた。

子供等は不意の乱入者に互に顔を見合せて眼をクルク

なミ感じながら眼を開く。海岸を走つてゐた。晴れた七時の空、爽やかな微風、南國の第一印象は先づ満点だ。珍らしい汽車の朝は暮れて、人々の昇降が激しくなる。もう吾々の車は軽く鹿兒島驛に停止してゐた。

驛前で簡単な朝飯を終へる。背囊を落して輕装で南洲翁のお墓へ歩を進める。鹿兒島は滋味のある町だ。沈着な薩摩人の氣象をよく現はしてゐる。町角の素晴らしく太い活動寫眞の廣告が見立つ。

「熊本は活動の廣告がさつぱりなかつたが此處は多いの」ミ誰かが感歎した。

人氣男荒川が茶目振りを發揮し始める。

「よい、坊ちゃん、さよなら、失敬ぢやつたの」

誰にもこの調子だ。子供等は笑つてゐた。

「そろ／＼熊さんが云ひ出したぞ」ミ皆が朗かになる。

「熊さん、この地圖で案内」齋藤先生の御名令である。

熊さん事荒川が角に来る毎に相談して不安とユーモアの中に、風光明媚な櫻島が鼻先に見える南洲神社の高地に來た。

南洲翁を中心に桐野利秋、村田新八等の英傑の墓が苔

ル回轉させた。いつか外の者も子供等の周圍に集つて行つた。時ならずして吾々は彼等は立派な日本人で國語も話せるがアクセントが一人前の日本人でないのを知つた。「おい嬢さん、坊さん」吾々の敬稱に目をパチクリさせた坊や、嬢やを尻目にかけて下の照國神社に向ふ。

「照國神社は何處ですか？」

「照國神社ナこの下さ……」

この様な應答を數回行つて別格官幣社照國神社に拜詣する。再び中尾先生のカメラにおさまる。

境内は美林に満たされ島津公の像が縁に隠見して見え

た。焼けつく様なアスファルトを踏んで驛前に歸ると直に晝飯だ。

○時二〇分再び車上の人ミなり霧島神社へ。

鏡の様な鹿兒島灣、緑の輪廓がくつきりミ美しい櫻島、詩の國の旅行を約四〇分続けた時、櫻島の背後から黒い雲が一塊、見る／＼中に黒雲の大軍がやつて來た。ポツリ、一滴カラーの上に落ちて首筋をヒヤリミさせた。又一滴、忽ち窓硝子が曇つて全く見えなくなる。むつこす

る空気に生まれ、苦しさに一寸窓を明けたが、激しい豪雨の飛沫にすぐ閉めた。

鹿兒島市に興行してゐた遠山満一座の役者連が「新解釋丸橋忠彌台本」なるものを音讀してゐたのを盗み聞きしてゐたが、彼等が行き先きの宮崎市に話題を變へたので嫌氣がさし退屈まぎれに雨の心配をしてゐる中にもう目が閉ぢられた。

何十分寝たか、何時間寝たか解らないが目が覺めた時は物凄い坂を列車は喘いでシュー／＼蒸氣を吹いてゐた。霧島神社驛は直ちに着いた。

「もう半里だ頑張れ！」と先生に激勵されて小雨を突いて前進する。買物係が今夜の辨當の用意に牛肉を買ふ。凹凸の甚しい道だが先刻の大雨の爲か汁粉の様なドロドロ水が流れてゐた。その道を霧島神宮まで進むのだが期待してゐた半里は中々訪れぬ。突如「よもにかほりを……」を誰かが歌ひ始めたが疲勞に喘ぐ僕は和する元氣もなかつた。

『之より霧島神宮一里』の石碑で一休みした吾々は驚いて思はず齋藤先生を見上げる。

笑ひの種だ。思はず笑ひに釣り込まれた。

寒さを感じる高原の夜は久保田の笑ひ聲も、熊さんの鼻歌に獨占されてゐたが其の聲も漸に全く消されてしまつた。

ゴト／＼。雨戸がゆれた。

(辻田)

七月二十四日 霧島山踏破を目ざして

目が覺めて見るともう外は明るい。「おい」ミ傍の林を起す。「おい」ミ林も飛び起きた。天候が心配なので眞先に外へ飛び出て見た。雨は降つて居なかつたが雲行は穩でなかつた。降らねばよいがと思ひながら出發の用意に取り掛つた。「そんなに思がんでもよい、出發は九時だから」ミ先生が言はれたので、仕度をするのを止めて故郷へ便りを書いた。八時半頃面白い恰好をして記念寫眞を撮つた。

九時、愈々出發、上着を背囊に納め、皆シャツ一枚になつて出掛けた。空模様は心配しながら霧島神宮に參拜、案内人と中尾先生を先頭、中川、齋藤先生を殿に、一列を作り、大杉林の中はじめ／＼した道を進んで行つた。

「實は二里あるんだ」

あつミ驚いたが餘裕綽々たる先生には驚く。國立公園指定の影響を受けてか、ベラスを配した新しい山道を盡すと又豪雨だ、炊事用の米を背負はれた中尾先生の御心配に、僕がもつと力が強ければと思つた。

漸く神社の麓に到着したが、あれだけの雨、濡れた服、それに木炭屋もない、適當な場所もない。先生方の御苦心空しく万策盡きて高等木賃宿にとまることになつた。吾々一行のみで他は誰も宿泊者はない、吾々の天下だ。服を乾かして久しぶりにくつろぐこゝが出来た。友人や兩親に葉書を書く、

「あれはどうかかいのー」

「何でも解らんのは俺に聞け、漢字を書くこゝ歩くが如し」ミ久保田が答える、爆笑の波が天井の鼠を驚かす。

買つて行つた牛肉で楽しい夕食が始まる。

「フフフフ」、突然おこる笑ひ聲にはつミ頭をあけるミ、久保田が口許に御飯粒の團隊を作つて笑つてゐる。

「ナボが／＼」と笑つてばかり居る。

八木が汽車の中で席の無かつた美人に席を譲つたのが

白い杭に左山道、右登山道、と道しるべが立て、ある。

昔を偲ばせる様な大木に「くすのき」あかまつ「くろまつ」等と書いた白い札が下つて居る。原始林の様な林の落葉を踏みしめながら、身に迫る冷氣を肌と感じつ、案内人を先頭に進んだ。

ばら／＼、時々夕立が降つて来る。ひきくならねばよいがと思ひつゝ行く中に、古風めいた大木は段々少くなり、有名な霧島躑躅が殖えて来て、やがて歡木ばかりになつた。

登るにつれて霧がかかり、だん／＼と深くなつて行く。その上風が加はる。然し一同は霧や風位何のその、元氣一杯足許の草を踏みしめて登山。随分来たと思はれる所に山小屋があつた。菓子やむすびを少し食べて、登山人名簿に「山口縣立秋中學校天幕旅行團十五名」ミ記して山小屋を出た。一丁ばかり行つた處に秩父宮殿下御登山記念の石碑が立つて居た。

行くに随つて草は少くなり、熔岩と砂ばかりになつて来た。山の傾斜も急にひどくなり、五十度に達するかと思はれる位。前の者の足が鼻先にあるといふ始末、其の

上霧は愈々深く五六人先はもう見えない。風は右手から吹きつける。背には重い背囊。杖一本を頼りにして進む。ビュウ!!ザー!!風は雨まで加はつた。「これは堪らん」、ミ熊さん(荒川)が悲鳴をあげた。シャツ一枚の我々はすゝと熔岩砂ですべる足を踏みしめ、滑らない様な所を選つて行く。風が吹きつける。杖を反対側へやつて、つかひ棒にする。

案内人が「風の強い時は屈みなさい」と上から叫ぶ。叫ぶ聲はどうか聞えるが姿は見えない。小石の様な雨は横降りに顔へあたり、肌はびしょ濡れ、耳の中へも遠慮なく入る。足はすく、滑り、手は砂だらけ。自然の脅威に對しては如何にもする事が出来ない。上を見上ぐれば霧でその位あるかさつぱり分らぬ。右の方から吹いて居た風が盲目滅法に吹き出した。今迄は左の方へだけ杖で支へて居ればよかつたのが、今度は盲目滅法やるから堪らん。左から風が吹く、右へ杖で支へる。と今度は右から吹く、左へ支へる、前から吹く、後から吹く、杖を前後しながら頭張る、倒れたら最後で。我々の頭には新聞紙を賑はす山の悲劇の事が浮ぶ。死の影が目の前

らつく。生きた心地はない。世の中の有らゆる煩悩を捨て、唯生きんとして戦つて居るだけだ。日頃よく喋る久保田を始め、十五名一語も語らず、黙々として手の先に足先に杖に満身の力を籠めて足の滑る急坂を戦ひ、將棋倒しにせんをする強風と戦ふ。

先生が後れられて見えなくなつた。一同は蛙の様お腹を地につけて伏して待つ。案内人が「最も危険な馬の背は道の幅が二、三尺、右は噴火口、左は急傾斜だから、風が吹いたら直ちに屈み、風の弱い時に走つて通る様に」、ミ注意して呉れた。馬の背近くで四、五人の學生が下りて来るのに出遭つた。「馬の背位譯は無」と言つて我々を勵まして呉れた。愈々例の馬の背だ。右の噴火口からは濛々と霧が立ち昇り、左の急傾斜は悪鬼の帯の如く遙か下まで續いて居る。強風は右から左から前から後からミ我等を颯かの如く吹き、霧の切間から見える噴火口の岩は悪魔の如く薄氣味悪い笑を見せて、我等を死の旅路へ引き入れんとする。

我等は風の弱い時を利用し、十歩走つては伏し、二十歩走つては伏し、伏しては走り、前に後れない様に、轉

ばない様に細心なる注意と機敏なる行動を以て進む。「先生が見えないぞ。先頭待て!!」吉武が大聲で叫ぶ。我等は伏して待つ。伏して氣を緩めると寒さミ恐怖ミが犇々と身に迫る。

幾度か危険な目に遭つて、魔の峰馬の背を通り越した。下り坂を少し降つて、千二百年前霧島神宮の跡と書いた石碑の傍で休んだ。これからは危険はないと言はれて一同ぐつたりこなつた。全身の力は一時に抜けて、足は重く、息ははずんで来る。目の眩みさうな疲労を覺えて頂上に到着した。

頂上には鐵の柵を繞らし、其の中に逆矛が立て、ある。此の逆矛の位置に天孫が降臨されたと言はれて居る。我々一同は姿勢を正して逆矛に對して恭しく最敬禮をした。晴天には九州の南半分と屋久島大島の群島を望み得る大霧島も霧に妨げられて、何も見えない。我我は天幕を着て、びしょ濡れになつたむすびを出して嘔つた。案内人の持つて来た羊羹を分け合つて食べた。その旨かつた事を何に譬へよう。終世忘れ得ぬ程旨かつた。

風の吹く度に我々は寒さの爲にぶく／＼がた／＼と震

へ、寒い／＼の連發だ。こんな寒い處に長居は無用ミ天幕を蔽り、乞食の様な姿をして、下山の途についた。

下山道は霧島躑躅や茅の中の小道を右へ左へと折れながら下るのである。一同元氣に下山し始めた。

雨は豪雨と化し、大粒の雨は沛然ミ我々の頭へ落ち掛つて来る。下るに隨ひ雨は猛烈を極めるばかり。道は小川となり、濁流が渦巻いて流れて行く。我々は其の中をばしや／＼やつて歩いた。頭の頂上から足の先までびしょ濡れになつた。案内人と分れて一里位も來たと思はれる頃自動車道へ出た。此處で思ひがけなく豊浦中學のキャンプ旅行隊に行き合つた。豊中生も我等と同じ様に乞食の様な風をして居る。同縣人だと思ふミ何ミなく懐かしい。色々話をした後、豊中生と別れて狭野神社に参拜した。見事な古杉の林が參道の兩側に立ち並んで居る。我々はこの古杉を背景にして、乞食の様な姿で中尾先生のカメラに收つた。

霧島山登山中に出遭つた大嵐は今こなつては實に愉快だ。最も辛い經驗が後日になつて最も愉快な思出となつて喜ばせて呉れる事を切實に感じた。「實によかつたな

に「押せ、押さんと動かんぞ」と言つて騒いで居た。

大淀で乗換へ省線の汽車へ乗り込んだ。小さいガタガタ汽車に揺られた我々には省線の大きい汽車が有難く感ぜられた。

列車はセメント塀の監獄の様な建物を右手に見ながら、大淀川の鐵橋を一息に渡り、宮崎驛に滑り込む。一際驛の喧しい聲がプラットフォームに響く。列車は驛辨の聲を後に宮崎を出發し、太平洋岸の沼澤地を疾走する。

岡も畑も川も沼も一氣に突き進み、一之瀬川の長い長い鐵橋を渡り、眞鍋驛を過ぎ行く中に蚊に睡眠を奪はれた體は眠氣を催し、車輪の子守唄に何時しか眠りに挿はれた。渴を覚えて目が覺めて見ると、汽車は山中の一小驛に止つて居た。此處より下り坂を驍進し、小山も岩も突き破つて汽車は進み、佐伯に着いた。數多の入江、灣、風光明媚なるに見とれて居る間に又しても眠りに。目が覺めるともう大分だ。斯くする中に濱脇へ着いた。山腹のあちこちに白い煙の立ち昇るのが見える。地獄の煙だなと思つて見て居る中に別府着。

荷物だけ自動車で一足先に旅館に届け、我等は、テ、シ、

いで杖を引き摺り別府の町を見物しながら旅館に着いた。港の傍の見晴らしのよい旅館だ。僕等は眞先に温泉風呂へ飛び込んで旅の汗を落した。風呂から上り、吉武の買つた菓子を食べて居ると、大阪商船の紅丸が入港した。繪好きの原君は早速スケッチブックを出して、寫生し始めた。

午後三時自動車に分乗して地獄見物へ。自動車は中濱商店街を過ぎ、右に折れて有名な鶴見園を右に見て、山のころ／＼道に這入つた。

自動車は大きく一揺れして、プラットフォームの様な家の横へ着いた。八幡地獄と大書した看板が家の軒に掛つて居る。家の中を通つて向ふへ出ると、蒸氣が濛々こ立ち昇り、熱湯が盛んに音を立て、沸き出て居る。傍には粘土がぶつ／＼沸き立つて居る。「説明致します、こ二十才前後の若い男が本を讀む様な説明をやり出した。「今湧き出て居るのは昭和三年四月十九日爆發したもので、一日の湧出量は二百石、温度は百八十度あります」。次は湯の花製造所、蕨茸の小屋の中に何か積み重ねてある。顔を覗けるに熱い空氣がむつと頬を撫でる。その隣の格

子の中に鬼の骨格がある。何か由緒があるのだらうが説明をしない。ごろ／＼いふ音を後に八幡地獄を去つて、次の地獄へ疾驅。

自動車を飛ばしながら運轉手が説明をし始めた。「右の方遙か下方の赤い練瓦造の大きな建物が京都帝大の地球物理学研究所で、左に高く見えるのが鶴見山、右が由布嶽」と言つて居る中に水のない石ころばかりの川の橋にさしかつた。「此處が石垣原の古戦場です。昔大友と島津が此の川を挟んで戦つた處です」と運轉手が説明して間もなく蒸氣の盛んに立ち昇る田を通つた。地獄近くなるに従ひ田の畔から湯氣が立ち、溝は皆湯だ。やがて鬼山地獄へ到着。

温泉の池に眞赤な鬼が居て、その岩の割目から蒸氣を噴きながら熱湯が沸き出て居る。湯氣噴煙が鬼の廻りを取り巻き、其の間から見える鬼の顔が凄い。鬼の周圍には一錢銅貨がばらまいてある。温泉の中に卵が籠に入れてさけてあり、鬼山地獄名物ゆで卵と筆太に書いてある。此處を見學し終へて、海地獄へ。

廣い／＼池が皆熱湯で濛々湯氣を上げて居る。上の

段の小さい池の底に大小數多の穴が開いて居て、湯がてほ／＼湧いて居る。「此の地獄では一日に湯が二万石も湧き、別荘、旅館へ送られる湯は皆此處の湯だ」と頭の禿けたぢいさんが説明した。此處にも八幡地獄と同じ様に名物ゆで卵を書いた札が下つて居る。

次はかまど地獄。自動車から降りるに面白さうな爺さんが「はい、いらつしやう」と節面白く呼んだ。「はい、地獄の一丁目」と爺さんは籠の様になつた岩穴のふたを開けた。中には噴水の如く湯が湧き上つて居る。「はい、お次は地獄の二丁目」と爺さんは上の段に我等を導いた。湯氣で茶が沸いて居る。爺さんが「今から手品を御覧に入れます。此の蒸氣を眞白にしてお目にかけます」、と言つてマッチの火を湯氣のあたりに持つて行くと、水蒸氣が眞白になつた。「どういふ譯だか知りません。何べんやつても同じです」と爺さん又やつた。理由は知りませんが済まして居る。

次は地獄中で最も有名な血之池地獄。名の通りに温泉の色が眞赤だ。血を思はせる此の温泉は何だか凄みがある。此の温泉は十年間に一度爆發する。その原因は此の

赤い粘土か口を塞ぎ、湯が出られなくなるからだ。皮膚病薬や染物の効能を神妙に聞いて此處を出て、歸途に着く。

海軍病院を左手に見て通り、電車路に沿つてまっしぐらに驀進。左手には別府灣が青い絹の様に横つて居る。鼻の赤いよく太つた西洋の婦人が小供を連れて散歩して居る。それ等を一瞬の中に後に見ながら疾驅し、暫しの後高砂屋に歸館して寛いだ。

旅館の二階より別府港を見下すに、紅丸は正に出帆せんとして、色取りくゞのテープが張られ人々は悲しさうに手を振つて居る。テープが切れるのを物珍らしさうに見ながら、萩の港を思ひ出して見る。あゝ何ぞ格段の差のある事よ。我ながら悲感せざるを得ない。

夕飯の遅いのを待ち切れず、海岸通りのセメント路をからんころんと一周し、港の街の情緒を味はつた。夕飯を済ませて一同は赤や青の光を浴びて町へ泳ぎ出た。あちら、こちらと足の向く儘に町を彷徨つて十時頃歸館し、も一度風呂に浴して、港の微風を體に受けつゝ、夢の國へ船出した。

(能美)

七月二十七日 泉都を後に懐しき萩へ
昨夜の疲れがこたへたのか七時半の日光に漸く目をこする。今日が旅行の最後だと思へば又目を閉じなければならぬ氣がした。

朝食の時は、棧橋に九時の巡航船丸が姿を見た、一時の汽車に間に合ふ様に「日本のナポリ」の町をテクシで散歩する。狭いが割に賑やかで西洋人が夫婦連れで買物してゐる状態は流石に泉都別府を思はせる。別府驛の前の雜貨、御土産店の主人が長門峽の話を探ねてゐた。其の主人の案内で轉びさうな階段を四つ五つ登り露台で別府市街を見渡すと屋根、棧橋、山、皆一目に映する、この露台は主人の自慢ださうな。董丸だらう、黒い煙を引いて船が進んでゐた。

十一時門司の列車が構内に驀進して來た。す早く席を取つて思ひ出多い別府ささらばを告げる。

大佛、噴出する蒸氣、は忽ち視野から没す。變化のない汽車の旅は工業都市小倉まで續いた。再び複線に歸つた。モーターボートと競走しつつ門司驛に滑

り込んだ。二度目見る門司驛は案外小さな門司驛だつた。下關もそうだらう。

ホームシツクにかかつた連中もここまで來ると「もう二三日長〜の〜」と元氣づいた。

巨船の間を縫ふ様にして關門のクキンは下關の棧橋の一角に歸つて行つた。混雑する群集を分けて、活氣のない萩行の一員となつた。靴の音、下駄の音が車内へ吸ひ込まれて靜かになる頃。ボー、汽笛が構内にシヨックを與へる。

ゴトリ〜。楽しい思ひ出を胸に七日間の旅が走馬燈の様に脳裡を駆け廻る。

「お前、小遣いくら要つた？」

「三圓に一寸足らん」
こんな會話が各所でひそ〜もれる、
汽車は無心に走り續ける。遅いと思つた山陰線の早かつた事よ。

「ちつと旅行が続いたら……、もう二度と楽しかつた霧島、青島は經驗出来ぬ……」口の中で呟いた。正明市を過ぎた。忽ち幾つかのトンネルを過ぎた。指月山がぼ

つかり姿を見せた。橙の香が鼻につく、と、もう僕は慈母の様な「萩」の懐に抱かれたのだ、萩はやはり僕等には懐い。

列車は玉江驛に着いた。夕靄に包まれた懐しい萩の空氣を呼吸してホームに立つた。

慈父の如き校長先生始め、金子、河野、岩本、池田先生の御出迎へに感激しながら解散した。

危険だつた霧島登山は流石に最も印象強く、當時の危険だつた有様を回顧しつつ家に向つた。

短かつた一週間、歸りたくなかつた、楽しい旅行、とても苦しかつた旅行は無事に了つた、と思ふと軽い吐息がそつと口を流れた。

(辻田)



兵營生活日誌

五年 柳 井 清

十月十一日 水曜日(晴)

「集れー!!」包み切れない元氣に溢れた中隊長の號令がぐーん、清く澄み切った秋の大氣を震はせて、長く餘韻を引いて消えた。

歡喜に張り切つた五年生一同の面。花曇りの空は、今にもバツミ美しき花が咲き相だ。

朝早き萩中グラウンドには、非常時日本を負ふ若き學徒の力強き雰圍氣が醸し出された。校長先生及教官の御注意が有つて、一同は十一臺の自動車に分乗した。午前八時四十分!!諸先生方の御見送を吞うして、教官外職員二名に引率され一同は淡いガツリンの爆音を残して、エンヂ

シの音も軽るく一路!!!山都—山口へ〜と向つた。優しい指月山の姿も次第に視界を離れた。手に染る様な碧い阿武川の面を左手に眺めて、エンヂンの單調な響は續く……

山裾は一面に濃い霧が巻いてゐた。その山肌は早くも、秋の美しきメーキアツプの微笑を見せてゐた。微な疲れを覺えた頃、物靜な山村—佐々並にエンヂンを止め、少時休憩して、冷い秋の澄んだ大氣を深く〜心行く迄吸ひ込んだ。再び隊伍を整へて佐々並を後に、秋色に色付いた田舎道を一路!!山口へと疾走した。四方の山々が狭つて来た様に感ずると、車はもう八丁越えの險路を走つてゐた。銀バス、タクシーが、此の繪の様な險路を、淡い

埃を立て、長驅する光景は、一駒のあの勇しくも危氣な活劇のシーンであつた。車が下り始めると、山口兵營へ〜の宿望も漸次實現へと近づきつゝ、あるのだ。

僕のハートは、未だ見ぬ、軍國の源泉—兵營への淡い憧憬と好奇心に不思議に高鳴るのを覺えた。まして、時は恰も超非常時である。

秋晴れの山口兵營前に自動車を列べたのは十一時五分過ぎであつた。二時間半の動搖も何のその、皆の面は喜色満面として征服の喜びに輝いて居た。

喇叭隊の吹奏する行進の曲に、萩中五年生一同は威風堂々ミ、山口歩兵四十二聯隊の營門を潜つた。先づ眼に映づるのは時計臺だ。その針は靜に十一時二十分を指して居た。白壁の兵舎、緑の芝生、白く秋日を亂反射してゐる營庭、右様左様する褐色の服、總てが整然たる兵營の風景だ。聯隊本部の壁上に、嚴かに秋日を反射して居る御紋章に、眞心込めて入營の敬禮を行つた。醫務の方の健康診斷があつて後、聯隊長代理—岩橋中佐の「兵營では理屈では無く實行、體驗である」ミ言ふ一條の御訓示が有つた。各小隊の指導上等兵殿の紹介の後、一先づ荷

を各中隊に解いた。微笑に溢れた兵隊さん達の顔々々!!僕等は限り無き親し味を以て、無音の歡迎に答へた。

靴を脱いで一步舎内に入るミ、犠牲的精神—進ンデヤレ!!のモットーが強ク眼を射た。

僕等の室は豫備室であつたから、熱河作戦の圖や海に生きる日本等のポスターが貼つてあつたが、他の室には何の裝飾も無い、殺風景な、整然たる物置の様な感じがした。只軍人の魂たる銃のみが、油ちみたら重い光を放つてゐた。埃まみれの武裝を解いてほつとした。僕は中隊長の室に入營の挨拶に何候したが、兵隊さんと同じく何の裝飾も無かつた。持參の辨當に舌鼓を打つて、兵營への第一印象に花が咲いた。食後少時休憩後、前庭に集合。機關銃隊の右に整列して、日置農林校と共に新兵器の説明を拜聴した。ぶて〜に肥えた岡村中尉は、熱のある説明の合間々々に、「兵隊方では明日の戦に準備する準備、練習ではなくて、今日の戦、今からの戦を目標にする猛訓練である!」ミ切迫した危機を充分に認識した軍隊の行動を説明された。最後に山砲を撫して、「軍費節約の餘波と兵器増加の希望ミに依つて、今此處に再び、日露の戦

に出征せし古強者の大砲を引きすり出して、その操典を之等の小父さん達を召集して教育してゐるのである」を説明された。「小父さん達」言はれた兵隊さん達は召集兵殿の面々で、小さい帽子をちよん載せたのやだぶだぶの服を着たのや、ロイド眼鏡、ちよび髭……等、まるで傭兵のお歴々の様な姿だつた。そして僕等の顔に、こゝろこゝろ人なつかしの微笑を送るのでした何故に、召集兵を集めて、廿五年も前の古い砲を引き出してその操法を教育せねばならぬのか？、其處に非常時に會せる吾等青年學徒は何等かの暗示を受ける筈だ!!!

吾人の覺悟はそも如何に……? 説明の後、召集兵の小父さん達の大砲操法の演習を見學した。それは實戦味を帯びた演習だつた。その緊張味は吾等共鳴性に富む若人の心を揺り動かすに充分であつたそれから……馬屋に廻つた。スマートな乗馬、グロテスクな駄馬等を見學した。手入れの行渡つてゐるのには今更乍ら驚いた。馬屋の北には大きな船体の模型があつた。上陸演習の爲に造られたと言ふ動機を想ふ時、胸にひし／＼と迫るものがあつた。酒保を見學して歸隊。

すぐ入浴。清潔な湯槽に、一日の疲れをすっかり洗ひ落して生き返つた氣持に成つた。少時すると「分配!!!」の聲が掛つた。夕食だ。食事常番に當つた僕は重い御飯のバケツを持ち上つて、女房役よろしく、アルミの御椀に御飯を盛つた。御飯は立派な色付きで一種の臭氣が臭覺をついた。皆の者も食事は餘り進まなかつた様だ。六時半が来るに、待つてましたと許りに皆は酒保目指して韋駄天走り。僕が後始末を終つて馳せ附けた時には、家の中は本當に騒がだつた。三錢の汁粉やうどんに酒保氣分を味つた。兵隊さんの顔には一日の疲勞も何も消し飛んで、陽氣なニコ／＼が浮んでゐた。パンやせんべいが忙しく大きな口に運ばれてゐる。ラウドスピーカーからは慰安の曲が強く高く、まさらかな室内に流れ出る。舍内は生々として、一日の慰安は充分に盡されるのだ。腹がさけ相になつたので中隊に歸つて、八時半の點呼迄今日一日の感想に花が咲いた。満腹した連中がぞろ／＼歸つて少時するに嚴しい點呼だ。消燈は九時であるが、疲れた僕等は、窮屈な床にすり込んで兵營生活の一日は更けて行くのだ。

十月十二日 木曜日(晴)

「起床!!!」と叫ぶ聲にまさらかな夢は破れた。寝むい兩眼に映つたのは、下宿の天井では無くて兵營の暗い天井だ。(兵營生活か?)と思ふ暇も無く元氣よく跳ね起きた。ゴト／＼と石の落ちる様に皆は階下に降りた。朝早き營庭は、未だ夜の幕明けやらで、山都の冷氣がひし／＼と肌にしむ。何處かで雞の聲と汽車の鳴笛がする。朝の點呼が終つて、僕等はラジオ体操をしたが、兵隊さんの体操に較ぶればお姫様式の様で、辱しくてやれなかつた。終了後、洗面所に馳け着けた。冷たい水に寢氣は後形も無く覺めて、頭腦は秋の大氣の様にクリヤーだ。もう一中隊の方では銃劍術の朝稽古が始まつてゐる。オーヨーミ力強い日本軍人の雄叫びが澄み切つた朝の空氣を震はせて遠く／＼消えて行く。實に元氣で勇敢だ。感激性に富む僕等は何かやりたい衝動を感じた。朝の營内は實に忙しくて目の廻る様だ。ぼかんミして居る僕等のはけ者にされてゐる様な氣がした。食事常番は早くも、朝の分配を始めた。日直の報告——今日は戀路射的場にて實包射撃!!射場準備員は七時迄に集合!!準備員は忙しく御飯を

かき込んで武裝する、辨當を詰めてもらつて集合、直に出發!!本隊は三十分後堂々と、裏門から一路!!戀路射的場に向つた。空は花曇り。邊には未だ深く霧が掛つて、雜草の露は冷く薄い光を反射して居た。到着後、僕は友人九人ミ標的の方に廻された。霧も薄れて絶好の射撃日和!!頭上三四尺の所をビュー／＼と無氣味な音を引いて實包が流れる。と、ブスツミ的に當る。的がくるつと廻轉して点が出る。あちこち的にブスツ!ビューと實に凄愴な音響を醸し出して玉は流れる。兵隊さんの輕機がバタ／＼と射ち始めて戰場味たつぶりの雰圍氣はいよ／＼濃くなつて行つた。あれが人を殺す實包の音かミ頭上を走る音響に聴き入つた。空を仰げば日本晴だ。次の者と交替して空腹を満たした。秋の日はもう頭上に輝いて居た。食事を終つて早速射つた。ドーン!!強い音響と共に、強い反作用がグーツと肩に掛つて、銃口がぐら／＼と舞る。一日中秋日に照らされて、いさゝか疲れを覺えた頃、無氣味な音響を後に、疲れた体を兵營へミ向けた。辨當での空腹を満すべく、直ぐ食事が始つた。あのいや

だつた御飯が不思議な程、喉を舞つて通過した。残飯は無いが皆が言つた程よく食べられた。

食後、風呂には入つたかと思ふ時「衛戍病院の向うが火事だ、入浴者は直ぐ中隊に歸れ!!」と言ふので飛んで歸つたが、建物から離れてゐる小さな廢屋だと言ふので行くのは止めた。空に歸つて、あの愉快な雰圍氣にひたるべく友人と酒保に馳せ着けた。空には靜かに星がまた、いてゐた。夜氣は次第々々に加つて行く。八時半の點呼が終ると直ぐ友達二人が不寢番に立つた。僕は狸寝入りする間もなく、酒保で肥えた腹をかゝえて夢の國に引摺り込まれて行つた。

十月十三日 金曜日(晴)

「柳井!!柳井!!」と呼ぶ聲に眼が覺めた。「おい!不寢番だ!!」と言ふ岡田の顔が大寫の様に眼に映つた。

「よし!」と號令一番床をけつて起きた。腕時計は靜かに三時二十分を指してゐた。武裝して金山と共に階下に降りた。すゝつと夜の冷氣が寢足らぬ頬をなでる。交替の禮が終つていよく不寢番だ。僕は初め階下に立つたと、何處からか微かに一番雞の聲がする。山都の夜氣は

肌にしむ。巡廻の組と交替して二階に上つた。寢台からは安らかな寢息が、それに混つて驚ろしい様な鼾が聽える。晝間の疲勞と体力のメーターたる寢姿は、召集兵の小父さん達のが一番猛烈だつた。皆の室は、學生らしく行儀がよかつた。一巡して階下に降りて時計を見たら、二十分程と思つて居たのに、もう一時間を経過して居た。四時半。次の番たる小方と佐伯を起こして交替した。再びほのかな体温の残つて居る床にすり込んだ。皆に安心して安らかな夢を結ばせる不寢番を一回なりとも体験した僕は、その價値をつくゝ味つた。

まさらかな夢を破る起床喇叭の音に、皆は一樣に飛び起きた。今朝も八張り外は冷い。點呼を終つて軍隊体操を行つた。一!!二!!三!!………と曉の大氣を震はせて學生らしい力強い號令。伸びた四肢は元氣一杯に動く。食後少憩。何處に行くのか、三中隊の前には鐵兜隊が整列してゐた。正八時。舍前に集合。第二小隊は假設敵となつて命令一下、一路、懸路方面に進んだ。射的場ではもう豆をいる様な實包の響が八ヶ間敷しく起つてゐる。その響は未だ消えやらぬ朝露を震はせ、谷に山に強く反

響して遠く山口平野に消えて行く。射的場の横の畑で、

教官からの遭遇戦に對する説明と注意があつて後、斥候はすぐ飛んだ。先兵ミなつて進んだ僕等は、「敵の部隊現る」の警報に前方の土堤に火戰構成。空は薄く曇つて、敵の銃聲は絶間なく續く。指導の上等兵殿に八ヶ間敷く注意され乍ら豫備隊が火戰に増加した。前進。停止。………大聲を張り舉げた突撃を最後に午前の演習を終つた。朝露に皆の服はしつみりと濡れて居た。何處かの小學生が遠足だらう、ニコニコ微笑乍らステップ軽く行く實包の音は絶え間なく反響して居る。皆はステップ軽く懸路を後に兵營へミ向つた。威風堂々と裏門を通過して前庭に停止。曇つて居た秋の空は明るく晴れて行く。

それから、時計台の前で萩中五年生一同は、日置農林校と共に軍旗を拜する無上の光榮に浴したのだ。聯隊長、赤松大佐殿は除隊せんとする補充兵の方々の爲に、皆が除隊しても常に軍旗の御尊影を眼底、腦裡に銘刻して、立派な日本軍人、日本國民としての生活を送れと言ふ一條の訓示があつた後、僕等一同にも、此の軍旗は防長二州の軍旗であるから諸君は特別な關心を此の軍旗に持

たねばならぬと言ふ御注意があつた。

この軍旗!! 防長二州の大丈夫が幾人この下で血を流し陛下の御國の万歳をみなえた事だらう。今僅かにふさのみ残したこの軍旗——その名譽の旗を拜す光榮に浴した我等一同——若い血に燃え、感激性に富む若人——の胸に響く感激は如何許りであらうか。

中食を終つて後、秋晴れの一ノ森に向つて元氣よく前進。社殿の影に隠れて居た本隊は命令一下、森の北端に火戰構成。敵は日置農林。良き相手を得た皆の心は緊張して萩中の名譽の爲に紅顔の少年の面には必死の緊張が漂つて居た。前方の小丘に日置農林の青服がちらつとした。先づ輕機が火をふいた。ミ、森の右端の小隊が鐵條網を潜つてぐゝつと進んでばつ!と伏せる。ミ、左端がず、一つと進む。止るミ中央の小隊がばつと出る。それは、素敵な前進だつた。空包の響はだ、つ廣い練兵場を壓して遙か秋晴れの碧空に消えて行く。素敵な前進は續く……折から突撃ラツパは喇唳となり響いた。銃劍が午後の秋日を反射してきらつと光る。底力のある若人の聲が響つた。思ふミ、黄色の塊がミ一つミ小丘を包圍して

突入した。退却する敵を追ひ進まんとした時、休戦ラツ
 バはぐーんと秋の大氣に伸びて行つた。北清事變戦死者
 記念碑前に集合、碑に心から敬禮して、日置農林を親し
 く敬禮の交換を行つて別れ、木蔭にゆるんだゲートルを
 巻き／＼今の演習に對する心よい追想に耽つた。長い攻
 撃に皆の服は汗で濡れてゐた。えらかつただらう？然し
 立派な成功を収めた皆のハートは喜びに震えて居た事だ
 らう。少憩後、再び營門を潜つた。營庭でお得意の分列
 を行つて開散した。

すぐ風呂に飛んで行つて、汗を疲れを洗ひ落した。いや
 に遅いなーと思ひ乍ら夕食を待つた。今迄こらえて居た
 空腹が行儀悪く不平を言ひ出した。本當に此の時程食事
 の待ち遠しい事は無かつた。御飯は元氣よく喉に舞ひ込
 んだ。勿論足らなかつた。兵隊さんが足らんと言ふ筈だ
 と思つた。腹の満たぬ皆はすぐ酒保に向つて章駄天走り
 たらふく詰め込んで七時に集合。静々營門を出て煉兵
 場に向つた。夜氣が満腹した腹に入る様だ。夜の練兵場
 で日置農林を對抗して歩哨の動作をした。空には満天の
 星だ。頭上をミルク色に流れて居るのが天の川だらう。

床喇叭の音。「起床!!」誰れか叫んで起きた。と同時に
 皆の床はむく／＼と動いて、習慣づけられた一同は元
 氣よく床を離れた。最初の朝の起床と較べて隔段の進歩
 が見られる、其處に習慣の賜物があるのだ。

東空は微に茜さしてゐた。勝手の解り初めた皆は兵隊さ
 んに後れずに、否より早く營庭に集合して點呼を待つた
 軍隊式体操を元氣よくやつて勝手知つた洗面所に馳せつ
 けた。食後中食のパンをもらつて、立つ鳥後を濁さず
 と立派に後始末をして武裝も整然として指導の上等兵殿
 及び過番士官殿にお別れの挨拶をした。中隊長殿にもお
 別れをして、中隊の兵舎をバックに記念撮影をした。
 時計台の前で御紋章にお別れの敬禮を行つて、馴れ初め
 た白壁の兵舎、緑の芝生を後に一同は力強きステップを
 以て山口歩兵四十二聯隊の營門を離れて行く……………。

秋空は日本晴れだ!!皆の心も日本晴れだ。
 八幡様の境内で自動車を待つ間、山口の町を少し歩いて
 見た。午前十一時!!四日を送つた山口の町を後に、一路
 !!なつかしの萩に。心地よいクッションの動搖に八町越
 の險路は寢入つて居た。優しい指月山の姿を見た時、言

味方の斥候が見つかつたのだらうか？パンと夜宵に銃聲
 が大きく響いた。晝に疲れただらうと言ふので早く中止
 して引き上げた。酒保で詰めた腹はもう空いてゐた。
 十時迄延燈があつたが疲れた僕等は意地もなく安らかな
 夢の世界に歩み入つた。

十月十四日 土曜日(晴)

山都の冷氣に眼が覺めた。腕時計は靜かに時を刻んでゐ
 る。星明りに五時十分前を指してゐる指針が微かにのぞ
 かれる。隣床の水津のリズミカルな安眠の寢息が、靜か
 な明方を思はせる様に聽える。

(あゝ今日でお別れか)と馴れ初めた兵舎に、その雰圍
 氣に微かな別離の愛執が湧く。その日数は僅か三日では
 あつたが——何かが好奇心をそよる最初の日。秋晴れの
 天が下で充分に實包の響を味ひ、体験した射撃の日。

朝からの演習に苦しかつた三日目。そして今日は……………
 今、此處に或る親し味を覺え始めた頃、別離の日が訪れ
 たのだ。長く憧れてゐた兵營の暮し……………長くも感ぢら
 れ、短くも感ぢられる三日間!!……………
 心よい追想を破つて、曉の雞鳴の如く朝の靜寂を破る起

ひ知れぬなつかしさを覺えた。二時に歸校。あのグラン
 ドにも下級生の顔にも不思議な懐しさを感ぢた。教官の
 講評があつて後、校長先生の一條の御訓旨があつた、聞
 く皆の面は——淡く秋日にやけたその面は兵營の緊張その
 ま、に輝いてゐた。

僅か四日ではあつたが、非常時の兵營に日を送つた吾等
 學徒は、その四日を意義ある四日とすべく、立派な實を
 結ぶべきではあるまいか。處は違つても、方法は違つて
 も、その精神に於て、その動作に於て四日たりとも兵營
 生活を体験したゞけの實を結ぶべきだ。其處にこの四日
 が意義ある四日として現れるのだ。

各指導上等兵殿の親切なる御指導に對して感謝すると共
 に、僕等は中村候補生の涙ぐましい御援助を多謝して止
 まず。一日親しく演習せし日置農林の發展を祈つてペン
 を置く。

五年生兵營宿泊の所感

五年 辻野 三郎

「病は口より」といふ古諺があるが、今自分は一つの新諺

を得た。それは「病は心の弛みより」といふのである。自分は兵營宿泊に行く前から、大分風邪に侵されてゐたのだが、一步聯隊に足を踏み入れたその瞬間からの緊張しきつた心、嚴肅壯重な気分は風邪なんか何んのそのといふ意氣込で、何處へか吹飛ばしてしまつた。薄つびらな毛布二三枚の床も風邪なんかの製造所と思つたら大間違ひだ。

兵舎の配列の當を得てゐるこゝ、室内の兵器、被服、其の他備品の配列、整然たる整頓の状態には、流石、傳統を誇る陸軍だ、ドカンと第一印象が頭にこびりついた。他も斯くあらんと陸軍の全斑が推察出来る。非常呼集、戦闘開始、火災呼集、等の際、他人と混雜することなく間髪をいれざる間に前庭の所定の位置に集合出来るのも宜なるこゝだ。

統率者の一絲亂れざる統率振り、兵士の上官に對する尊敬と服従心には痛く心を動かされた。戰場に於ては鬼大尉とまでも紳名される大尉も、平居部下に對しては、義は上下の別あれども、情は兄弟の如く朋友の如きそれに似てゐる。食事の際の協同心、當番の犠牲的、献身的

、應答、復唱等……サツト一度に何をしても、上官の佩劍、靴の音、が聞えるこゝ立つて敬禮する様假令上官が答禮をしようが、すまひが、見てゐようが見まいが……さういふ様、我等學校生活をしてゐる者は早速實行すべきである。

女人禁制の一娛樂場、陸軍酒保内の和氣霽々とした風景。今日の演習に、近き將來の戰爭話に、或は豫備兵さんの懷古談に話が咲き笑ひさめくその姿、晝間のいかめしい軍人さんとも思へず。營利を主としない此の娛樂場では物價の安いことにも驚く。

晝間の演習の疲労を現さず、寢い／＼愚痴を洩さず、戦友の寢所を巡廻し、毛布をきせたり、窓を閉めたりする不寝番。そも友情の發露か、陸軍の用意周到さか、何れにしても我等の最も感激せしものである。

各個に分れての分業的演習、此處で機關銃兵の戦闘訓練、彼處で歩砲兵の火炮訓練、歩兵の銃剣術の猛練習、機關銃隊の乗馬訓練、天に轟く實砲射撃の音、各自皆一生懸命に皇國の爲に働いてゐる兵士を見たとき、奢侈逸樂に耽りカフエーにダンスホールへと足を運ぶ輩の氣持がし

精神及び觀念の旺盛なるこゝには感心せざるを得ない。配當が終るまで誰一人こして箸に手をつけるものはない。それに反し我等學生班のあさましい様よ。當番が飯をもつてくれば、我先きにこついで食ひたがるし、當番も自分のを眞先きにつぐといふ有様、亦當番の巡回の不確實さ。一班の人がその班の當番を知らないといふことも屢々ありて、先輩中村幹部候補生からの注意も數度だつた。

規則正しい、時間嚴守の兵營生活、一分一秒の時をも浪費せず、全聯隊がラツバのもとに區別判然と動作して行くあの快い味はひは、他で味はうこしたてとても味はれないものだ。朝の心よい起床ラツバの音、すがすがしい新鮮な空氣、明けきれない黎明の薄寒空での一、二、三……の聲も勇ましく凛々とした點呼、シャツ一枚こなつての男々しい体操、遙拜……夜の點呼、就寢ラツバの人を微妙に寢に導くあの音、すべて陸軍を代表してゐるリズム的な調子が我等の頭に深く響いた。

上官に對する兵士の敬禮、應答、すべて我等學生の班に似、印象に深きものである。テキハキとした齒切れのい

れず、「一度兵營に来て見ろ」と言つてやりたい氣がしたし、己が一國の行政長官ならカフエー、ダンスホール何んで、獨逸のヒドラ御大を眞似るのではないが、ぶつ壊してやるんだがといふ氣が起つた。そして皇國の爲なら一命を……いふ愛國心がむく／＼こ起るを感じた。其の時さう感じたのは恐く自分一人ではあるまい。而し此等各グループが各自に任務を盡すと同時に一つを放しては他の存在を危くする有機的に、微妙に連結し、功妙に連絡的、個々の行動をみるのを見るこゝ、參謀本部附の將校達の頭のよさが知れる。

「百聞は一見に若かず」。我等は運動場で色々々教官から説明を聞くが、實際に兵營にきて聯隊の射撃場で實包射撃を体験し、その如何なるものを体得し、且つ日置農林司の對抗演習に於て、あの廣い練兵場を縦横無盡に馳驅し、汗みどろになつた時の氣持、眞暗な夜中に懐中電燈をもつて歩哨に立ち、斥候に出た時の氣分、之等すべてを體驗し、實に千金萬金の値で、我等はより深い體驗を積んで、より教練の深味あるこゝを感じた。

特に我々の最も光榮とし、感謝すべきは聯隊の眞隨、生

山口聯隊兵營宿泊所感

五年 中村 整 一

命ともいふべきあの光輝ある、莊嚴な軍旗を拜したところだ。あの瞬間の気分、感激は一生を通じて、聯隊長の訓辭——悲しい時も、嬉しい時も、逆境に立ちし時も、怠惰心が生じた時も、日夜寢起を共にし、且つ北清事變を始めとし、幾多の戦役、事變に従軍し、干戈の間を往來し、幾千、幾萬の忠勇義烈なる戦士の英靈を包含せる軍旗を思出し、その悲しみを打ち除きその逆境を乗り越え、怠惰心を征服、抑壓し、皇國の爲めに盡すやう——に、腦裏に深く刻まれて忘れ得ぬものであらう。

人間の修養には、或る一つの中心基礎が必要である。軍隊ではそれが軍旗である。實際軍人は此の軍旗を思ひ出す時、逆境をも怠惰心をも征服抑壓するであらう。實に軍旗は軍人修養の立派な中心基礎である。之に反し吾人は此の軍旗に相對する様な立派な修養上の中心をもたないものである。キリストのキリスト教も、釋迦の佛教も、所謂信仰も、將亦古人の英傑も、軍旗の如く確固たる、亦純心を捧げて、身を委ねる價值はないのである。

山野の樹木紅を染めて、秋色の粧ほひ愈々深まらんとす。仰げば蒼穹に飛雲流れて、地上遙かに稻穂は黄金の波を打ちつ、視界の果に續く。

此の好時節なる十月十一日より四日間、我が萩中第五學年一百餘名は、柳屋教官殿及び二先生に引率せられ、歩兵第四十二聯隊に於て兵營宿泊をなすこと、なつた。

午前八時校長先生の御懇切なる訓辭を戴いて出發、途次車内の靜肅なりしは喜ぶべき事であつた。十一時聯隊着。直に整列し歩武堂々として營門をくぐる。營門にて教官殿に對してなした衛兵の敬禮は、思はず吾人を緊張せしめ、最初の深い印象であつた。

第二中隊の階上が吾れ等の空まで與へられた。質素と言ふよりも餘りにも粗末な室だ感ぜられた次の瞬間、正しく整頓されてゐるのに全く感心した。日常自己の書齋に紙片のよく散らかつてゐるのを思ひ出して、微かに吾れと吾れが心に辱ぢた。營内の有ゆる仕事雑事が、秩序

良く、時間的に動作され、整理されて行く事は、自墮落な生活をなし易い吾人學生に於ては、確に好い体験であつた。自分の事を自分で處理する獨立自營は、修養の途上にある自己にとつて、又良き收穫であつた。營内では家庭に於て満たされる事でも不自由な事が多い。それに對して一言の愚痴をも吐くべきでない。洞察すれば總て吾人に教訓となるべき事で足らなければ足らないで満足する精神が養はれて好資料が各所に發見される。其後新兵器見學、年毎に精巧を極めて行く兵器を考へる時、爾後の戦の如何に悲慘であるか又國防充實の如何に切要であるかを想はせられるのであつた。次いで聯隊長代理の訓辭あり。特に百の理論は一の實行に如かず云ふ意味の下に話された。吾れ等にとつて感銘新なるものがあった。後兵舎見學、整頓、清潔、質素が隨所に見られ、一として好箇の参考ならざるものはない。六時夕食、素食なれど比較的美味であつた。食事の際に於ても、協同一致の精神は確かに養はれる。六時半から酒保が開かれる。自分も見學に行く。設備も整ひ一日の勞を慰するに充分だと思つた。兵士は、食ふ事と、風呂に入る事と、

そうして寝るのが一等楽しいものだと言ふ事も聞いたが、自己も斯く感ぜられた。八時半點呼、九時半消燈。次に來たるものは不寢番勤務である。自分の一時間の睡眠を割いて、心から他の保健に注意するのは犠牲的精神の涵養である。親と愛兒間の情味があつて實に嬉しく感じた。

第二日。快晴。射撃場に於て小銃實包射撃行はる。實彈射撃は最初なので何だか不安の心からかれてゐた。其の音は邊に強くこだまして、思はず手に汗を握るのであつた。この射撃に於て、よく命中し得なかつた事は残念であつたけれども、身神一体となり、しかもその中に於て、確實性を養ひ得た事を心から喜ぶと同時に、一の信念を持つ事の必要を感じた。

第三日快晴。午前中隊を二分して遭遇戦を行ひ、歸營後軍旗を拜する事を得たのは、特筆すべき光榮であつた。幸運にも除隊兵が軍旗を拜する機會に遭遇した事を私に心から嬉しく思つた。軍隊に於て最も尊嚴なる軍旗を今日の邊に拜して、この御旗の下に砲煙彈雨を物ともせず陛下の御爲にその一身を顧みなかつた幾千幾萬の我が

先輩を考へる時に、感謝の涙を禁じ得なかつた者の一人である。この忠勇義烈なる兵士のあつてこそ初めて我が日東帝國の恒久性は保證されてゐるのだ。後聯隊長殿の訓辭あり。即ちこの軍旗は單に歩兵四十二聯隊のものたるに止まらず實に防長二州全体のものであり、吾人はこの軍旗の基に常に各自の自分を全ふすべき旨を懇々と述べられた。吾人はこの訓辭に對して背かざる様注意すべきだと心に誓つて止まなかつた。

午後、丁度時を同じうして宿泊した日置農林學校の對抗演習行はる。吾人の心はいやが上にも緊張した。彼等に劣つてたまるものかと、所謂敵愾心なるものが確にあつた。吾校が攻撃軍となつて、あの廣漠たる練兵場の一角にその火蓋を切つたのは、陽の光も燦々照る午後二時であつた。

「散れ！」の命令が降つて「前へ、止め！」の分隊長の號令が繁く度を重さねるに従つて痛勞も加はる、愈々火線構成の中隊長の命令と共に中隊、分隊の射撃目標は定められ射撃開始となり、疲勞も苦痛に益して敏活なる動作と緊張せる精神は益々必要になつて來る。正義の爲に國

民を後にして戦ふのだと思ふ時、雄々しい武者振を感ずる。廣い練兵場を一氣に横切つて、高地を占領せる農林校軍に迫る。そして次に來たるものは何か。あの犠牲的精神の發露たる突撃である。目ざす敵陣地をば我が銃劍の尖に貫かすんば已まざる意氣、何物をも忘れて我が全靈、我が全精神をば銃劍に打ち込むで四邊の草木をも薙ぎ倒す様な力強き喊聲、嗚呼其の瞬間こそ剛膽にして敢爲的な精神練磨のクライマックスである。想ふに吾等の前途は遼遠である。眼前には幾多の難關が横たはつてゐる。此の人生の難關をば打破して自己の目的に勇往邁進し、以てこれを貫徹するには、あの何物をも打破らすんば已まざる攻撃精神をもつて、人生航路を開拓し、以て世に處すべきであるに痛切に感じた。

夕食後歩哨の演習があつた。冷たい、身に浸む様な夜氣の中に銃劍を手に驚掴むで前方を凝視してゐる時に、あの紅い夕陽の沈む滿洲で、或は馬賊の不意打ちに、或は不逞輩の攻撃に攻めては守り、守つては攻むる我が皇軍の如何に苦しんでゐるであらうか、轉感謝の念を禁じ得なかつた。

第四日 雜事を了へて宿舍掃除、「立つ鳥後を濁さず」各自懸命にこれに徐事した。そうして樂しき、慕はしき兵舎を、大隊長殿の別れの言葉を聽いて、出發したのは午前八時過ぎであつた。何だか懐かしくて仕様がなかつた。

想ふに、この間に於けるが如き苦痛にも、一人では堪へられず、節制の精神も養はれなかつたであらう。こゝに於て協同團結の力は、その偉大性をよんどころなく發揮するのである。此の記念すべき四日間の宿營生活に於て、吾人體驗し得たる事及び與へられたる靈感が少くも今後の吾人の處世上に如何に偉大なる感化を與へて吾人を導き得るかと思ふ時、實に痛快の情に堪えないのである。吾人の眞價は困難な時に、それに打勝つて初めて燦たる光彩を放つ。宿泊間得た體驗を善用して將來修養に、勉學に、勇往邁進せん。

宿營四日間は實に好い試練であつた。

秋夜獨吟

久永祐藏

茶の花の咲きて澄みたる日だまりに蜜蜂うごく
翅音かすか

宵々の捨湯のぬくみ戀しきか墓は湯殿に棲みつ
きにけり

雜草にまじる筆草ひそやかに咲きて散りぬるく
れなるの花

晴れながら土用の風のはげしきに蟬は吹かれて
木を傳ふなり

町に出て歸る路への木樺垣もく咲く頃と早なり
てるし



校報

第三十三回卒業式

昭和八年三月三日午前十時より第三十三回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄及保證人並に來賓多數の着席あり。河内校長舉式の辭に次ぎ勸語奉讀あり。次に卒業證書及び賞品授與ありて學校長の告辭、來賓を代表して福田彦助中將閣下の祝辭、父兄保證人を代表して本縣會副議長野村宗助氏の挨拶あり午前十一時に終了す。當日卒業生にして受賞せる者左の如し。

一、學力優秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者

田坂興道 横山雅輔 矢次三重
一、平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀なる者

木本靜磨
一、平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀にして伍長となりては能く其の任務を盡したる者

綿鍋義夫
一、平素勤勉にして能く校則を守り皆(精)勤五個年に及び伍(室)長となりて能く其の任務を盡したる者

長岡 城 武田正典 藤本賢彦(室)
深田善信(室)
一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五個年に及べる者

窪田 照 横山義人 渡邊六男 上田典祐
一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤五個年に及べる者

堀 正亮 中村正四郎 品川 勝 佐伯一男 藤田 仁
一、平素勤勉にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者

一二二

福永 弘 坂 峻 井町謙一
一、平素勤勉にして能く校則を守り室長となりて能く其の任務を盡したる者

清水忠夫 齋藤孝正 杉本 等
一、本學年間伍長となりて能く其の任務を盡したる者

堀 政一 岡本 昇 岡 一郎 兼田峰雄 原 嘉道 落合卯一郎 佐々木清乎 大津敏祐 佐々木軍治
一、本學年間室長となりて能く其の任務を盡したる者

森澤忠夫 堀 信一 三浦義造
一、本學年間精勤せる者

山田正彦 重藤南岳 河村賢典 田中正治 大藤隼人 田邊良平 石井 清 藤井芳草 香川恒政 阿部 浩 竹内益雄 市川正治 金子治平 倉増敏夫 岡村義夫 來島 豊 西本春男
一、本學年間精勤せる者

藤本 武 中原五郎 岡 作美 阿座上 孚
一、卒業の際五席以上にして同窓會より

奨學賞を受けし者

- 田坂興道 木本靜磨 横山雅輔 綿鍋義夫 矢次三重
- 一、進歩賞(學年の進むに從ひ成績進歩向上せる)を同窓會より受けし者 窪田 照 岡本昇
- 一、進歩賞(前學年に比し成績著しく進歩向上せる)を同窓會より受けし者 福永 弘 竹内益雄

賞品授與式

四月八日、新學年の始業式後、前學年度に於ける第四學年以下の生徒に對し賞品狀授與式行はれたり。
一、特等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力優秀にして伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 長谷和夫 小方 司
三年 山下誠一 新谷幸治 西本 實 松尾美男
二年 石村豊徳 河村定一 安野 莚 一年 山根忠雄 小橋安次郎
一、一等賞(學力優秀にして能く校則を

守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)

- 四年 河野通弘 辻野三郎 林 幸男
- 三年 本石獨芳
- 二年 杉原大泰 貞本 尙
- 一年 岡崎寛人
- 一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者) 四年 金山 繁
- 一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍(室)長となりて能く其の任務を盡したる者) 四年 玉木和彦 飯田典之 中原正久 三年 松浦二郎 岡敬太郎 辻田稔次 二年 福田寛雄 山中健一 香川朝政 淺原昌佑 神村 正 高松 強 山村寛治

- 一年 有田 敬 新谷保治 梅屋 薫 新谷皓俊 岡村大一郎 原田善二 石川俊夫 阿武秀道 田中 潔 小野孝策
- 一、三等賞(本學年間伍(室)長となりて

能く其の任務を盡したる者)

- 四年 菊屋嘉十郎 田中政樹 三浦尙彦 大島康正 伊東美一 富田義治 山本徳市 吉見正治 吉岡 健 田村 甫
- 三年 田中達樹 藤本盛人 能美忠廣 吉津孝甫 吉武龍雄 杉山 恵 河名性海 藤井四郎 弘中 寛 林 英彦
- 二年 淺野 力 吉屋竹治 伊東輝典 森澤五郎 阿武 博 森田興行
- 一年 藤田敏彦 吉村安時 大島富士雄 上利文夫 藤本雅巳
- 一、四等賞(本學年間皆勤せる者) 四年 二十名 三年 三十四名 二年 五十三名 一年 七十二名
- 尙同窓會より學業進歩向上せる者に進歩賞を本年度より授けらる。
- 四年 田坂 茂 平田隆二 楊井 茂 三年 林 英夫 林 茂夫 二年 田邊正通

本校生徒特殊行狀表彰

五年生柴田恭助、三年生伊東輝典は左記の通り本縣知事より特殊行狀を表彰された

萩市大字椿東

柴田 恭助

昭和八年六月十九日松本川ニ於テ溺死セムトシタル桂隆ヲ救助シタルハ洵ニ殊勝ナリトス依テ金貳圓ヲ賞與ス

昭和八年九月六日

山口縣知事 正五位 菊山嘉男 印

阿武郡川上村

伊東 輝典

昭和八年六月二十五日川上村陸見橋下ニ於テ溺死セムトスル白石靖熊ヲ救助シタルハ洵ニ殊勝ナリトス依テ金貳圓ヲ賞與ス

昭和八年九月六日

山口縣知事 正五位 菊山嘉男 印

第三十四回創立記念式

十月十八日午前八時より第卅四回創立記念式を講堂に行ふ。河内校長舉式の辭後告辭朗讀、來賓森中將閣下の祝辭あり、終りに岩田山口高等學校長の祝電披露を以て午前九時式を終り、引續き陸上競技大會に移る。

先生の更迭

昭和七年十一月以後(前號報告後)

▲田中市郎先生 昭和八年三月卅一日御退職先生は本校に二十七年十一月の長きに亘り勤続せられ博物科の擔任として功績を挙げられたり今後は益々自然科學のために研鑽される筈

▲下間先生 昭和八年三月卅一日附にて石川縣立石川工業學校に御轉任

▲中尾先生 昭和八年三月三十日島根縣立津和野中學校より御轉任 博物科御擔任

▲安部先生 昭和八年四月三日千葉縣立大多喜中學校より御轉任 英語科御擔任

任

▲金子先生 昭和八年九月二十日御退職先生は本校に二十六年六ヶ月の久しきに亘り勤続せられ最近首席教諭として精勵恪勤訓育に盡瘁せられたり今後は悠々自適晴耕雨讀の境涯に入らる、

▲堀田書記 昭和八年四月二十日御退職萩市役所學務課に奉職せらる

▲厚井書記 昭和八年四月廿六日御新任寄宿舎書記として就任せらる

▲三上先生 昭和八年十月三十日山口縣立大津中學校より御轉任 國語漢文科御擔任

▲十一月三日 明治節拜賀式舉行 式後金子教諭の講話 午前中寄宿舎生の競技會、巴城弓道會發會式午後一時より選手七名出場、市公會堂に於ける永井郁子獨唱會入場許可

▲十一月十一日 三輪書記夫人葬儀に各

校誌 (簡畧)

(自昭和七年十一月至昭和八年十一月)

▲十一月三日 明治節拜賀式舉行 式後金子教諭の講話 午前中寄宿舎生の競技會、巴城弓道會發會式午後一時より選手七名出場、市公會堂に於ける永井郁子獨唱會入場許可

▲十一月十一日 三輪書記夫人葬儀に各

組代表會葬

▲十一月十四日 放課後藤村大佐の武學養成に關する講話あり

▲十一月十八日 第五學年生徒縣下中等學校聯合演習參加の爲午前八時山口に向け出發

▲十一月十九日 聯合演習參加の第五學年生徒午後五時頃歸校

▲十一月廿一日 松陰追慕會 河野教諭講話 松陰神社參拜す

▲十一月廿四日 教練查閱執行 查閱官は山口歩兵第四十二聯隊附岩橋中佐なり

▲十一月廿六日 防長教育會評議員窪田治輔氏、東京高師教授兼東京文理大學生主事防長教育會理事日田權一氏及び武智本縣視學官來校視察せらる

▲十一月廿九日 辯論大會開催午後三時半終了

▲十一月卅日 第六時限に於て全校生徒消防演習實施 午後三時より喜樂館活動寫眞觀覽許可

▲十二月一日 放課後教員研究會あり

講師山本博教諭

▲十二月三日 全校生徒野外教練の爲羽賀臺方面に行軍

▲十二月十三日 第三學年以上第二回統一考查開始

▲十二月十九日 第二回統一考查終了

▲十二月廿四日 萩圖書館司書時山富藏氏死去

▲十二月廿三日 放課後組長訓話

▲十二月廿四日 終業式—第二學期—

▲昭和八年一月一日 拜賀式舉行

▲一月九日 第三學期始業式

▲一月十日 寒稽古開始

▲一月十九日 寒稽古終了

▲一月廿一日 武道大會舉行

▲一月廿六日 作業科囀托岡崎正信氏告別式

▲一月廿七日 全校生徒雪中行軍實施

▲一月卅日 放課後教員研究會 講師は岡庭教諭

▲二月十一日 紀元節拜賀式舉行

▲二月十三日 公會堂に於ける防空に關する講話並に映畫觀覽許可 第五學年

統一考查開始

▲二月十八日 第五學年考查終了

▲二月廿日 第六時限ライオン齒磨研究所技師小森谷武氏の口腔衛生に關する講話あり

▲二月廿三日 第六時限山陰線全通奉祝提灯行列行進曲練習

▲三月三日 第三十三回卒業證書授與式舉行 同窓會新入會員歡迎會舉行

▲三月八日 第四、第一學年生徒は明倫校庭の高射砲見學

▲三月十日 陸軍紀念日 前原陸軍大佐及西林大尉の講話あり

▲三月廿二日 第三學期終業式

▲三月廿七日 入學考查開始

▲三月廿八日 入學考查終了

▲四月八日 新學年始業式及新入學生入學式舉行

▲四月十日 本學年度伍長及室長任命式

▲四月十一日 朝會前新舊生徒對面式

▲四月十四日 放課後各學年學級自治會

▲四月十五日 第五時限後全校生徒志都岐神社參拜

- ▲四月十七日 職員生徒身体検査
- ▲四月廿二日 放課後第一回チアス豫防注射
- ▲四月廿七日 靖國神社臨時大祭にて休業
- ▲四月廿九日 天長節拜賀式舉行
- ▲五月二日 放課後親交會主催堀田書記送別茶話會あり 四年五年午後辯論小會
- ▲五月三日 一年二年三年第五時限より辯論小會 放課後競技部選手慰勞會あり
- ▲五月五日 三十分授業三時限後武道競技小會
- ▲五月六日 放課後チアス第二回豫防注射
- ▲五月十三日 一日遠足施行 五年須佐四年長門峽 三年油谷灣 二年笠山大井
- ▲一年秋史蹟巡り
- ▲五月廿二日 第六時限消防演習 公會堂に於ける活動寫眞觀覽許可
- ▲五月廿五日 第五時限松陰神社參拜

- ▲五月廿七日 海軍記念日 吳所屬特務艦朝日艦長小橋大佐の日本海々戦及時局に關する講話あり
- ▲五月卅日 行啓記念競技大會
- ▲六月三日 放課後教員研究會 講師森本教諭
- ▲六月十三日 午後靈田視學官來校
- ▲六月十七日 放課後山本校醫の滿鮮視察談あり
- ▲六月廿一日 午前中萩驛前に久瀨宮殿下奉迎 午後殿下奉送引續き松岡洋右氏出迎
- ▲六月廿二日 市公會堂に於ける松岡洋右氏講演を聞く
- ▲六月廿三日 午前中松岡洋右氏御見送
- ▲六月卅日 第六時限体格優良生表彰及衛生講話あり
- ▲七月一日 三時限後武道大會
- ▲七月五日 放課後本校職員對明倫校職員庭球試合あり 本校に凱歌あがる
- ▲七月十五日 藤田中將の武學生養成及時局に關する講話あり 講話後全校間兵分列式

- ▲七月七日 放課後吟詠會
- ▲七月十八日 放課後四五年有志生徒に對し中原久生氏の南米事情の講話あり 四年有志修學旅行講話
- ▲七月十九日 放課後組長訓話 午後一時より永樂座活動寫眞入場許可
- ▲七月廿日 第一學期終業式
- ▲七月廿三日 京都武德會主催演武大會 出場の爲劍道部選手出發
- ▲七月廿六日 京都武德會主催演武大會 出場の爲柔道部選手出發
- ▲九月一日 第二學期始業式
- ▲九月二日 第一學年伍長任命式
- ▲九月四日 競技部選手茶話會
- ▲九月十一日 本日より課外運動實施
- ▲九月十三日 乃木大將追慕會 水泳會 勤者賞狀授與 人命救助者賞狀授與 市川大佐詩吟あり
- ▲九月十四日 水泳選手壯行茶話會
- ▲九月十五日 水泳選手山口に向け出發
- ▲九月十六日 武道競技小會
- ▲九月十七日 第二回萩休育聯盟武道大會あり 本校優勝

- ▲九月十八日 森中將の滿洲事變記念講話あり 放課後輕機關銃射擊
- ▲九月廿二日 九月廿日附發令金子教諭引籠河野教諭事務引繼
- ▲九月廿五日 防府体操大會 第五學年五十七名參加
- ▲九月廿六日 金子先生告別式 放課後吉見村青年團十三名來校劍道試合
- ▲九月廿八日 宇部行選手体格検査
- ▲九月廿九日 宇部行選手壯行茶話會
- ▲九月卅日 縣休選手壯行會後選手宇部に向け出發 本日相撲見物許可
- ▲十月二日 縣休選手成績報告會 本日より課外運動中止
- ▲十月四日 放課後トラホーム検査
- ▲十月六日 放課後柔劍道部有志茶話會
- ▲十月七日 放課後籃球部有志茶話會
- ▲十月九日 放課後競技部有志茶話會 午後五時より第五學年夜間演習及野營
- ▲十月十一日 第五學年生百一名兵營宿泊に出發
- ▲十月十四日 兵營宿泊の第五學年生歸校

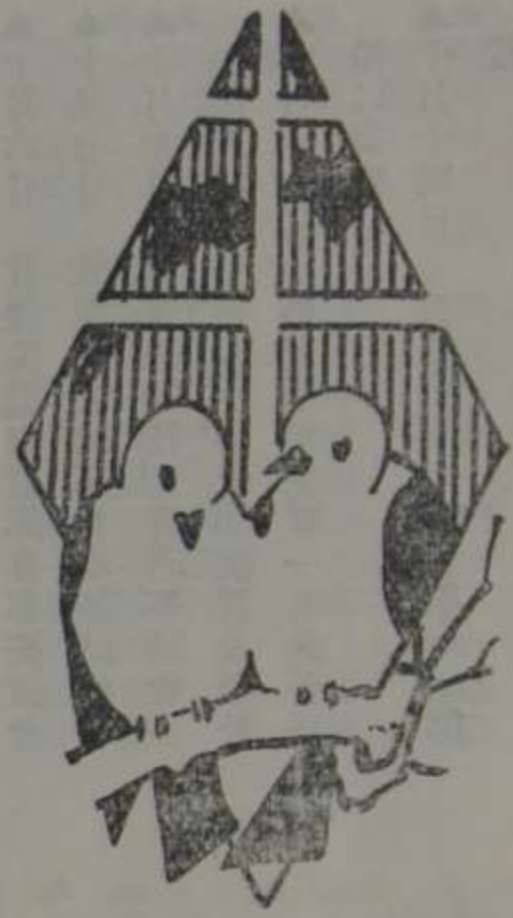
- ▲十月十五日 武德會山口支部萩分會第三回演武大會 本校柔劍道部より約百名の選手出發
- ▲十月十八日 開校記念式舉行 式後運

二人集

草 雨

雞頭の風に吹かる、姿かな
 秋の雲まもなく消えてしまひけり
 決戦にヒット放たむ風蕭る
 曲り角で放屁一發秋しづか
 麥の秋葉をさられ啼く雲雀かな
 見上げたる臘梅こゝに見下しぬ
 籠鳴や晴れてかわかぬ蟻蛾の路
 春宵の電車あかるく停りけり
 蛭斗浮いて傘の雲に打たれけり
 籠よりすなはちつゞく稻架かな

幽 笑



校友會報

一二八

伸びました眞摯の念の籠った成績品を出され、一段と、我が展覽會を盛大ならしめた。斯に謹みて感謝の意を表す。尙考品の出品者は左の様である。

第四學年 伊東邦治君
同 能美忠廣君

終に望み、諸君の日常絶へず、研究、努力を重ねられて、我が書道部をして益々隆盛に赴くやうにされんことを切望して筆を擱く。

(石村豊徳記)

書道部

九月十日、日曜日、第五學年及び第三學年の保證人會を機として、生徒成績品展覽會は開催された。此の日天氣清朗にして絶好の展覽會日和であつた。午前八時より午後四時迄一般の觀覽に供し、朝來多數の觀覽者を訪つた。我が書道部は、第四學年二組の教室を以て、生徒の平素の成績品及び其の他の参考品の陳列場に充て、第三學年三組の教室を以て、小學校からの出品物の陳列場に充てた。生徒の習字は日常學校に於て教諭指導の下に清書したもので、其の中優秀なるものを選抜して、一、二、三、等に分つた。榮

譽ある一等賞を得たものは次の様である。

第二學年(其二) 山根忠雄君

第二學年(其一) I・I 生

就中、山根君の洗練された、しかもゆりのある書振りは、人の目を引かずには居なかつた。右の(其一)とは、現在の三年にして(其二)は、二年の謂である。此の度第一學年に一等賞のなかつたのは、甚だ遺憾なことであつた。今後奮勵されて、榮冠を得られんことを望む。然し一般に、出品者の成績が、年々進歩の跡を示すのは、眞に慶賀に堪へないことである。且明倫、椿東、椿西、感ヶ濱、白水、木間、の各小學校から兒童の伸び

美の世界歴然として横たわるを覺ゆ。あらゆる自然の景色、静物の美總て一狹室に網羅す。入りて先づ吾人の眼を強く引けるは水沼教諭の静物寫生にて、其の器物の配置妙を得、其の林檎の表現の美、實在感の満點、先づ舌を卷かざるを得ず。入口の左壁に、本校休暇中の宿題なる傑作作品を配列せり。臺所の器具に其の妙を見出したる物有り。美しき景色、麗しき物体の表現ならずして、臺所に於ける吾人の生活場に美—端正なる美—を見出したるものにて相當強き印象を與へたり。其の隣同じく樂器の寫生畫にて、其の運筆大膽、強大なるが爲に、此の繪は一段と強き、妙味を加へ何れも相當の出來を見せ、眼孔の鋭敏なるを知るべし。其の他多く本校の精銳を集む。

本校展第二室に入れば、其處には、五年休暇中、血と汗とになれる、用器畫家屋設計圖あり。觀覽者、此の方面に趣ある者多きか、殊に眼を向くる者多かりき。其の他二三の優越せる自然風景寫生畫ありも、概して上出來に非ず。

第二室を出て、小學校展室に入れば、人生の航海を終へて再び無邪氣な少年時代の人生に立ち歸りし心地す。此處には初年級の畫を集むと雖も中には拔群の者、少きにしもあらず。而して明倫校其の首位を占めたり。此の日老若男女を問はず絡繹として室に充ち、午後四時サイレン一聲を合圖に閉會す。

然して、此の盛大なる展覽會を開くに當り、書道部委員の奮闘や又見るべし。展覽會後始末僅か十分間に於て、其の敏速と共同と皆本校を愛すればなり。此れを思へば諸君の努力に對する、感謝の情、物々として湧くを覺ゆ。嗚呼畫の生命果して何ぞや—畫の生命、之を押し擴げ藝術の生命を論ず—知なるか、意なるか、否々、曰く、一言にして言はゞ情なりと。畫の使命將又果して如何ぞや—眞に美なる眞に強き作品は、之を鑑賞する同、惚然として現實の塵界、煩雜、争闘の中に在る、自我を忘れしめ一躍天真

地歴部

無垢なる天境に遊ぶを覺ゆ。我等が私慾を忘れ自然に接近し之に親しむ所以なるか—論じて感こ、に至れば畫の効いよ—至大なり。諸君よ、進んで彩管を奮ひ吾が書道部を益々盛大ならしめん事を切望す。(小方司記)

九月十日、日曜日例年の如く第五學年及び第三學年の保證人會を期として、是に盛大なる秋中學校生徒成績品展覽會を舉行せり。此の日は日曜日に加ふるに天氣晴朗を以てし、秋地より觀覽に來る者數を知らず、陸續として後を絶たざりき。

我地歴部に於ては、一室を以て歴史科、他の一室を以て地理科の作品陳列に當てたり。

成績品は主として研究物、年表、繪畫、模型、地圖等にして、その出品點數に於ては、昨年比して稍遜色ありしも概し

一二九

て巧に正確精密緻刻者一として努力の結晶ならざるはなく、進歩の跡歴然たるものありき。實に慶賀に堪えざる所にして、觀者をして歎稱擱く能はざらじめたり。

思ふに我部は諸君の努力に依つて今日の盛を見るに至りしも、未だ進歩の餘地は多くして是を以て満足と爲す可からず。時代は日に進歩し、月に發展するものにして、一日一時も止まるものにあらずれば、此の方面に於ても止まる事なく、舊例に拘泥する事なく、自己の力を發揮し、自學自習の態度をとり、大いに創作を凝らし、以て我部をして益々年と共に發展せしめられんよう努力されん事を希望して筆を擱く。

理科部

(長谷和夫記)

天高き九月十日、生徒父兄保證人會を機として展覽會が舉行された。午前八時より會場を開放して、雲集せる觀覽者に

一齊に製作物を提供した。

我が理科部では生徒實驗室及び、階段教室に休眠中の宿題を陳列した。炎暑焼くが如き夏と戦つて完成した苦心の結晶を目のあたり見る事を得た。就中、二年生新谷君の電氣機關車は非常に精巧なもので、觀覽者をして、驚歎せしめた。又一年生の日野君の濾過器は新しい試みとして大いに稱賛された。自主獨立の精神が窺はれて嬉しい。その外、二等に入選した潜水艦模型、汽船模型、ロボット等も酷暑の下での諸君の奮闘が窺へて、大いに感謝を表する。

又階段教室には飛行機の模型と、萩市主要地の飲料水の分析表が陳列されてある。水の分析は五年生、行本、吉松兩君、四年生山口、西本の四君に依つてなされたもので、我々はその研究的精心を大いに稱賛したい。又藥品室の前にテントを張つて水質検査に應じた。之は偉大なる効果の有つた事を疑はぬ。又カルセスを釀造して、父兄に無代で提供して非常な稱賛を受けた。

一三〇

今年の展覽會を通覽するに、先づ目につくものは、これといつて殊に見事な作品がない事だ。次に、出品数の少いことだ。もう少し多くなくてはならぬ。もう少し精巧でなくてはならぬ。もつと勤勉でなくてはならぬ。外觀を街ふごまかし物は絶対に有つてはならぬ。殊に責任をまぬかれるために、既成品を買つて、或は其の儘、或は色を塗りかへて出品した者が多くなつたのは残念だ。例へば飛行機の模型でも本當によく飛ぶ物は少く、實用的な物の少くなつたことだ。就中、三年生が一番出品率が悪い様だ。もう少しの努力が必要だ。研究は決して損にはならない。否、それどころか、きつと何かの爲になる。役に立つ。私達は、この夏休中眞面目に研究を續行した諸君を稱賛すると同時に、怠惰なる諸君を嗤つてやりた。これが四十日間の製作物かと思はれる程なさない。もつと理科に興味を持たなくてはならない。將來此の方面に向ふ者は尙更のことだ。將來は今年よりも

數段の進歩を見せられんことを願ふ。博物科

本部は主として一、二年生の作品の展覽である。博物教室に秩序整然と並べてある出品物を見て夏休中の諸君の御苦闘の跡が歴然として表はれてゐる。皆よく出来てゐる。よくもこんなに集めたものだ。だがもう少し本氣になれば、もつと澤山の採集をする事が出来るだらう。今一息といふ所だ。尙ほ中央には黒狸々、ガラ／＼、蛇、アサラン等が陳列してあり、觀覽者の參考になつたと思ふ。終りに臨んで諸君の努力を感謝し、由來有名だった本校の博物部の益々發展し、隆盛に到らんことを祈る。

(林幸男記)

吟詠大會

第一學期以來毎週水曜日寄宿舎に於いて練習してゐた吟詠の公開が昭和八年七月十七日講堂で行はれた。肩の荷の第一學期考査が終了してゐるのだから、吟ずる方も聴く方も氣樂であり、その氣樂さ

が自から此の大會を和やかにして呉れた。

此の試みは、しかしながら、初めてのことだから、色々な點から「靜肅」なるべきが却つて「喧噪」に終りはしないかを案じてゐた、にも拘はらず、非常な好結果を得たことを深く喜ぶものである、その原因を、私は、歌ひ上手といはうより「聴き上手」に在つたこと云ひたい。

吟詠練習を開始して以來、舎の廊下や放課の時間などで吟ずるもの、多く成つたことは確かに一つの收穫であらう、未だ生徒の士氣を鼓舞し刷新するに至つたかどうかは明らかでないが、漸次詩そのもの、内容が理解されて、そして意識的に又は無意識的に生徒の智的內面生活に好影響を與へるであらうことを疑はない。この好影響が潜在から現實に活躍し出した時、萩中生徒の士氣が活潑に働きかけた時である。

人生意氣に感ずる最も大なる時代は中學生生活なのだ、感ずべき意氣に缺けてゐるものは、せめて詩を吟ずることによつて故人の意氣を知り、理解會得し、それを自己の意氣に移してほしい、若し、この努力をすらすら爲し得ないものが有るなら、自己の社會的存在の意義を、一箇の人間としての存在事實を、如何にすれば有意義ならしめ得るかを反省しなければならぬであらう。意氣、中學生として持つべきこの意氣を感じ、且つ、體得したものは明らかな人生をそこに見出すであらう。この意氣、この明らかなさは、何人にも奪ひ取ることを出来ないものではないか。

第一回吟詠大會の批評

一概に批評と云つても、實のところ、未だ批評の境地に行つてゐない。しかしながら、僅少時間の練習だった點から云へば先づ上出来であつたこと云へるかも知れない。上手であつたこと云へるよりは態度が良かった、従つて比較的落着きが有つたこと云ひたい。

△九月十日 一ノ三 厚東雅夫

一年生としては良く出来た方だが、未

だ出るべき聲量を充分出してゐなかつた。

△九月十日 一ノ三 白井 輝

舎の練習の時にはもう少し上手に出来たと思ふが、今日は確かに聴衆に押された氣味があつた。

△九月十日 二ノ一 小河 博

△同右 二ノ二 岡崎寛人

二人共聲量が足りない、全く足りないのではなく、出す様に心掛けてゐなかつた、腹の底から出す様練習すべきである。

△吉野懐古 三ノ三 加藤雄太郎

聲量は相當あるが、低吟過ぎた。

△金州城外 三ノ三 水戸邦男

今日の吟詠の白眉であつたが、聲に男性味が乏しく、従つて、腹の底が出すべき聲が出てゐない。けれ共、態度、調子、緩、その他起承轉結が、比較的良く出来た。

△吉野懐古 四ノ一 中川修二

△九月九日 四ノ三 藤井四郎

二人共よく似た調子で、練習開始の當時を思へば大いに進歩してゐるが、未だ

練習を要する。

△九月十三夜 五ノ二 林 幸男

△楓橋夜泊 五ノ三 後藤榮一

平常の練習に充分大聲を出さなかつたからか、二人共聲が低過ぎた。矢張り練習の時に充分聲量を出して置かないと、イサミ云ふ時には尙一層低聲に成つて了ふ。

これを總じて批評すれば平常の練習に充分聲を出すことである、そして起から承へ、轉から結への最も大切な所を流暢に吟じ得る様、平常から聲量を豊かにしなければならぬ。

(比呂史)

競技部

第三回 萩商 陸上競技對抗試合

萩中 青年

(萩市体育聯盟主催)

新緑ゆらぐ指月山、巴城のほまれをたへつ、み山おるしに吹く風は、健兒の意氣を托すなり。

我が巴の學舎に教を受ける六百の健兒、今日こそ晴れの舞臺で昔日の恨を晴らさ

んとする勇士達を、精神的に勵ますあの歌、聞えるあの歌、ある時は母の慈愛の言葉もなり、ある時は勇士を元氣付ける挿聲とも聞える。――。實際今の萩中は悪まれて居た。萩中スプリント界のナンバーワンたる辻野君の復活を見且又名スプリンター吉岡君富田君岩城君等の新人を得て優勝を期して此の競技に臨んだわけだ。其して其れ程選手達には自信もあつた。其して「朗らかに泣け」言ふのが我々のモットーだつた、先づ最初の百米、A組の吉岡君軽く三着で入選して居る。B組では富田君一等辻野三着で入選、是で三人も居残つたわけだ。幸先きよし落ついて行かう。

是の時フィールドでは砲丸投の決勝我々からは重鎮富田君新人吉岡、大田、小河の三君が出場小河君おしくも落選ついで吉岡、大田の二君もついに。然し彼等二人も萩中のケラウランドでは十一米出した事も度々あるコンジションだ。居残つた富田君、戦友の惜敗を慰めんもの必勝を期して投げて居る。晴れ切つたサツキ

晴れの空に十二ポンドの巨弾は藝術的な弧を描いて十二米のライン近く。

遂に十一米九十九を投げて優勝。次が千五百米決勝。我々からは來嶋、田村、波

佐間の三君出場、來嶋君ラストの頑張り

きかず遂に敗る。而し最後迄よくやつた。萩中スポーツマンシップを汚さず

に、次が萩中得意のハイジャンプ決勝。

大田、三吉、山崎、林の四君出場、林君

おしくも落選、萩中三君、きれいなフォームで、そして力強い踏切りで……中

にも三吉君のローローパー珠に人の目を

引く。五尺六寸の巨軀が大きく空中に大

飛躍を試みる有様は見て居る者も氣がス

ッとする様だ。大田君六十七で一等三

吉君二等山崎君四等で一舉十一點を得た

わけだ。次がローハードル第一豫選、A

組、富田君一着で軽く入選、來嶋君も續

いて入選、B組、吉岡君是又一着で入選、

山崎君、商業の巨星吉吉君を倒して難な

く入選、又四人残つたわけだ。幅むぞ君等

！。次が一万米決勝、河村、長谷川、師

井の三君出場……。此の間に圓盤投の

決勝。

先きに砲丸にて優勝せし富田君の意氣物

すこく、又田中、吉岡、柳井の三君出場

、田中柳井の二君日頃の調子出でず惜し

くも落選。富田、吉岡の二君幸にもバス

トに食ひ込む。富田君、大きいモーションで……そして又力強いターンで「エ

イツ」見事二十九米九七、吉岡君五等に

食ひ込み又六點獲得、萩中の應援團は唸

り出す。

「二万が歸つた」何「場内がわめき出す。

やはり青年の新見君、二着は？ 誰？

我が萩中切つての長距離ランナー三年の

河村君「河村頑張れ」「カワムラ」終に

二着、未だ久しく見なかつた一万米の得

點然も四點「河村有難ふ」よく頑張つて

呉れた。

次が四百米。我々から辻野、田邊の二君

A組に來島、岩城の二君B組に出場A組

では辻野君B組では岩城君難なく入選。

田邊、來島の二君惜しくも失格する、此

の次が百米の決勝、吉岡富田辻野の

三君、落ついてスタートへ。辻野君又肉

離れにでもなるのではあるまいか？、若

しなつたミスすれば。だけ今日君は

部スヒードを落して居る。吉岡君辻野君

富田君の順序で食ひ込み六點を得る。次

が走幅飛の決勝、自他共に許す萩中ジャ

ム界の十八番アロード。淡い春光を浴

びて空中に大きく大飛跳を試みるアロー

ド。我々から老練富田吉岡、且、又新人

大田 岩城の四君出場青年の大田君優勝

し、吉岡 岩城 富田の三君之に次ぎ、

中にも岩城君第一回のジャンプを試みた

丈けて六米〇一は流石。大田君惜しく

も失格す。若し君がより以上のスヒード

を附けたなら其れこそあのバネで其して

又あのフォームでキツト彼等を征服する

事が出来るだらうに……。次がボールの

決勝。我々から山崎吉岡來島小倉の四君

出場、二米七〇から開始されて四君も

みな鮮かなフォームでパーは三米十へ、

青年の大田君我等の山崎君難なくオーバ

ー、吉岡君一躍せよ。三十は確實なもの

カンパレ。吉岡君どうした事か？終にオ

ーバ出來ず。残れる山崎君青年大田君に

ドン／＼肉迫し一時は彼を凌ぐ様な有様だつた。終に一等を彼に譲りて二等にて合計七點を得る。次がローハードル決勝（此の試合は午後四時十分に行なはましが紙面の都合上棒高飛の次にします）我々からは富田吉岡山崎の三君出場。（來島君ベストに残りしも棄權）見よ三君のハードリングを、意地ミ度胸の精神が萩中スポーツマン精神があつたハードリングに迄も現はれて居る様だ。富田君第一カーブを過るや急にヒツチを上げて青年の大田君に肉迫し終に同時にテープを切る。

吉岡君山崎君共に彼等に次ぎ、マルキリ萩中の一人舞臺の感がした。又之で九點半、次がいよいよ大會のラストを飾る八百米リレー。本校からは名スプリンター達四名……オードラー富田君吉岡君岩城君辻野君、淡い春の光りを投げて傾き初めた太陽は最後のグラウンドを照らして居た。我等の四人勇ましくもウォーミングアップ……。

熱狂した我等の應援團も唸り出す……。

トップ富田君「位置にツイテ」「ヨイ」。「ドン」走り出した富田君二番目を走つてゐる。スタートが少し遅れたのだ。つめる／＼。セカンド吉岡君、バトンタッチ。吉岡君ダッシュする。富田君との間のバトンタッチ効を奏してトップに出る。其の僅差をつけてサード岩城君へ。益々差をつけてラスト辻野君へ。すべては決した優勝／＼タイム二分四十三秒下對記録で嗚呼終に勝つた。！勝つた。！過去二年間の屈辱を、今日然も天長節の

佳日に、其うして優勝の小鳩はミドリリ優勝旗の中から雄々しく昇天して行つた。而し我等の富田君に個人優勝の榮冠を得させなかつた事は甚だ残念である。其うして位等の應援團長快男兒羽田君の統制成つた指揮の元に午後のグラウンドは静かな夜の帳を下して行く。尙先輩諸兄の御後援を感謝します。次に得點表、出場選手名を掲げて筆を終へます。 Y.N生

種目	萩中	青年	萩商
100m	6	5	4
400m	6	6	3
1500m	0	10	5
10000m	4	3	8
ハイジャンプ	11	3	1
アロード	9	1	5
砲丸	5	4	6
圓盤	6	6	3
ボール	7	3	5
ハードル	9 1/2	0	4 1/2
リレー	5	3	1
合計	68 1/2	44	45 1/2
順位	1	3	2

百 米 辻野三郎 吉岡 健 富田義治
四百米 田邊實彦 辻野三郎 岩城仁將

千五百米 來島敏夫 河村定一 田村由之

- 波佐間謙治
一万米 河村定一 波佐間謙治
長谷川道隆 師井淳吾
ローハードル
吉岡 健 富田義治 山崎内匠
來嶋敏夫
砲丸投 富田義治 大田 肇 吉岡 健
小河吾一
圓盤投 富田義治 田中利夫 柳井 清
吉岡 健
走高跳 大田 肇 三吉二三男 山崎内匠
林 幸男
走幅跳 吉岡 健 富田義治 岩城仁將
大田 肇
棒高跳 山崎内匠 吉岡 健 來島敏夫
小倉信夫
リレー 辻野三郎 吉岡 健 岩城仁將
富田義治
個人優勝 青年 大田博邦 二十三點半
二等 萩中 富田義治 十八點半
……山口高等商業學校主催
千六百米リレー……
眞夏を思はせる様な日だつた。新緑のゆ

らぐ鴻城の地には蟬の聲さへ聞えて居た。選手達の面には悲壯な決心と張り切つた心が宿つて居る事は誰の目にも見え

た。五月七日正午、時を知らせる山口のサイレンが彼の地の空に暑い音を吐き出した。其して高商のグラウンドからも運動

會が一段落ついたのか一發の砲火が打たれた。其して砲火の中から飛び出した日の丸の旗が何うした事か吹く風に運ばれて、萩中宿舍の方に來るではないか。其して丁度宿舍の前の道路に落ちて來たではないか。幸先きよし。友よ頑張れ！其して我々の手で彼等總てを征服するのだ。午後一時宿舍を出て高商のグラウンドへ……。

午後三時から行はれる答の試合が午後四時に延ばされることは只是丈の事でも選手の意氣を落すには充分だ。然し彼等選手を見よ、只闘志に燃ゆる彼等を……。一時高商の教室を借りて休んで居る時もズイアンつかつた。午後三時半頃からグラウンドで汗の出る程アップを行ひや

がて午後四時コールが掛る。然るに、今迄宿舍に休憩して居た他校の選手はコールが掛つてから初めて出て來てアップを行なふと言ふ圖々しさ。實に行なふ可きは試合だ。其して試合に對して氣を落つかせる事が肝要だ。午後四時さう／＼戦ひの幕は……。

コースは第二コース、よし、行け！戦へ！君等！

我が校のオードラーはトップ吉岡君、セカンド田邊君、サード辻野君、ラスト岩城君、参加校は全部で五校、山口師範、萩商、山中、鴻中、萩中だ。トップ吉岡君スタート宜しとツツを山師にゆづりて、急がず慌てず二番目でバトンは田邊君の手に、田邊君練習の効か第一グループを離れず三着でバトンは、我が名スプリンター辻野君へ「辻野頼むぞよなをし」元氣だ。第一コーナーを過ぎ次の直線に入るや、力走又力走、君の力走見事効を奏し、セカンドを走つて居た萩商を追ひ越し、トップの師範をおさへ、終に彼等をはなす事十米。……

其してバトンは我が中距離界のナンバーワンたる岩城君へ！ 岩城行け！ タノムぞ岩城！ ヨオシ！ 第一カーブ、直線、第二カーブ、アツ 師範が肉迫して行く。ア、何うしよう。岩城！ イワキ！ 岩城、此を見た辻野、吉岡、田邊の三選手、自分の疲労も忘れ、頼むぞ岩城 イワキ！……がしかし君の見事なラストスパ

ート、嗚呼誰がこの前に敵対しよう、終に二着の商業を離して二十米も、そしてゴールイン！ ゴールイン、タイム三分四十七秒F 嗚呼勝つた。く。最初の出場に見事優勝した勝つもナミダ、敗けるもナミダ。其して此の榮ある優勝こそ君等四人の不屈の意氣と日頃の努力の賜物だ。汗の結晶だ。汗と涙其れが選手命なのだ。然し我々は此の小成に安んぜず、更にく天下の槍舞臺に向つてスポーツの道に精進して行く事を誓はう。文拙くして優勝の模様、選手の有様を詳にせざるをうらむ。

(YOSHIIHARU)

一等(秋中) 二等(秋商) 三等(山師)

岩城君A組二着を断然引き離し一着で入選。タイム二十四秒四。辻野君又然り。F組一着にてタイム二十四秒四。八百米第一豫選、B組田中君接戦の結果一着で入選。タイム二分十八秒二。來島敏君C組にて二着で入選。D組田村君惜しくも三着で失格。君は未だ三年生、今後秋中中距離走者たられん事を希望す。其の時フィールドにては圓盤投、走幅跳の決勝、富田君、あのフォームと文字通り力強いターンが一際目を引く。富田君、彼の鐵腕から離れたテスカスは文字通り藝術的な弧を五月の青空に描いて居る。圓盤では富田君鴻中の野村君と僅かの差で二等又貴重な三點を得る。アロードジャンプ、我校から吉岡富田岩城の三君出場、富田君岩城君頑張りしも惜しい所で失格す。同情に堪へぬ。二君の復讐を誓つて立つ吉岡君、ベストフォーに食ひ込み第六回目のジャンプに六米五〇位も跳んで居たが少し尻をついて終に六米二〇で四等。次が百米第二豫選我校からは辻野吉岡の二君出場吉岡君A組にて力走せし

タイム(三分四十七秒F) 出場選手名

吉岡 健
田邊 實彦
辻野 三郎
岩城 仁 將

山口高専陸上競技聯盟主催 第八回近縣中等學校陸上競技大會

過ぎた昔を語るのは馬鹿な事かも知れない。而し勝たれた試合だけに、尙口惜しい。汗と涙の花輪を抱いて歸らなくてはならぬ一行十八名、淋しさを感じた丈けに將來の責任も感じた。僅か四點の差であの榮ある優勝旗を山中に渡すとは……。之から試合の模様を簡単に記して見よう。先づ百米第一豫選に我校の名スプリンター辻野、吉岡、富田の三君を送る。吉岡君C組で二着で軽く入選、富田君E組でスタートダッシュに於いて彼等をリードせしラストキかず惜しくも失格。辻野君D組においてタイム十一秒六を出して一着で入選。此の時フィールドにては砲

も左胸一つで惜しくも失格。辻野君B組で他を離なして一着で入選タイム十一秒五。次が千五百米、豫選ではC組來島次君三着で入選し、決勝にては四等と接戦し終にベストフォーに入らずして失格す。次が二百米ロードハドル豫選A組秋中切つてのハイドラー富田君山師の砂田君を断然引き離して一着にて入選タイム廿七秒七。次はB組我等の吉岡君縣下ハイドル界のナムバーワンたる吉岡君、君も又山師の常長君を離なして一着にて入選タイム二十八秒F秋中対記録。C組田崎君。ハードリングのフォームでは他の追従を許さぬ山崎君秋商船村君に撥いて二着で軽く入選す。次が八百米決勝我校からは田中來島兩君出場來島君最初より力走し田中君あせらず後を追ふ。來島君途中にて止なく棄権す。田中君四着と又接戦し四着を秋商篠原君に譲りて惜しくも失格す。残念而し此の後共宜しく奮闘せられんことを希望し君の努力に對して感謝の意を捧ぐ。次が大會の呼物マイルリレー豫選、我が秋中學校はB組にて山口中學

一三六

丸投の決勝、我校からスロー界のナムバーワンたる富田君を送る。ベストフォーに迄取られて幸に富田君も其の中に入る。其れも其の答彼富田君だもの、富田君「投げよ」其の鐵腕で「奮闘せられしも終に勝を山師に譲りて四等。此處において最初の貴重な一點を得る感謝々々。次がハイジャンプの決勝。大田三吉山崎の三君を送る、一米五〇、「五五」六〇「六五、我等の三君、飛ぶく其れこそ素晴らしいフォームで、而して一米六五を跳びし者實に八人、我等の三君達共にナンバーワンしてゐる。パーは一米七〇へ大田三吉山崎の三君續いて失敗し、遂に勝を興風中、山中に譲る、嗚呼八人の中で三人も萩中から出し、然も萩中の特殊ジャンプ競技において、嗚呼皮肉だく。天をうらむか、其れも我々の實力がないのか。いやく萩中の者は泣かないぞ。秋に來い。きつて征服してやるから、而し三君共大いに有難う、感謝します。次が二百米及び八百米第一豫選。我校から老練辻野君短距離界の新人岩城君を送る。

萩中學字部工業下關中學とくむ我校のオードトツプ吉岡君セカンド田邊君サード辻野君ラスト岩城君、トツプ吉岡君字部工についてバトンはセカンド田邊君へ其してサード辻野君へ、次！次！縣下中等學校中距離界のナムバーワンたる我等のアンカー岩城君へ。字部工とや、時を同じうして二着に入る。此の時の字部工業のタイム三分五十一秒四A組山口師範のタイム三分五十五秒三。先きに五月七日山口高等商業學校主催縣下中等學校の千六百米リレーに最初に出場した萩中學校の優勝した時のタイム三分四十七秒Fに比較すれば未だく此の分ならば選手一同の意氣大いに上る。次が槍投げの決勝我校からは富田三吉來嶋の三君出場、來島三吉の二君日頃の調子出でずして惜しくも失格す。残るは只富田君のみ……。昭和七年度の關西競技大會に未だ四年であつた君が雄々しくも名乗を上げ一流の選手山師の長崎君を一蹴し見事優勝した彼富田君、モーションも鮮かに彼の鐵腕より離れたる銀の槍は

春光を浴びて銀の尾を引いて飛んで行く。其して四十五米のラインあたりへ。又山中の村田君、我後れど投げける。彼も又四十五米のラインあたりへ。息詰る様な接戦。

が然し彼に一日の長があつたか僅か二十種之差で終に彼に優勝の冠は彼が手に。彼は未だ四年と聞く。村田君怖るべし。此處では富田君二等、君の奮闘を感謝します。次が百米決勝我校からは辻野君出場、第一豫選に十一秒六第二豫選に十一秒五も出した君、百米決勝「位置について」「用意」「ドン」アツ六名の戦士はメッシュした。辻野君は？、三十米、四十米何うしたのだからあれ程餘裕を見せて居た彼が、何ふした事か少しも足が延びない終にテープは切られた、辻野君は嗚呼失格か？

先に行はれたマイルリレーで疲れたのか。いや、彼はスポーツマンに最も恐るべき、肉離れを無理におして走つたのだ。あ、喉に障る、たはれし君を何うして慰める。此の時一着のタイム十一秒七萩商

松岡君。

次が三段跳決勝我校からは萩中ジャンプ界の大立物吉岡大田の二君出場、そして新人小倉君と。大田小倉の二君一時はベストを窺ふ様な有様だつたが終いに失格。残るは吉岡君只一人君は未だ後にマイルリレーローハドル、ボールの決勝があり、大部疲勞してをられたが元氣を出して終に四等に食ひ込む。又此處で貴重な一點を獲得す。尙君は萩中學校陸上競技大會に三段跳に優勝し十二米九十八跳んで新記録を作つたジャンプ界の猛者である。次が二百米第二豫選

涙を飲んで引き下らなくてはならない試合だつた。マイルリレーの決勝が此程迄も皆の心の中に存在して居たのだ。其れは萩中六百の健兒の憧れとして、何うしてもマイルリレーにだけはと思つて居たのだ。其れ故に自重もあり餘裕もある二百米第二豫選に、名スプリンター辻野岩城の二君も終に中途で棄権せんとは。決勝の時のタイム二十四秒七。(辻野岩

一三八

城二君の豫選の時のタイムを参照せられる可し)次が五十米決勝、我校から三年の河村波佐間永谷川の三君出場、河村君十三回目迄断然トップ、今迄三番目に居た多々良中の山下君長君、ずん／＼スピードを出し終に三君も失格す。然し三君も最後迄奮闘せられ萩中スポーツマンスピリットを發揮された事を感謝す。此の時の一着のタイム十八米十三秒多々良中の山下君。(河村君の萩中に於ける最高記録十八分〇三秒)

次が萩中の傳統的強味を有する棒高跳の決勝。我校から老練山崎吉岡の二君出場、そして又新人來島君出場。來島君奮闘せられしも惜い所で終に失格。残るは山崎吉岡の二君。さながら無人の境を行くが如く三米一〇二人乍らパー。君等丈に持つ強味を其して又君等丈に天の許すあのフォームで、パーは三米二〇へ山崎君難なくパー。續いて吉岡君又飛んでニツコリ。けれど又我等の前に敵が現はれた。彼山中の原田君、君も又三米二〇を飛ぶ。次

一三九

- 一等 山中 三〇點半
- 二等 萩中 二十六點半
- 個人優勝 富田義治(萩中)

二等	山下 (多中)
百米	辻野三郎 吉岡 健
	富田義治
二百米	辻野三郎 岩城仁將
	田邊實彦
八百米	田中健介 來島敏夫
	田村由之
千五百米	來島次郎 波佐間謙治
	河村定一
五千米	河村定一 波佐間謙治
	長谷川道隆
走高跳	大田 肇 三吉二三男
	山崎内匠
ハードル	富田義治 吉岡 健
	山崎内匠
プロード	富田義治 吉岡 健
	岩城仁將
三段跳	吉岡 健 大田 肇
	小倉信夫
棒高跳	山崎内匠 吉岡 健
	來島敏夫
砲丸投	富田義治 吉岡 健
	大田 肇

圓盤投 富田義治 田中利夫
 田村由之
 槍 投 富田義治 三吉二三男
 來島敏夫
 マイルリレー 辻野三郎 吉岡 健
 岩城仁將 田邊實彦
 第三回山口縣体育協會主催
 山口縣體育大會
 清く澄み切つた空。秋晴れの十月一日、煙の都市宇部に縣體育大會は舉行された。午前八時昨年の優勝校山口師範を先頭にトラックを一週し、入場式、優勝旗の返還君々代二唱選手宣誓等總て型の如く終り、午前八時半迄沈黙を保つてゐた神原グラウンドは、選手達の力強いスパイクでかき亂されて行く………雪辱！、復讐！、これが過去數年間惨敗の萩中競技部全員の意氣であり念願だつた。此の秋こそ！。全員の希望の燃え立つ所其處に榮ある優勝旗はあるものと信じて孜孜として力めた我等だつた。大會 十月一日、その日選手諸君の涙ぐましい健闘もついに敗戦の士となりて、淡く消え

一四〇

て行く。文拙くして、その日の戦況を詳細にせざるをうらむ。

××××××××××
 十月一日 午前八時半、トラック、百米第一豫選、フィールド砲丸投決勝によりて戦の幕は切つて落さる。
 先づ百米第一豫選、五年の辻野君F組に、同じく岩城君C組に出場す。辻野君二着にて軽く入選。岩城君一着にて入選タイム一秒八。砲丸投では重鎮富田君と三年の新人阿武君出場。富田君非常に苦戦。昨日迄病床にあつた彼。頭痛を冒して出場し只母校の爲に戦つてゐる阿武君よく頑張れしも、ベストシックスに入らず。而し君は未だ三年、今後の奮闘を望む。富田君ベストシックスに入り五等にて二點を得る。レコード一米三六。一等は？、山師の和西君、レコード一米一六。二君の奮闘を感謝する。次が二百米第一豫選、岩城君C組に出場す。餘裕を見せて、軽くテーパーを切る、タイム二五秒六。次は四百米、第一豫選。四年の田邊君をC組に三年の田村君をE組に送

る。田邊君強敵萩商の木村君と組み力走して二着にて入選。田村君又二着にて軽く入選。次八百米第一豫選、五年の來島君をB組に同じく田中君をD組に送る。來島君二着にて入選し田中君惜くも失格。次が三段飛決勝。縣下ジャンプ界の一流大田君、新人田村幸君を送る。田村君、惜しい所でベストシックスに入らず涙を飲んで退く。一人残つた大田君、戦友田村君の仇を報ず可く、君の長驅を利用して、四回目、一等二等三等四等の順で僅かに一握の差で大田君四等、五回目大田君、踏切板をマークして立つてゐる。他校の選手達も君を見守つてゐる。大田君のモーシヨン。踏切つた。ホップステップ。ジャンプ。今迄のレコードだつた山師の和西君の赤い旗を大部越えてゐる。皆の者が駆け集まつた、十三米〇九。飛んだ！。優勝した。大田君の奮闘を心から感謝す。次が千五百米豫選、四年の來島次郎君をA組に三年の河村君をB組に送る、來島君二着にて入選し河村君惜くも失格す。次が二百米ローハー

ドル豫選、C組に四年の山崎君、D組に五年の吉岡君を送る。ハードル界の素晴らしい山崎君、ハードル界のナンバーワン吉岡君、ニッコリ笑つてスタートにつく。先づ山崎君、第一カーブ、アツ！何うしたのかしら君の姿が見えない。倒れたのだな？、其の時大部遅れて純白なHのマークを土で汚して走つて来る。「ヤマサキと頑張れ」嗚呼而し、もう三着で失格しようとは誰もがきつと目に熱いものを感じたに違ひない。わけて戦友吉岡君は……、君は師範の中村君と組み堂々二着で入選。次がハイジャンプの決勝。五年の大田三吉兩君出場。先に三段飛で優勝した大田君、少しの疲れも見せず、ついで三吉君、一米五〇、皆鮮かなフォームで。五五。六〇。二人ともオーパー。此の時六〇をオーパーした者僅かに五名。六三。大田三吉の兩君共オーパーは一米六五へ。大田君オーパーし、三吉君惜くも失格し四等に入り三點獲得。大田君、六五、七〇、七三をオーパーして、山中の倉増君と接戦、終に點を分

けて、全部で八點半獲得。君達二人の奮闘を感謝す。次が四百米繼走第一豫選。萩中D組、柳中チーム、宇中チーム、鴻城チーム、我校のオーダーはトップ富田君はセカンド山崎君、サード吉岡君、ラスト岩城君、之は軽く他を離して入選タイム四十七秒八。次がマイルリレー豫選萩中はA組にして徳中チーム、山中チーム、大中チームと組み、オーダーはトップ田邊君、セカンド田村君、サード來島君、ラスト杉原君、是は軽く一着で入選。次が百米第二豫選、岩城君A組に、辻野君B組に……。岩城君一着にて軽く入選。タイム十二秒F、辻野君、力走せしも惜くも失格。嗚呼辻野君が可哀想だ。前後數回にわたつて肉離れ、加之試合前一ヶ月にわたつて病癒と戦つてゐる。若しも君が春の君なりせば、而し是も運命か。次二百米第二豫選。我等の名スプリンター岩城君をB組に送る。君獨特の鮮かなフォームで、軽らくテーパーを切るタイム二五秒一。次が四百米、第二豫選、B組に四年の田邊三年の田村兩君

を送る。田邊君疲勞と脚氣の爲に惜しくも失格す。田村君ラスト良く利きて三着となり入選す。次がフィールドにては圓盤投の決勝。スロー界の大立物富田、田中の二君を送る。砲丸投の雪辱を此の圓盤投に晴さんとする富田君のターン物凄く秋晴れの字部の空に清く半圓を描いて飛ぶデスカス。……此の時を同じうして二百米ローハードル第二豫選。我等のハードラー吉岡君B組に。師範の中村君に一着を譲り軽るく二着にて入選す。圓盤にては富田、田中兩君の力投見ん事効を奏し二人ともベストシックスに入り富田君五點、田中君、二點合計七點を得る。此の時の富田君と山師の山田君との着僅かに五種、僅か五種にて破れようとは。君にいたく同情すると共に、君等の奮闘に心から感謝す。次が百米決勝のフィールドがかかる。文字通り雄々しく出場した、岩城君五尺三寸の矮軀なれど、全身闘志に燃え、我等秋中の名スプリンターの名に恥ぢず優勝タイム一一秒五。や、時間置いて、又二百米の決勝、百米に優

勝して堂々秋中競技部の爲に氣を吐いた岩城君、緊張してスタートに立つ。「岩城帽むぞ」「よしッ」行け岩城、他に二回のフライングありて後六名の戦士はサット飛び出す。第一カーブを過ぎ次のストリートに入るや、猛烈なスピード、加ふるにフィニッシュスピードの物凄さを他を離して見事テープを切るタイム二十四秒四。次が四百米決勝。三年の田村君縣下の強剛を向ふに廻し、花々しく戦ひて五着となり二點を得、君未だ三年幸いに自重せられよ。次千五百米決勝。四年の來島君良く頑張れしも、惜しい所で宇中の岩崎君に破る。次がトラックにて五千米決勝。フィールドにては棒高飛の決勝。五千米には三年の河村長谷川の二名出場。二十餘名の戦士は飛び出す、河村君、興風中學の山根君と接戦を重ね終に五着となり二點を得る。此の間、フィールドにては、秋中の傳統的強味を有する棒高飛、我等のボーラー吉岡、山崎の二君三米二〇を軽くオーバーして今三米三〇へ。残つた者僅かに四人、吉岡君

山崎君先づ軽るくオーバーすれば、次いで山師の常永君もオーバー。秋商の吉吉君惜しくも失格、我等君の爲にいたくいたむ。次いでパーは三米四〇へ。先づ吉岡君、第一回目……、モーシヨン、走り出す。而しホツクスの所迄も行かずして歸る。足が合はないのだ。かうする事三回四回目「吉岡アセルナ」吉岡恐れるな！「おちつけ！」モーシヨン。走り出した。素晴らしい助走、突込んだ！軽るく君の体が上る。飛んだ。「吉岡が飛んだ」而も一回で、山崎内匠君、ニッコリ笑て軽るくオーバー、師範の常永君惜しくも失格。更に秋中二選手は去年我々の先輩中村君の（現在早大）作つた三米五〇の上五三を今試みんとしてゐる。ミス三米五三、而も二人とも秋中、吉岡君三回も失敗し山崎君三回目遂に、三米五三をオーバーし一等二等合計十一點を得る。（記録三米五三A）次がハードルの決勝、吉岡君出場、第一カーブを過ぎるや否や猛烈なスピードを増し山師の中村君と接戦、而し終に一米破れて二着。次が千

六百米リレー決勝。カーダーは豫選の時と同じくトツプ田邊君、セカンド田村君、サード來島君、ラスト杉原君、疲れてゐるにもか、はらず良く頑張れ五着となる、心から感謝す。次がブロード決勝。我々から三吉、田村の兩君出場。三吉君足の關節が痛み爲中途にて棄権し残るは只田村君一人、三回目六米三〇も飛んでゐたにもか、わらず体が後へ反りし爲ついに失格。残るは只四百米リレーの決勝のみ。大勢は已に決してゐる而し最後迄頑張るんだ、死して後止むだ。行け、カーダーは豫選通りトツプ富田君、セカンド山崎君、サード吉岡君、ラスト岩城君、コースはアウトコース。「よしッ」「行け！」「位置について」「用意ッ」「ドン」あつ真先は富田君だ。長脚を利用してケン（他をリードして行く。セカンド山崎君、走る）。段々他は離されて行く。サード吉岡君、益々他はリードされる。バトンは我等のアンカー岩城君、素晴らしいスピードでゴールイン、次いで秋商。山師、「有難ふ」リレーに丈けても優勝し

た。首將辻野君のコーチ宜しきを得て、而も選手諸君の力走見事効を奏し、終に優勝タイム四十七秒二。嗚呼戦は終つた。テントの中には、只汗と涙に濡れた選手顔があるばかり。而し我々はベストをつくした。得點は豫定よりも多い。是も運命なのだ。四年以下の諸君よ。願はくは君達の手によりて、秋中の競技、競技の秋中としての秋中王國を作られん事を。最後に優勝種目を附記しよう。

(中原生)

- 百米 一一秒五 岩城仁將(秋中)
- 二百米 二四秒四 岩城仁將(秋中)
- 四百米 五五秒 藤津貞雄(山師)
- 八百米 二分三秒 石田正巳(宇工)
- 千五百米 四分三三、五 石田正巳(宇工)
- 五千米 一七分二一秒四 小田橋(山師)×
- 低障害 二七秒四 中村吾一(山師)
- 四百繼走 四七秒二 秋中チーム
- 千六百繼走 三分五五秒 宇工チーム
- 走高跳 一米七三 大田(秋中) 倉増塚三(山中)

籠球部

春季山口高商主催 近縣中等學校籠球大會

新緑蕪る五月中旬春季近縣中等學校籠球大會は高商校庭コートに於て花々しく五月十四日開始せられた。

参加校十四校内縣外よりは、岡山關西中 廣島縣商、松山中學等の新進でした。

新進良く榮冠を獲るか？古豪良く新進を破るか？、興味百パーセントなる若人の聖戦だ。

五月十三日、天氣清明にして一片の雲も無く、眞澄に晴れて居た。午前八時池田先生引率の下に母校を後に一路山口へ（部長齋藤先生は五年生一日遠足引率下に須佐に行かれ同日午後六時來山の事由）其の日時間の経過につれて盛夏の如

き烈暑頭上より照りつくす様な有様、車中仲々熱つくてやりきれない。さうく選手二名病に倒れてしまった。が然し心配する程もなかつた。午後二時旅館に身を休めた。二名の病、心配する程に見えなかつたが、午后三時頃から体温計は度を増し一同不安の中に包まれた。少憩の後練習だけ行ふ爲に高商のコートに行つた。制限せられた時間で思ふ様に出来なかつた。が諸校の練習を見学したが、たしい事は無く一同元氣一杯だ。歸宿して疲労を休め、六時より主將會議に五年の吉見君と同伴して出席。

プログラムは第一回戦「萩中對關西中」と作られた。關西の強豪關西中も何のその、早速歸宿して策戦だ。善策百出元氣百倍だ。九時愈々明日を約して就床。(病氣の二名の心配で齋藤先生以下皆な心配して醫藥と氷袋で就床)

翌れば十四日益々天は澄み切つて朗かだ。兩名の病狀恢復し一同安心の態だ。八時の入場式に出場、此の時より山中、師範の應援續々来る。會場のプログラム

ムを見るに、こわいかに關西中吾に恐をなしたか、第一回戦より棄權だ。此に於て不戦一勝。

第二回戦はと見るに前年の敵山中だ。關西の強豪山中。雪辱！復讐！

十一時半頃より試合開始だ。五分間練習した選手一同の顔はと見るに顔色紅潮して復讐の意氣に燃え立つて居る。コールは掛つた。ヒー、笛の合圖と共にセンター

ボールは青天下に投げ上げられた。吾がチームの吉武君懸命にジャンプ!!美事にボールは吾が手中に入った。制戦!!ヒー萩中二點。初めての二點を得た。敵は恐をなしたかメンバー大變更を始めた。

新鋭揃ひだ。愈々吾軍もメンバー變更をした。然し敵は天下の強豪山中だ。敵ながら美事なチームワークを以つてせ

まつて来る。吾軍背水の陣を布き奮戦々々又奮戦。ヒー嗚呼!試合終りの合圖か?。遂にタイムは宣せられた。もし吾に一瞬時を與へしめば強豪山中もさるもの一刀兩斷なるのに。

遂に三十二對二十一のスコアに敗れ

一四四

た。嗚呼!!天無情、過去一年間鍛えに鍛えた、血と涙の努力も報いられず今は敗殘の將となりて山口の地を去る。選手的心中無念唯此の一語のみに残すのみだ。優勝戦は防衛師範で防衛の手に入つたあ、残念無念よく言ふ所を知らず。つら〜と敗因を考ふるに敵は百戦を経た古柳、我は未だ試合不馴のチーム、充分の實力、体力を持ちながら試合未熟の爲平素の十分の一をも發揮の出来ざるをうらみて……。

加ふるに二名の病者を出した事又一原因ならん。

終に臨んで遙々應援の爲來られた諸君に秋季の大會に優勝を得んことを誓つてやまない次第です。

拙文良く當時の有様を表現出來ざるのをうらみず。

出場選手

C 吉武 F (田中) G (吉見(主將))

幸月 (中川) 岩本

八木

マネッジャー 山本徳市
我が籠球部先輩佐々木氏に感謝の意を

表す。

山口縣體育大會主催

縣下中等學校體育大會

育大會主催中等學校體育大會は工業都市宇部市神原の原頭に於て菊山會長其他多數名十臨席のにも花々しく昭和八年十月一日開始せられました。

我等籠球部は九月三十日齋藤先生引率の元に聖戦の地宇部市に向ひました。當時軽い練習に止めて英氣を養ふ事に全力を盡す。午後は八時半より就床して明日の日を待つた。明ければ十月一日!此の日曇天でしたが氣にする事も無く軽いオミング、アップをする。場内はさながら嵐の前の靜かさだ。バンドするボールの音も深い意味の有る恐しい様な感じに聞える。

八時より莊嚴なマーチにつれて各校の入場も物々しく所定の位置に付く。會長菊山知事の訓辭が有り。審判上の注意がありました。

参加校十七校有りましてプログラムは

此れを二分してA組B組として有る。吾が校はA組で今春の優勝校防衛及び多年の恨敵防衛を初めとして宇工、徳商、萩商、多中、興中、等の顔振りて、萩中は第一回戦に於て徳商と組む事に決した。萩中はA組のBコートに於て試合をするのです。萩中の前に宇工と防中の戦を見て居ます。防中の攻撃は物のすごく宇工は四十八對十餘のスコアにて破れてしまつたのでした。其の後は萩中對徳商の戦です。選手は笑をたゝえて出場、ヒー、笛の合圖と共にセンターボールは空中高く投げ上げられた。吾軍のセンター

吉武君軽くジャンプしてボールを打つ。ボールは吾手中に入り見事なチームワークによつて敵を壓し得點!又得點。此の戦は混戦なくして吾が意のままになり、對14の大差で勝ちを得ました。第一回の難關も無事に通過する事が出来た。然し第二の難關は一時間の後に構えて居るのだ。敵は防中!多年の恐敵防中だ。雪辱!

復讐!此れが選手一同の同一の考へだつた。十二時のサイレンは神原の陣頭に

鳴りひびいた。吾が軍の榮を促すが如くに。笛の合圖に依つて選手は入場。ヒー笛の合圖も恐しくセンターボールは空中高く投げ上げられた。ボールは吾が手中に入り混戦の後美事なホームエションで得點した。敵も去るもの牙を摩いて肉薄する。吾が軍美事なチームワークに依つて牙壁を左右にさける。試合の狀況は拙文良く當時を表現するを得ない故失禮する。選手一同非常に調子よく、完全に敵をノックアウトしてしまつた。前半のスコアは七對四。ノックアウトしたとは言へ危険此の上ないので選手一同は一生懸命の策戦だある。さうする中に後半の合圖は鳴つた。前より一層の美事なチームワークを成して敵の牙城を壊しつゝあるのだ。遂に吾がチームは二〇對四の大差で勝利を得た。多年の希望に燃えて居た復讐は此

の一戦に於て成つたのだ。此の餘力を持つて三回戦に(三回戦は準決勝)向ふ。防衛を撃破せよ、この叫び本校選手間にある。敵はと見るに、体格の良きチームではあるが吾が軍に少し恐れをなして皆

一四五

妙な目で萩中を見る。なにくそ。がんばれ。勝てるさいふ自信を深くしたが、いざ戦つて見るさ仲々侮れず加ふるに敵は百戦を経た古狸、我は未だ試合不馴のナーム。充分の實力、體力を持ちながら前戦に於て中川君が足にけいれんを起してしまつた、又加藤君が中指につき指をしてしまつた等の不慮の難に出會した。又吉見君は前日の練習過度の爲足を痛めて居たが元氣旺盛に一軍の將として責任は重し決然として涙をふるつて陣頭に立つた。其の涙ぐましい奮闘、選手一同血と涙の努力も報ひられず遂に敗將となつてしまつた。榮冠の鍵は遂に防商の手に歸した。が然し此くまで戦跡を考ふるに天下の強豪を相手取つた事はいさゝかなぐさめこならう。

防商は遂に優勝戦に残つた。B組に於ては徳中が残り兩校の優勝戦となつた。徳中の奮闘甲斐もなく防商の手に榮冠は歸した。嗚呼！今までの戦跡をたどるに選手は勞苦に堪えそして優勝旗の我が手に入らん

奮闘戦せしが遂に敗將となりしこの因をたどるに試合未熟のためならん。「馳れる者は久しからず、猛き人も遂には波ぶ」と古語があるではないか!!萩中龍球部選手よ、奮闘し苦熱に堪えしこのぐの意氣を養成して榮冠を巴城の天地に持ち歸らん事を祈る。終りに臨んで部長先生及選手一同の御健康を祈つて筆を置く。我龍球部先輩玉屋、佐々木、中村、諸氏に感謝の意を表す。

出場選手
センター吉武
ガード 吉見(主將) 岩本、加藤
フワード中川、田中、八木

附記 進決勝に於て萩中、山師が破れて三等、四等の決戦があるのであるが山師の棄権により、萩中、山師二校三等賞を得る所となつた。

水泳部

第五回近縣中等學校
水上競技大會

時恰も初夏、若葉萌ゆる山高のボブラは燦々降り注ぐ柔かな初夏の日射しを浴びて、澄み切つたブルーの水面にその緑の影を投げて居る。茲に山口高専水上競技聯盟主催第五回近縣中等學校優勝水上競技大會は、六月四日、山高ブルーに於て華々しく開催せられ、晴れ渡る蒼穹の下、參加した廣島、鳥根、山口三縣七校の水の猛者は飛沫を擧げて相闘ひ、水上の覇を争はんとする。

この大會に於て我が水泳部が勝算無き爲二百米リレーのみに出場せしは、我々の無力の致す所、校長先生及び諸先生、生徒諸君に對して甚だ慚愧に堪えざる所である。八時半、ブルー側に於て、型の如く開會式が舉行されこの頃より、この白熱戦を見んものさ押し寄せた觀衆に依つて早やスタンドは埋め盡され、立錐の餘地が無い。劈頭、二百米リレー豫選が行はれる豫定であつたが、大島商船の不參加の爲、直に豫選なしで、午後の決勝が行はれる

事になつた。午前九時、百米胸泳豫選に依つて大會の幕は切つて落された。續いて二百米自由型豫選、八百米自由型豫選、二百米胸泳豫選、百米自由型豫選、四百米自由型豫選、百米背泳豫選と、次々に行はれ、輝しい新記録を樹立して、午前九時の豫選の部は終つた。

殊に修道中學の驚くべき飛躍は目覺しくその冴えた美しいフォームは觀衆をして讚嘆の瞳を眩らしめるに充分だつた。午後一時二十分より、最初に我等の出場すべき二百米リレー決勝が行はれるのだ。控所に於て晝食をとり、休憩してゴールのかゝるのを待つた。この間、ブルーに於ては、修中の先輩にして、今母校のコーチャーミとして來山されし、かの有名な、オリムピックチャンピオン大橋田勉選手の様子があつた。この名選手の下にコーチせられる修中水泳部が関西の覇者たるのは當然だと思はれる。愈々十五分前、フアーストコールがかかり、抽籤の結果萩中は第四コースに決定した、萩中の顔觸は、栗屋君、三浦君、岸君、

吉崎君のオーダーだ。ラストコールの聲に應じて立つたる四選手、死而後已の決死の意氣だ。だが見よ!他校の陣容を。何れも百戦を経た一騎當千の勇士ではないか!!なに、捨て、かゝれ!、頑張れの叫びに送られて各選手はスタートに立つた。ヒー、用意、ドン!!

サツと許りに飛込んだ。栗屋君のスタートは實に見事だつた。然し焦り過ぎてかコース悪く、君の日頃のタイムも出なかつたのは惜しむべしだ。栗屋君、一米許りの差を持って、セカンド三浦君に渡す。新進三浦君、誠之館中、山中の後を追つて力泳せしも、ブルー不慣れの爲か、ターンの聲に奮然として起つた老練、岸君、その差を縮めんものと必死に泳いだ。誠之館中を抜いて呉れ!あゝ、然し何うしたのだ。ターンの再び災して、依然として、その差を持って歸る。ラストを承はるは萩中のナンバワン吉崎君だ。吉崎君頼んだぞ!、必死の勢凄じく誠中に内迫すれば、敵もさるものヒツチを早めて頑張

る。吉崎君、ターンの悪く、ラストスパークも奏効せず、少し縮めたのみでゴールイン。嗚呼萬事休す!!、かくして我萩中は五等で四點を得たのみ。豫選した所とは云へ、餘りにも果敢なく我が水泳部は惨敗した。四月以來、あの身を切る様な阿武の清流に目毎續けた練習も遂に報はれなかつた。然し決して落膽する勿れ!僕は實力に於ては本校は決して彼等に劣つては居ないさ信ずる。本校の惨敗の原因、それは實にパッド、コンジションミアンスキルドなターンの依るものだ。今少しターンの善かつたら山中や誠之館中如きに負けては居なかつたらうに。もう愚痴は云ふまい。惨敗したけれど惨敗によつて實によい經驗を得た。部員諸君はその短所を改善して不慮の練習を續けられ来るべき秋に備へられん事を切望して已まない。最近下級生諸君が進んで水泳部に入られる事は我等のたいに喜ぶ所である。今後益々入られて、不振な水泳部を盛大にし、傳統に輝く本校水泳部の名を四方に輝かせて呉れ給へ。おゝ、来るべ

き秋季大會よ、それこそ我が萩中水泳部があの鴻城の地に凱歌を奏すべき時でなくてはならない。終りに臨み、山口に於て色々便宜を御與へ下さつた先輩田坂さんと、大會に際して激励の電報を添うした萩中競技部に満腔の謝意を表して筆を擱く。

(K、T生記)

第三回山口縣男子水上競技大會

九月十五日午前八時、我等水泳部選手十四名は、山本先生引率の下に、全校擧げての熱誠なる萬歳の聲に感激し一路晴の戦場鴻城の地目指して、母校を後にした。昨日の盛大な茶話會——今日の熱烈な見送り——我等の胸底には感謝の念と、死而後已の必勝の信念とが渦巻いた。明ければ十六日、縣下水の子の櫻れの殿堂——縣下男子水上競技大會は、午前八時より、秋色濃かなる山口高女プールに於て華々しく開催された。お、！此の日に、我等が今春以來待望久しかりしその日なのだ。

入時プール前に於て、開會式が型の如く行はれ、八時二十分より、二百米第一豫

イム程出ず、商船柳生、安中山本等の新進に一、二等を占められ、三等でゴールイン。その時のタイム一分三十二秒。C組に山村君、D組に池田君。何れも最後まで頑張られしも遂に殿りで落選。されど兩名は未だ三年生だ。來年もあり、幸に自重して吉崎君の後繼者として榮ある將來を囑目して已まない。そこで一縷の望みは吉崎君にかけられた。他の組のタイムを見るに一等で三十六秒の者が居るこれは乗るかも知れない。僕等は神に祈つた。やがて通告員はその結果を報告した。そして幸に我が吉崎君はベストサーフで入選し準決勝へ出る資格を與へられた。次は百米フリー豫選。我々中には全く勝目のないレースだ。A組に百濟君、プログラムの組合せよき爲、意外にも、山中上野君に次いで入選し、我が寂寥なる陣營に生氣を與へた。B組に阿部君、C組に桶田君。何れも最後まで力闘されしも如何せん。遂に敢へなく落選した。されど君等は、二年の若さだ。僕は、に、君等が倦まず挽まず練習を續け

選に戦ひの火蓋は切つて落された。A組第一コース細商、第二コース萩中、第四コース安中、第五コース山中、第三コース大津中は不参加。トップ栗屋君、スタートに立つて合圖を待つ——ホイッ用意！ドン、五人一度に跳込んだ。劈頭から息づまる様な接戦だ。栗屋君よく負けず劣らず頑張つて山中、安中に續いて歸る。セカンド中村君、君は未だ二年だ。初陣ながらよくその差を持して歸る。この時山中、安中は少し前で白熱戦を演じて居る。サード岸君、猛烈として力泳せしその差を縮め得ずしてラスト吉崎君に渡す。君は夏休み以來、脚氣疾患の爲、練習中止を餘儀なくされ、剩へ平泳に轉向したのだから自由型は無理だらう。だが頑張つて呉れ、あつ、しまつた！君はコースロープに手をかけて、遂に柳商にリードされた。後の二十五米、必死になつて追撃せしも能はず、遂に四等で落選した。かくして我等はプログラムの時頭を敗北の涙で濡らしたのだつた。何たる失敗ぞ

られ、以てよきスプリングミーとして不振なこのレースに活躍されん事を切望す。百米に續いて行はれしは四百米自由型豫選。A組に我が岸君。懸命に力泳されしも遂に落選。B組にナンバワッ佐伯君、不利なアウトコースにも抑らず、ぐん／＼ストロークに折へを見せ首尾よく三等で入選。同じくC組の栗屋君も三等で入選した。次は百米背泳豫選。B組に本校のダークホース三浦君あり。これぞ我等が絶大なる期待をかけて居る種目だ。君はあの精悍な顔に闘志を漲らせてスタートすれば、果して、あの君獨特の美しいフォームで進む！遂に山師兒玉君に次いで二等で悠々に入選、タイムがもう少しよければ一等は確實だつたのに。十時五十五分、二百米平泳豫選。B組に山村君、C組に池田君あり。安中山本、井川、師範藤村君等の強豪に伍して堂々最後までベストを盡されしもその甲斐もなく遂に両君とも落選。D組に我が吉崎君。商船柳生、柳商松本に次いで三等で事なく入選。次は二百米自由型豫選。

確實な入選を豫期した丈に、失望の度も大であつた。然し終つた事は仕方が無い。次は八百米自由型準決勝。B組に老功栗屋君あり、第五コースだ。「頑張つて呉れ。」だがどうしたのだ、日頃の様な力強いヒツチが出ず、次第にリードされて遂に五等で落選。君の日頃の努力も酬はれなかつた事は遺憾である。C組に新進佐伯君あり、始めより力泳又力泳を續けしも強豪細商の爲又もや落選。君をして初陣の功を成さしめなかつたのは誠に残念の至り。君は將來大いに伸びる可能性が充分あるから、よく合理的な練習をして、來年はこの復讐をせられん事を切望す。かくて八百米自由型は全滅した。先輩諸兄が萩中の威名を縣下に輝かされたこの種目に一點も得られないのは先輩に對して誠に残念だ。衷心より慚愧の念に堪えない。次は百米平泳豫選。二等迄及べないサード二名入選。A組に吉崎君あり。彼は夏休前より自由型から俄に平泳に轉じてその技倆は自他共に許す所、されどコンジション悪く、君の日頃のベスト

A組に好漢岸君、アウトコースで不利なるもよく力泳して三等で入選B組に新人上田君、初陣の事まで調子悪く、不幸にして惜しくも敗れた。我等は、こゝに中距離は君の今後の健闘を願はねばならぬ。C組の中村君、休の調子悪く、已むを得ず棄權した。君をして初陣の功を成さしめなかつたのは誠に残念だ。だが君の前途には豊かな希望がある。今後自重して萩中水泳部の爲に盡瘁してくれ給へ。二百米自由型豫選後、プログラムを變更して大日本游泳術が公開された。時に丁度正午、これで休憩かと思ふに競技の進行を早くする爲、休まないとの事で非常に急がしかつた。やがてそれが終るや、五十米背泳準決勝のコールがかつた。B組には僕。背泳は僅か一週間しか練習しなかつた爲、果して落選してしまつた。C組には三浦君。矢張りタイムが悪く、百米と同じく兒玉君に一着を譲つて難なく入選。續いて百米平泳準決勝、B組には危く豫選をパスした吉崎君、平泳は各校の新進スター揃ひだ。あらん限りの力

を盡して首尾よく入選。次は待ちに待った八百米リレー準決勝だ。萩中はA組で第二コース、第三コース安中、第四コース柳商、第五コース師範だ。二百米リレーで落選の憂目を見た本校は、このレースには死んでも勝たうと固く誓った。トツ栗屋君、「頑張つて呉れ！」の聲に送られてスタートに立つた。ヒイツ用意！ドン、一直線に飛込んだ。山師、柳商に少し遅れてセカンド中村君に渡す。中村君体の調子思はしからざるもよく熱泳してその差を保つて歸る。「岸君頼んだぞ!!」の聲に起つた好漢、だが何うもヒツチが上らず元気がない。柳商を抜く事能はずして已む。而もこの時、安中の追撃は益々急、ラスト佐伯君、堅い決意を眉宇に表はしてスタートにつく。力強いストロークを見せて泳ぎに泳ぐ。然しその時既に柳商は我を抜く事十米許り、佐伯君安中を斥けて遂に三等でゴールイン。次は二百米平泳準決勝。B組に吉崎君あり。よく力泳せしも、晝食直後の事までコンジション悪く惜しくも落選した。君

の日頃のアマビションを果さしめなかつたのは返す返すも残念。だが總ては天命だ。午後一時十分百米自由型準決勝、A組には落選に入つた我が快男子百濟君、ラストまで死力を盡して力泳せしも遂に落選。無理もない。山中師範等の強豪揃ひだもの。來年の競争を期待する次第である。ついで四百米準決勝、A組に佐伯君山中の上野、寺崎、師範永久に伍して頑張れしも疲れし体を如何せん。遂に惜しくも落選。だが今年は初陣だ。來年がある。君の今後の猛練習は君をして來年の覇者たらしむるであらう。君よ心して自重せよ。B組に老練栗屋君、コンジション悪き爲、後の八百米リレーに備ふべく中止を餘儀なくされたのは遺憾である。次に二百米リレー決勝が行はれた。今更乍ら惜しい敗北が思ひ出されて新なる無念の涙の出るを禁じ得ない。この時師範は一分五十九秒二の新記録を作つて觀衆を驚かした。次は百米平泳決勝、我等が吉崎君あり。二百米に惜敗した恨みを此處に晴らさんど決死の色を浮べてスター

トする。最も不利な六コースだ。何れも平泳界の一人者許りだ。お、泳ぐ、二十五米位までは殆んど一直線だ。五十米位で一、二等を争つて居る。だがラスト思はしからず遂に三等で榮譽ある最初の四點を入れた。ついで百米背泳決勝。お、第二コースに猛者三浦君が居るぞ。「ターンに氣を附けて、全力を發揮して呉れ。」ヒイツ用意！銃聲一發六つの男性的な曲線が日光に躍る。君はあのフォームでぐんぐん、他をリードして行く。だがいつもターンで抜かれて、遂に五等でゴールイン。見す見す優れた腕を持ち乍ら優勝のチャンスをつ失つた事は残念でならない。こゝに貴重な二點を得たのみ。だがこれには君の血と涙が籠つて居るのだ。次は二百米自由型準決勝三等迄入選だ。B組に君君、云つておいたのにヒツチが遅くフアイチンクススピットが足りない。師範の八幡君が早いだけだ。最後のターンまで君は確實に三等を保持して入選を疑はなかつたのに、愈々ラストになるや、君はラスト聞かず、而も安中の

鎌田君はラストスパーク物凄く見るく肉迫して行く。「岸君抜かれるぞ」。がだが聞えないのか依然としてヒツチを上げない。あ、遂に抜かれた。これで二百米にも點が入らない。ついで八百米自由型決勝我に出場者なし。寂寞。八百米自由型終るや、愈々三浦君の活躍すべき五十米背泳決勝だ。三浦君悲壯な意氣を以てスタートにつく。號聲一發！飛出したる六選手、最初から猛烈な白熱戦だ。君は百米の雪辱をすべく、あらん限りの力を腕にこめて闘ひしも、百米と同様、ターンで抜かれて、亦もや五等で歸る。充分な實力ある君の爲誠に惜しみて餘りある事だ。かくてこゝに二點を得て、合計八點を得。大勢は既に決した。時に、柳商、柳中は本校と全じく八點でこゝに三校の運命は残されたる八百米リレーに依つて決する事になつた。ついで二百米自由型、二百米自由型、二百米平泳、四百米自由型、百米自由型の決勝が行はれたが、本校より一人の出場もなく、我等の無力を恥ずる次第である。是に於て通告員約

一時間の休憩を宣し、不安な心を抱いて控室に退く。「選手と頑張つて呉れ」「死ぬまでやつて呉れ」。我等は互に体をマツサージし合つて、聞き書きの言葉を交し合つた。あ、我若し、之に敗るれば、何の顔ありて生徒に見えんやだ……。一時間後、遂に最後のコールがかつた。萩中は最も不利な第六コースだ。トツ栗屋君あらん限りの力を盡して三位を保つてセカンド中村君に繼ぐ。中村君新進の意氣もて力泳せしもコンジション悪く、ターンも悪き爲、商船に抜かれて君亦及ばず。サード岸君これに繼ぐ。君よく頑張れしもヒツチ上らず遂に柳商にリードされた。再び抜き得ずしてラスト佐伯君に譲る。君元氣よくストロークに努めを見せて最後まで頑張るも、柳商もさるもの巧みに我が追撃を遮る。この時、柳中の追撃亦急なるも君よくラストを出し、そのまゝ、ゴールイン。あ、遂に戦は終つた。本校得點十二點は豫想の半ばにも過ぎない。残念だ。然し事已に終る。雖伏三ヶ月、

鍛へに鍛へた我等が腕も遂に及ばず、新進安中、柳商に續くとは。知る人ぞ知る我等が心。願れば誠に不運な試合だつた。だが挽まぬ努力の下にこそあの榮ある優勝旗は輝くのだ。下級生諸君よ！願はくは來年こそ、この恨を晴らして呉れ給へ。終りに臨み、校長先生並に諸先生、生徒諸兄の熱誠な應援を深謝し、水泳部員諸君に母校の爲益々奮闘されん事を切望します。

武道部

一月十日より同十九日まで十日間劍柔兩部の寒稽古を行ふ。
一月二十一日、寒稽古後武道大會舉行、並びに皆勤者及精勤者に賞狀を授與す。
五月五日 武道小會舉行。
七月一日 武道大會舉行。
九月十四日 武道小會舉行。

柔道部

京都武徳殿演武大會

時之れ昭和八年七月下旬京都武徳殿に於て第廿四回青年大演武大會が開催さる。左に本校選手の奮闘の状況を述べん。

二十八日 個人試合

母校の名譽と母校生徒六百の期待を雙肩に擔ひし選手の胸如何。萩中本陣には必勝の雲が漂うてゐる。試合は例年通り東西に別る。勝ちて喜びを分かち、負け勵ますシーンは續き試合は萩中選手の身に迫つて来る。先づ西の方では明日の戦闘に於て先鋒を預る江島、京都宮津中の高岡君と組む。本場故少し自重、突然彼得意の巴投に出れば業有を取り先づ機先を制す。續いて跳腰の猛襲に出れば敵忽ち我が軍門に降る。東の方を見れば明日の戦闘に於て中堅の重任を負ふ小田君鹿兒島一師の有馬君と組んで不気味な沈黙を續けてゐる様だつたが突！彼に於てのみ許される得意の足拂に出れば敵もろくも我が軍門に降る。西の方では萩中柔道部切

つての背負投の剛者羽田君、岐阜師の福井君と組んで大奮戦。背負又背負追撃に追撃を加へしも機竟に到らず引分とは無念。が併し君の最後迄のあの奮闘は實に萩中精神の發露とも云ふべきだ。東の方では新進和田君元氣よく出場し岐阜本陣中の宮崎君と組む。彼敵の猛襲を軽く避け猛襲に猛襲を續く突！敵の跳腰の奇襲和田君避け難く竟に倒れしも貴君未だ四年前途運送再来の日に於て今日の恥辱を報いられん事を祈る。續いて初段の部始まる。先づ西の方では萩中柔道部のナンパーワンたる後藤君さすがにごこごこなし餘裕を見せてゐる。山梨甲府中の中山君と組む。彼敵を押へ敵からも起きて来た所を小内刈に拂へば軽く一本とは流石。續いて柔道部の重鎮小河君山梨師の薬袋君と組む。突！彼得意の跳腰に出づれば敵危くのがれ命拾をす、敵我たおそれたが頑強に頑強主義に出て来た。小河君猛襲を試みしも時既に到れり。引分とは無念千萬。かくして本日の試合は少しは好成绩に終つたと思ふ。目指すは明日。

一五二
明くれば七月二十九日、団体試合
目指す敵は三重四日市商業、選手の意氣天をつくの勢なり。戦の幕は切つて落された！吾校選手の間々には悲壯な決心が有々々浮んでゐる。嗚呼此の心中こそ知る人ぞ知る選手のみが知る心境である！！先鋒江島、敵先鋒伊藤君と組み「さあ」来たし隻手を舉げれば勢既に敵を壓するの形なり。暫し睨み合の型であつたが突！江島常習の巴投の奇襲に出れば敵は忽ち我が軍門に降る。第二先鋒羽田君敵の猛襲を巧みに避け突然大外刈の奇襲に敵は危く一本の所を辛じて業ありに止めた。敵の備への悉く崩れたに乘じ更に猛襲を試みしも如何せん時既に到り遂に引分けとは無念。續いて中堅小田君突！得意の拂腰の奇襲。業有を取り先づ機先を制す。敵業有を取られるや猛然と襲ひ来た小田君敵の猛襲を巧みに利用せしも敵又よく避け機會到来せず續々引き分けとはかへすがへすも無念。副將小河君の面には悲壯の決心が有々々見えた。勝負何れも見えなかつたが君が大外刈の奇襲を試

みる敵もさるもの見え逆を取り遺憾ながら勝を譲つた。杖さたのむ小河君は倒れた。大將後藤君の任、益々大。彼は昨日来の足の苦痛を忍んで雄々しく立つた彼の眼中には戦友小河君の仇を報すべき焔が炯々と燃えてゐた。敵將我に恐れをか帯を掴んで頑強につばつて来た。後藤君巴投の奇襲、敵半圓を畫きて倒れしも審判見たか見ないか何んの聲もない。確に一本だつたのだが併ししかたがない。息詰る様な大接戦。機を捕へて後藤君押へ込みて業有を取りしも時間既に迫まる後藤君足の苦痛を忍んで襲撃に襲撃を加へしも竟に引分。嗚呼萬事休す。猛將後藤君の眼には露に似るものあり。足の苦痛を忍び飽迄戦つた君の奮闘はこれ萩中精神の發露とも云ふべきだ。戦は終つた吾校は半點の差で惜敗した。が併し我選手は最善を盡した。眞に萩中健兒として正々堂々と戦つた積りである。

部の諸君！再興の氣に燃ゆる萩中柔道部を一層強く育てられん事を望む。
終りに猛襲に拘らず熱心に御指導下さつた先生及び先輩に厚く謝し左に本校選手の成績を掲げて擧げん。
個人勝負
本校 他校
△和田——○宮崎
○江島——△高岡
羽田——×福井
○小田——△有馬
小河——×薬袋
○後藤——△中山
団体試合
萩中 四日市商業
○先鋒 江島——△先鋒 伊藤
D四 羽田——×四 發生
D中堅 小田——×中堅 小林
△副將 小河——○副將 平賀
D大將 後藤——×大將 渡邊
採點法
大將副將は一點五分、他は一點、○勝
△負、D業有、×引分 (江島記)

一五三
萩体育聯盟演武大會優勝記
昭和八年九月十八日、風雲滿洲の天地に急を告げしより早や二ヶ年、そして時まさに超非常時なり。此意義深き今日、萩市体育聯盟主催の下に第二回演武大會が行はれた。大會午後一時さすがは非常時さしもの明倫大講堂も觀衆で一杯の有様。やがて藤田會長並に審判の注意と共に開演の幕は切つて落された。戦端は萩中對萩商。小河二段を初め後藤君等の精銳を持つ萩中は萩商を瞬時に於て撃滅せんもの勢なり。
萩中 萩商
山本 ○植田 金山 ×松浦
澤田 ○篠原 ○和田 山田
○弘中 木庭 羽田 ×小川
河内 ○久保田 ○江島 細田
大貫 ○田中 ○小田 吉村
○岡 中村 小河 ×田原
○波多野 敵木 後藤 ×兒玉
○松浦 藤井
が併し先鋒山本君の失敗續き澤田君の惜敗。豫期に進ぜずして遂に七對四。萩中

本陣黙として聲なし。嗚呼何の顔容あつて先生否百の生徒に見えられようか！「たつた七點！優勝出来んぞ。最後迄攻撃に行くのだ」そして津村先生の鐵腕は空中に鳴り、健脚は板上に鳴った。

嗚呼此の熱誠何ぞし頼ゆべき！、唯必勝あるのみ。先鋒の重任を以て敗惜した山本君の目には露に似るものが光つてゐた。そして彼の面には悲壯な決心が有々々浮んでゐた。

あ、此の感激。いつしか本陣には殺氣漲る。時既に優勝の因は出来上つてゐた。次の戦端は青年、全勝を神に期し我等は悲壯な決心の下に道場へ。黙々たるうち戦の幕は切つて落された。

- | | | | |
|------|----|-----|-----|
| 萩中 | 青年 | 萩中 | 青年 |
| ○山本 | 森田 | ○松浦 | 山本 |
| ○澤田 | 日隈 | ○金山 | 岡 |
| ○不弘中 | 原田 | ○和田 | 三浦 |
| ○河内 | 鬼城 | ○羽田 | 野原 |
| 大貫× | 石川 | ○江島 | 岡崎 |
| ○岡 | 福田 | ○小田 | 佐々木 |
| ○波多野 | 原 | ○小河 | 萬屋 |

中にさうく抑へられてしまつた。小田君は關節を取つたりなどして頑強つて居たが力盡きて抑へられた。後藤君は立業寢業を兼備せる猛將敵が寢業ならこちらもおそつたが此の日は足に腫物が出来て試合もよそつて居たのを無理に出場したので岩中との試合で腫物はひどくなるばかり、此の時二回までも抑へてゐたのに何しろ足が自由にならずそのまゝ引分となつたのは致し方なかつた。實に試合運が悪いのだ。此處に四對〇と言ふ惨敗をしたのである。選手の中や察すべし。もう少し寢業をやつて居たら選手各々が口にした事だつた。無理もない事であつた。控室に歸ると津村先生が來られて激勵して下さつたので選手一同今度こそは意氣込んで居た。

三回目は宇中である。山中戦の侮辱をこゝで酬いんと意氣昇天、小田君立つや巴投で業有り又立つて來たのを巴投で一本を取つて敵の機先を制すや江島君も腕がらみに一本、後藤君も足の傷も忘れ

○後藤 高洲
先鋒山本君の奇襲功を羨し續くメンバー各々善戦し斯くして再び緑青の優勝旗は萩中の手に！、お、何んと朗かなストーリーのマーチ、若人よ朗に歌へ。高らかな校歌は初秋の夕闇に消えて行く。徒には立たじ學びの道に……

山口縣体育大會

(江島記)

明けて十月一日昨日の疲れも熟睡によつて選手も元氣發刺、先鋒より贈られた卵をすゝつて各々開催地たる新川小學校に向つた。

参加校十九校が一班と二班とに別れ、更に各班が甲乙二組に別れ、都合四組である。萩中は一班的甲組に入つて居る。甲組には山中、岩中、宇中、徳商の四校が居る。山中は去年よりは衰へたと言つても初段ばかり尙優勝候補の一つである。岩中は初段が四人で相當手強い。宇中は初段が三人であるが地元である關係上實力以上の力を出すだらうと噂されてゐるだけに

相當警戒せねばならぬ學校である。徳商はと言へば二段一人初段が二人で先生からの話によると甲組ではこの學校が優勝しはしないかとの事であつた。

第一回に組んだのが岩中である。これは宇中との試合を見るに二對一でこれを負かしては居るが立業で來るらしい。立業なれば萩中は縣下無比である。日頃きたえた美技を見せんものゝ猛然として立つた。

始まるや我校の大業者小河君小外刈で美事きめてしまつた。これで全軍振ひ立ち後藤君は敵が寢業で來るので面倒と思つたのだらう忽ちにして抑へてしまつた。

さうして居る間に江島君が美事な巴投を以つて投げてしまつた。羽田、小田君ごちらも猛烈に攻めたが敵は立業ではかなはなく思つたのだらう。寢て來るので終に引分となる。我が軍は此處に貴重な三點を得た。

次は山中である。羽田、江島、小河君立つて行きしも向ふは天下に名をなす寢業の權化。すぐ寢る。起せば寢る。こいふ

三對〇美事大勝した。

最後の戦は強敵徳商である。宇中戦で意氣揚つた我が軍は最後の牙城に向つて突進した。

小田君先づ腕がらみで一本取る。江島君も寢業の中の苦戦の後腕がらみで一本、これで二點を揚げた。後藤君は敵が寢業で來るので寢業で攻めて行つたが敵は老巧清水二段然も寢業に於ては縣下でも一二を争ふ猛者、これを後藤君抑へようぞ攻めて居たが敵はたくみに逃げるので後藤君機智をきかし立つて取つてやらうと考へたのだらう。引起すや美事な小外刈。一本！審判の聲もそれに魅せられた様だつた。然も寢業でも斷然攻勢であつたのを見てその底力を想像し得るだらう。

大將小河君と徳商の大將とは實に立業と寢業との闘争であつたが終に引き分となつた。然し小河君の優勢であつた事は言ふまでもない。羽田君も大いに奮戦したがこれ亦小河君の場合と同様。此處に亦三對〇で大勝した。合計九點。全体を通じて五等。

甲組で山中が一等十二點、二等萩中九點三等徳商三點、宇中、岩中同點二點づつ。此處に悔いても悔いきれない事は山中との一戦であつた。寢業を日頃もう少しやつて置いたらあれ程惨めな敗北は取らなかつたらうに。そして又後藤君の腫物であつた。

そして此處になげかわしい事は應援に來てのない事である。それは距離が遠かつたのだらうけれども宇部に應援に來て居るもので柔道部の者が競技の應援に行つて居るが、これらの人々は香柔道の應援に來てもよいと思ふ。應援者の多い事が選手に疲労を回復させる最もよいものである事を知つて居てもらひたい。他校の選手が手や足をもんでやつて居るのを見て實に残念でならなかつた。山中戦の惨敗も此處にあつたのではなからうかと思ふ。

然し選手はベストを盡してやつたのだ。さして近年にない好成绩を揚げたのだ。然も日頃立業ばかりやつてゐる寢業の大會に出場して堂々とした成績を得

た事は實に驚歎すべきではないか。

これは先生から聞いたのだが大会が終つて昇段會議の際に他校の選手の段を上げる時には、かれこれ意見が出たが萩中の時だけは何も話はなくずんずん進んで皆昇段したこの事である。羽田、江島、小田君は初段に、後藤君は二段になつたのだ。これを見ても萩中柔道部が如何に理想的な柔道をやつて居るか分るだらう。今や萩中柔道部も創立以來無いレベルに達してゐる。

二段が二人、初段が三人と言ふ時代が何時あつたか？

おそらく創立以來ないであらう。然し今はさう言つても後の後継者がなければ駄目である。いくら土台を築いてもそれに建てる人がなくては何にもならぬ僕達は未だ四年生であるがこの萩中傳統的の立業本位をよく守り、萩中獨特の理想的な、合理的な練習をして今年の萩中にはちない好成绩を揚げん事を誓ふものである。

(松浦生)

戦績を圖示す。

大將	小河五一	△	○	○	×	○	×
副將	後藤榮一	×	○	○	○	○	○
	小田武夫	△	×	○	○	○	○
	江島 修	△	○	○	○	○	○
先鋒	羽田 稔	△	×	×	×	×	×
補員	和田 滿						

○ハ勝、△ハ負、×ハ引分。

第三回大日本武徳會

山口支部萩分會演武大會

十月十五日。場所—明倫小學校講堂。

午前九時演武開始、午後五時頃終了。

當日我柔道部は二年以上四年迄を主として之に五年の有段者五名が加はり約五十名出場。殆んど萩中柔道部を以て會場を壓するの感あり。

當日の成績概して良好なり。

個人別勝抜試合成績左の如し。

有段者の部
一等 小田 武夫君(萩中) 初段
二等 後藤 榮一君(全) 二段

一五六

三等 兒玉 秀夫君(萩商) 初段
四等 高洲 孝次君(青年) 二段
段外者の部

一等 岡 敬太郎君(萩中) 二段
二等 小川光太郎君(萩商) 一段
三等 山本 長人君(萩中) 三級

以上萩中柔道部には其の前途大いに期待さるゝものあり蓋し怠らず絶えず挽ゆまづ不斷の練習忘るべからず。

劍道部

山口高商主催第二十七回

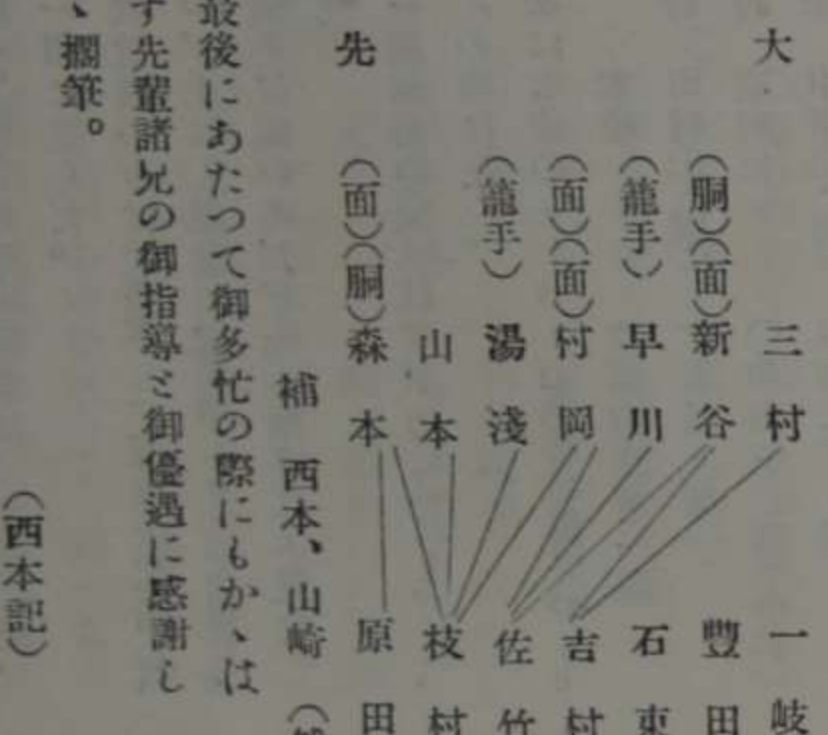
近縣中等學校劍道大會

新緑薰る五月十四日。山口高商主催劍道大會に参加すべく十四日午前五時出萩高鳴る胸をおさへつゝ、高商正門前に下車し午前七時半より試合の幕は切つて下された。

本日の試合は三本援勝負である。我々はしばらくの休憩の時間も萩中健兒の意氣は勿論四年生の意氣を見せてやるぞと互に勵し合つてゐた。我が校は一回戦は一戦一勝の形で二回戦興中にくんだ、先輩の齋藤さんの精心的應援に意氣いやが

上にも昇り。「萩中」興中」よばれた時には血の逆流するを覺へた。先鋒の森本君の突進の處置によつて敵をまたたく間に倒した。此れはコンテーションが良いぞと必死の眼を見張つてゐた。副先鋒以下は常程の元氣も出す惜くも敵の三將を残して敗戦の憂目を見た。徒づらに村岡君の手の負傷も口惜しかつた。

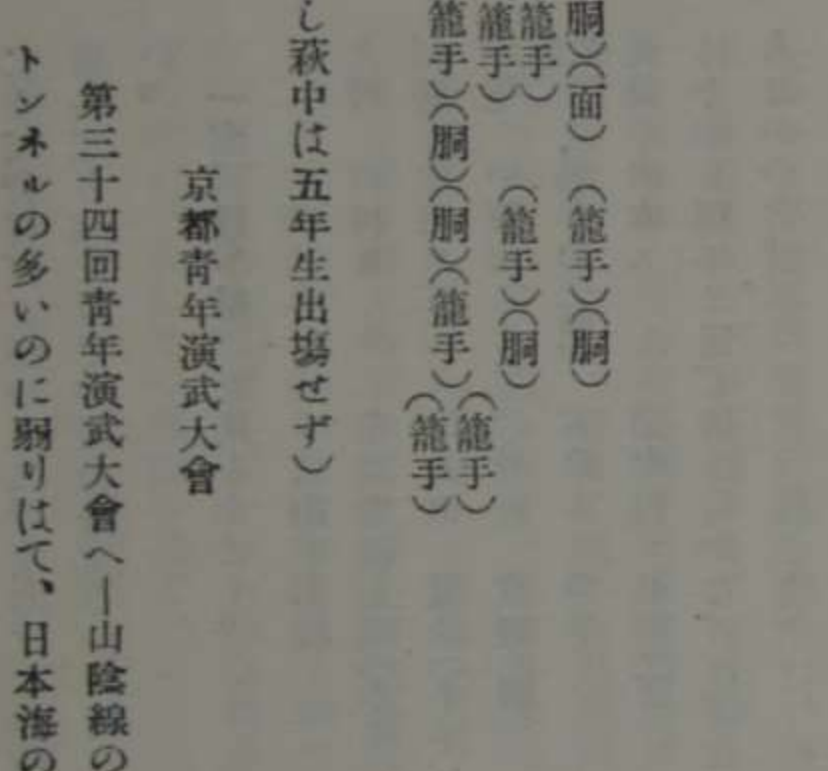
今此の敗戦を慮みるに此れは萩中劍道部の敗戦に非ずして劍道部有志の四年生



最後にあたつて御多忙の際にもか、はらず先輩諸兄の御指導と御優遇に感謝しつゝ、擧筆。

(西本記)

の敗である此の敗因は昨日の遠足に左右された所もあるが要するに未だ一度も晴の試合場を踏んだことが無く試合なれせざ従つて試合度胸の出来ておらぬからであると思ふ。然し考へて見るに我々は出来るだけベストを盡くした積りだ然るに天は我に不利無情であつた明こそは榮冠に目指して突進し奮闘努力せんことを誓つて終ひませぬ。試合のメンバーは次の如し。



第三十四回青年演武大會へ—山陰線のトンネルの多いのに弱りはて、日本海の

澄んだ水に慰められ、一日千秋の想ひで京都に着いた。
試合は廿五日より廿七日まで三日間にわたつて舉行された。本校選手は全部一級申込であつた。
眞夏の空は薄紺色に澄み渡り、山の端には、男性の隆々たる筋肉を想はせる様な入道雲が湧いて居る。強い光に照りつけられてながら釜中にある様である。
参加校實に三百十四校。一回戦で涙をのむ者百五二校。
本校選手個人の戦跡左の如し。
○本校 (面)楊井 茂
大阪都島工 酒井 修
○本校 (小手)山本正夫
滋賀膳所中 佐川一男
○本校 (小手)松平 了
愛知豊橋中 (小手)松平 了
○本校 中原正久
○大阪堺商 (面)平井繁藏
本校 田村 甫
○愛媛吉田中 (胴)河野 喜
個人試合はあまり成績かんばしからず。

一五七

團體試合の第一回戦は、近畿の雄、京一商と組んだ。

武道殿の中は、重苦しい空気が充満し、いやが上にも眞剣に緊張しきつて居た。「相手は強いのだぞ」「相手に不足なしだ」。

一度剣先を交へれば、これはたまげた、なんの事はない。

次に本校のメンバー、戦跡を揚げやう。

本校 京都市立第一商

大將 田村○(胴) ×石崎 信一

副將 室田× ○和田正二郎(小手)

中堅 中原○(面) ×山本 誠

第二 楊井○(小手)×勝馬 徳一

先鋒 山本○(胴) ×澁谷 謙一

虎の皮をかぶつた馬の様なもんだ。外の者がかつてに強い、虎の皮を一寸かぶせたにすぎぬ。

第二回戦は富山中學だ。「センキタン」賣りに敗れてなるものか、そう強い學校ではない。此れがいけなかつた。

油断だ。これが大敵だつた。センキタンをも少し強い者として食ひ下る様

にして行けばよかつたに。なんぼくやみ事をならべた所で、後の祭でしかたがない。

一應戦跡を揚げて見るせう。

本校 富山中學校

大將 田村× ○高堂義太郎(小手)

副將 室田× ○太田 賢助(小手)

中堅 中原× ○竹村 貞雄(胴)

第二 楊井○(面) ×鈴木 幸平

先鋒 山本× ○中田 弘昭(面)

今年も例年と同じ道を行かなければならなかつた。

男だから泣き事をめそ〜ならべるのはやめ様。

つまる所元気がたらず、技も下手で、運もなかつたから負けたのだ。我々に勝つだけ「センキタン」に強い所がある。

秋の縣体にはやぶれかぶれで奮闘せん事を誓つて筆を置く。福生記、

九月十七日。お、此の日こそ我等が待ちに待ちし所の萩市體育聯盟主催第二回

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩市體育聯盟主催第二回萩中萩商萩聯青對抗武道大會之記

萩商との試合始まる。我が校のメンバー、戦績は左の通りである。

萩中 萩商

大將 ○田村 甫 藤田正義○○大將

副將 ○中原正久 小川貞雄○○副將

○楊井 茂 有田健助

○山本正夫 河上忠雄

室田 了 植田富祐○○

湯淺利夫 池田吉二○○

○村岡統一 長井 勇

○山本正次 長岡良一○○

○新谷幸治 杉山良介○○

○吉賀 逞 藤本弘資○○

○松本信義 石田儀一○○

○田中政樹 來島一正○○

○吉岡 田中直光

○三村 巖 仙崎俊夫○○

先鋒○○三浦 藤田辰治○○ 先鋒

先鋒の三浦出づるや軽く藤田を屠り、よく敵の機先を制し萩中の意氣を高からしめた。三村吉岡續けさまに勝越すや敵もさるもの我が田中松本をよく抑へる。松本足を滑らして負けたのは惜しかつた

吉賀軽く敵を屠れば新谷山本負ける。山本十分勝負があつたが油断をした爲に惜敗せしは残念。村岡出づるや長井よく攻撃し村岡受身に成勝ちで我等意外の感懐いたがその中に村岡攻撃に出づるやその勢物凄く敵をよく抑へる。湯淺室田惜しくも敗る。山本の籠手は實に見事であつた。續いて我軍は楊井勝ちて優勢。副將中原實力を出し得ずして敗れしは残念大將田村榮望を負つて立つ。敵先づ一本取れば我亦一本とり一本一本勝負となり最後の一本が兩軍の勝負の鍵を握つた。田村よく頑張つたが手を痛めて二三日前より練習を休んでゐた爲調子出でず惜敗せしは残念であつた。結果は萩中七點萩商八點で一點の差に涙をのむ。我等無念の心の遺場なく青年を打切れと意氣込む。次に萩中對青年であつた。この試合には出来るだけ多く勝たねばならぬと締つてゆけどもあまり奮はなかつた事は残念であつた。次にその戦績を掲ぐ。

萩中 萩聯青

大將○○田村 甫 小田秋彦 大將

萩中萩商萩聯青對抗武道大會開催の日である。過去十數日間一段の緊張を以て此の大會の覇權を再び我が手に收めんものと猛練習を重ねた。

あ、今や此の日来る、戦はんかな萩中健兒!!今こそ我等の腕を奮ふ時が来た。

午前十一時半柔剣道選手は學校に勢揃ひし優勝旗を先頭に、途中春日神社に戦勝を祈りて悠々明倫に向ふ。

明倫校庭に於て萩中應援團は校歌を合唱して我等を激励した。我等はその責任の重大なる事を知ると共に血湧き肉躍る感を止め得なかつた。校歌終るや直ちに仕度して開會式に参列す。藤村大佐の開會式の辭に始まりて、會長藤田中將のお話し有り、優勝旗返還、中原君の選手宣誓等あり。控室に退く。剣道の最初は萩商對萩聯青の豫定であつたが萩聯青のメンバーが揃はないので番組を變更して萩中對萩商となつた。我等必勝を期して出場。時に柔道は本校對萩商にて我軍既に二人倒され、萩商侮るべからざる氣勢を示し、接戦を豫期せしめた。

副將 ○中原正久 片山榮熊○○副將

○楊井 茂 横山留一○○

山本正夫 木川 茂○○

○室田 了 野原國忠○○

湯淺利夫 西郷三郎○○

○村岡統一 三坂淳亮○○

○山本正次 小方 鼎

○新谷幸治 萬屋三郎

吉賀 逞 細田義熊○○

○松本信義 細川 晃○○

○田中政樹 藤原元明

吉岡 武田義次○○

○三村 巖 津守 進○○

先鋒○○三浦 赤木文祐 先鋒

村岡の飛込闘は見事なものであつた。田村は昨年本大會に於て萩中の大將水津と白熱戦を演じた二段の敵將小田に一本も勝を譲らずこれを屠つたのは萩中の一同等十分に喜ばした。而して遂に八對七で凱歌は我に擧る。

結局合計萩中十五點萩商十八點青年十二點で萩商に三點をリードされる。柔道と合して我等は優勝の榮冠を贏ち得たの

であるが剣道部は平素の實力を出し得ずして惜敗した。我等今から練習に勵み明年の本大會に、いな、近くは縣体に優秀なる成績を挙げんことを誓ひます。

最後に先輩瀧口氏が夏休み中炎天の中を連日熱心に指導された事をこの紙上より御禮申し上げます。

Y, S 生記

附記青年のメンバーには四五名補員と變れるものもあるも申込み通りに書きたり。

山口縣體育大會

昭和八年十月一日、宇部市神原小學校講堂に於て、例年の如く縣體育大會舉行さる。

九月三十日朝、我等選手は校長先生始め諸先生、並びに學友諸君の純情に送られつ、必勝の決意を以て決戦の地、宇部の空を目ざして自動車を馳らす。同行の競技部、柔道部、籃球部の選手は何れも、生徒總代の激勵の言葉を胸にし、奮進する自動車の動搖と共に、深く責任の重且つ大なるを覺ゆ。午前十一時宇部着、直

ちに木村旅館に投宿した。其の日は明日の戦闘に備ふる英氣を養つて、疲勞を遣さざるべく、早く床を取る。然れども剣道部のメンバー尙手に入らず、や、不安を感じた。

明くれば十月一日快晴の天氣に恵まれて我等選手の意氣、いやが上にも揚つた。

午前八時會場を集つて開會式に列す。式後控室に引き取り、メンバーに依れば、例年と違つて今年は東西南北の四部に分けられて居る。参加校實に二十六校本校は東部で、關中、徳商、豊中、柳商、安中の五校と組んだ。かくて我等選手一同緊張した氣分の中に、我校對徳商戦の幕は切つて落された。中原先鋒最初の一撃を得れば、田村四將、室田中堅、難なく二點を稼ぐ、次いで楊井副將、奮闘空しく遂に勝を讓れば、山本大將奮然起つて戦ひしも亦遂に勝を讓つた。次に關中に對す。此れぞ過ぐる年、關中遠征の際恥辱を受けし恨敵である。恨を報復すべきは唯此の一戦敵に隙なく、我亦油断なし。先鋒中原君得意の面を試みしも敵は

容易に降らず遂に一點を失すれば、四將田村君猛然起つて一點を復す、中堅室三君、副將楊井君は實力發揮出來ず不成功に終る。山本大將憤然として立ち美事得意のお面一本。然して恨は晴れず遂に終を告げた。次いで安中豊中と試合の進行につれて彼等は我軍の敵ではなかつた。安中と四對一、豊中と三對二で勝つた。かくして我選手の意氣益々旺盛となり、最後に柳商と對陣して一戦此れ亦我軍の敵ならず四對一で我軍が勝つた。

本校のメンバーと戦績左の如し。

學校名	關	徳	豊	柳	安	個人
選手名	中	商	中	商	中	點數
大將	山本正夫	○	×	×	○	○
副將	楊井茂	×	×	×	○	○
中堅	室田了	×	○	○	○	○
四將	田村甫	○	○	○	×	○
先鋒	中原正久	×	○	○	×	○
補員	村岡統一					
	湯淺利夫					

16

點であつた。即ち我校と關中とは同點である。

従つて兩校の決戦が午後真先に行はれる事になつた。そこで我校からは最もコンディションの良い田村君が代表者として出場した。此に對して吾選手は唯精神的應援が出来るのみだつた。兩校の代表者相向ふ。勝負一本！密判の聲と共に兩者は立ち上る。田村君の氣聲道場を震はし相手や、上り氣だつた。味方はじり／＼敵を攻め、やがて美事なお面！勝負其迄。忽ちにして關中の代表者を難なく降伏せしめた。そこで東部は本校、西部は宇中、南部は防中、北部は山中が各部の戦勝者と定つたのである。次は準優勝戦で萩中對宇中、山中對防中との組合せになつた。その戦況を上げよう。

準優勝戦(二本勝負)

萩中 宇中
 大將 山本正夫◎ 大將 米川 整二
 副將 楊井茂◎ 副將 河野 直彦
 室田了◎ 朝廣 英雄
 田村甫◎ 河内山喬典

先鋒 中原正久◎ 先鋒 中本 功
 優勝戦(二本勝負)

山中 宇中
 大將 木戸立男◎ 大將 米川 整二
 副將 三好利彦◎ 副將 河野 直彦
 伊藤重雄◎ 朝廣 英雄
 吉賀 清◎ 河内山喬典
 先鋒 齋藤 勝◎ 先鋒 中本 功
 我軍は惜しくも準優勝戦で敵に一步を譲り、三等になつたが、正々堂々戦ひ、技に於ては決して劣つては居ないと思ふ。見よ！此優勝戦の戦況を！我軍は決して山中に劣つては居ない。我軍の實力が如何に大であるかが此に依つて證明されたのである。

終りに臨んで四年以下の剣道部の諸君に一言す。試合は要するに意氣で勝負が決する位であるから、諸君は各自が自覺せられて、常に體をねり、技を研究せられると共に、此の點に留意して益々合理的練習をされん事を先づ望む。そして來るべき來年の縣體には縣下に其の覇をとなへられん事を切に希望する次第である。

縣下に覇者たる者は天下に覇者たる者である。 S Y 記

辯論部

昭和七年度秋季辯論大會

辯七並に演題左の如し。

- 一、開會之辭 委員
- 二、偶感 四ノ一 松尾 岩雄
- 三、現代日本に對する所感 三ノ三 白藤 孝亮
- 四、競技精神を征せよ
- 五、滿蒙の生命 二ノ三 伊東 祐邦
- 六、世界の陸海空軍 三ノ二 西島 村一
- 七、スポーツ 二ノ一 伊藤 輝典
- 八、我國民性 三ノ三 田邊 實彦
- 九、桂公の一里一日 一ノ一 藤本 雅己
- 十、新興日本の活精神 一ノ二 熊谷 正雄
- 十一、實業界の偉人中山太一 三ノ一 佐伯 貢

一ノ一 堀 啓一

十二、キープ、オグ、サ、クラス

三ノ三 中野 博造

◎討論「國際聯盟退可否論」

四、五年生

十三、雄辯禮讚 五ノ三 阿座上 孚

十四、誤字が一字

一ノ一 齋藤 吉史

十五、東洋主義と西洋主義の融和につ

きて 三ノ三 西本 實

十六、正義日本の一大使命

四ノ一 伊東 美一

十七、吾等の自力更生

三ノ一 中谷 博

十八、リンカーン略傳

一ノ三 村上 英俊

十九、眞劍の力 二ノ二 淺原 昌佑

廿、イングリッシュユスビキング

四ノ三 原 信一

廿一、恩を守れ 一ノ三 藤田日出夫

廿二、米國彈劾論

四ノ二 大島 康正

廿三、滿洲事變の發端

二ノ二 内山 晃

廿四、昭和の國難に當りて諸君の奮起

を望む 五ノ二 久保田忠作

廿五、閉會之辭

部長

秋季辯論大會入賞者左の如し。

一等 阿座上孚 (五ノ三 雄辯禮讚)

二等 淺原昌佑 (二ノ二 眞劍の力)

三等 大島康正 (四ノ二 米國彈劾

論) 四等 白藤孝亮 (三ノ三 現代日本

に對する所感)

五等 伊東美一 (四ノ一 正義日本

の一大使命)

右の外選外佳良もいふべき者に

一ノ三村上英俊、二ノ一伊藤輝典、三

ノ三西本實等がある。

此の大會に於て一年の辯士の勢の振は

ないのを遺憾に思ふ。昨年一年が淺原

君(一等)を出したに比し、本年は、わづ

か一名の村上英俊(選外佳良)の外は勝れ

たる者が出なかつた事は、益々残念に思

ふ次第である。

今後尙一層の奮勵を望む。

淺原昌祐が下級生でありながら斯くの

如く熱辯を振つたのは稱讚に價する、今
後益々其の辯舌をねりきたへ、萩中辯論
部の爲に大いに意氣をあげられん事を請
ふ。

大島、白藤、伊藤の諸君には上級生と
して下級生辯士を、善導し、萩中辯論部
を大いに發展せしめられる様、切に希望
する次第である。

思ふに、萩中辯論部は大いに當市青年
團のそれに劣つてゐるこの河野部長の言
もある、須らく發憤して、萩中辯論部の
名を揚げるべきでは無かるうか。

終にのぞんで、多數先生の今後共、益
々辯論部を御援助あらん事を、切に
御願ひ致します。

昭和八年度五年生春季辯論小會

昭和八年五月二日、於柔道場

一、閉會之辭

委員

二、列國空軍の現状 三組 近藤政助

三、天目山弔合戦 三組 澤田大願

四、新日本の建設 一組 大永修平

五、大探險家バード少將

三組 伊東美一

六、労働

二組 田中政樹

◎討論「都會禮讚か、田園禮讚か？」

七、閉會之辭

委員

二時間の辯論會にわづか六名は

餘りにも少な過ぎはしないかと思ふ

受験準備に奮闘の折からこはいへ、

わづか五分か十分のしやべる材料の

出来ない筈はないと推察す、辯論は

平和の武器である。

我等は聞いてばかりゐては駄目であ

る、自分自身の練習を必要とする、

中學入學以來演壇に立ち續けた者は

かりでは何ら此の小會は意味をなさ

ない。

今後新人の活躍を希望して止まな

い。

全四年生春季辯論小會

昭和八年五月二日 於講堂

一、閉會之辭

委員

二、フアツシヨの嵐と日本の使命

二組 北出松太郎

三、己の力を知れ 三組 横山 圭治

四、現下の國防を論ず

三組 津野 一二

五、丘を越えて 三組 三村 殿

六、汝の母 一組 原 徳太郎

七、青年よ勇敢なれ

二組 西島 村一

八、新人の資格 一組 西本 實

九、謙遜 一組 山下 誠一

十、成功は努力の賜なり

二組 田村 晴夫

十一、蟻 三組 佐伯 貫

十二、極東太平洋に暗雲は生む

二組 柳井 正一

十三、口に出るまゝ

二組 白藤 孝亮

十四、閉會の辭

委員

四年は辯士十二名も出して盛大に行

はれた、只私の遺憾とする所は、辯士

が熱辯を振つてゐる時、野次を飛ばす

事と討論に關して一般の人の認識不足

とである。即ち討論とは討論題に對す

る吾人の意見の發表であるのであるか

ら、成べく多數の意見を發表せられん

事を望んでゐるのにもか、はらず、徒ら

に討論を騒ぐ事考へたり、又は他人の

しやべるのを聞いて楽しんでゐるものが

ある今後辯論並に討論に對する認識を十

分増されん事を希ふ。

三年春季辯論小會

昭和八年五月三日 於合併教場

一、閉會の辭

委員

二、生命線の確保とは何ぞや 三組 貞本 尙

三、アレクサンドル大王 二組 淺野 力

四、玉標と鷲鳥飼ひ 一組 石村豊徳

五、忠と孝 三組 伊藤輝典

六、和合 二組 末永一雄

七、理智と感情 一組 香川朝政

八、我々學生の自覺 三組 田中正明

九、自助獨立 二組 田中 了

十、青年志士吉田松陰を憶ふ 一組 淺原昌佑

◎討論「都會禮讚か田舎禮讚か？」

十一、閉會の辭

委員

三年生の諸君よ、諸君は同級生に淺

一六三

原君を持つてゐる、彼を見ならひ、彼の長所をとり大いに躍起せよ。最後に山本先生の御親切な御講評を御禮申上ります。

二年春季辯論小會

昭和八年五月三日 於講堂

一、開會之辭

委員

二、英雄なるには

一組 山根 忠雄

三、日本男子らしく正道を歩め

二組 熊谷 正雄

四、求む

一組 日溪 靱負

五、青年よ偉大なれ

二組 村上 英俊

六、ローマへ如何にして造られたか？

一組 吉村 安時

七、滿洲移民を奨む

三組 堀 啓一

八、九度尋ねて

一組 竹内 周三

九、一休の頓智

三組 濱村 武穂

十、君平の蘭扇

三組 藤田日出夫

十一、空に咲いた武士道

一組 西村 忠男

十二、閉會の辭

委員

二年生がんばれ！、三年に淺原伊藤(輝)兩君あり、四年に白藤西本兩君あり、五年に伊東田中(政)二君あり、而して二年にはわづか一名の村上(英俊)君あるのみ、諸君の中には自分の辯才を認識してゐないものが居るだらう、よく己を観察せよ、而して辯論の道に勵まれよ！、而して此秋の大會には上級生を落して入選し、幾多の雄辯家を輩出して、いたゞきたい、森中辯論部の盛衰亦諸君の双肩にあり、諸君、勵まざる可けんや！。

一年春季辯論小會

昭和八年五月三日 於柔道場

一、開會之辭

二、未來の目撃戦争

一組 森井 潔

三、守れ正義

三組 杉山 巖

四、乃木大將

二組 岡村新作

五、白海の鷲

一組 久芳一人

六、地理大臣の資格

三組 林 良夫

七、情

二組 西村信海

八、賢さうな馬鹿

一組 水津久夫

昭和八年度校友會委員

會長	河内校長	第五學年	山本正夫	第四學年	新谷幸治	第三學年	香川朝政	第二學年	山根忠雄	第一學年	山本昭次
副會長	河野校長	第五學年	室井茂夫	第四學年	早田正照	第三學年	渡邊美博	第二學年	高崎知行	第一學年	山本昭次
道劍	岡部教諭	第五學年	小田吉夫	第四學年	岡田敬太郎	第三學年	山本英長	第二學年	赤川茂	第一學年	澤本良秋
道柔	津川教諭	第五學年	阿川正六	第四學年	和山美太郎	第三學年	山本英長	第二學年	高崎知行	第一學年	澤本良秋
誌雜	久永教諭	第五學年	澤田大和	第四學年	津柳正一	第三學年	伊藤昌佑	第二學年	堀谷正靱負	第一學年	佐伯哲海
論辯	岡庭教諭	第五學年	伊東美樹	第四學年	三白村孝亮	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
道書	岡部教諭	第五學年	富田義治	第四學年	中野博造	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
道畫	水沼教諭	第五學年	近藤政助	第四學年	津野利彦	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
歴地	岡庭教諭	第五學年	長谷和隆	第四學年	森田村茂	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
科理	中野教諭	第五學年	吉松幸夫	第四學年	松浦司郎	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
技競	池田教諭	第五學年	吉岡三男	第四學年	佐藤美彦	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫
技球	山本教諭	第五學年	岩井仁治	第四學年	中島實彦	第三學年	市利豐	第二學年	市利豐	第一學年	西村雅夫

器	玉井教諭	久保教諭	野田教諭	岩田教諭	田中教諭	東部教諭	安部教諭	福澤教諭	八木澤教諭	小倉信夫	金山繁	荒川勉	吉松陽
具	久保教諭	野田教諭	岩田教諭	田中教諭	東部教諭	安部教諭	福澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	小倉信夫	金山繁	荒川勉	吉松陽
褒	野田教諭	岩田教諭	田中教諭	東部教諭	安部教諭	福澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	小倉信夫	金山繁	荒川勉	吉松陽
賞	岩田教諭	田中教諭	東部教諭	安部教諭	福澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	八木澤教諭	小倉信夫	金山繁	荒川勉	吉松陽
泳水	山本教諭	池田教諭	齋藤教諭	池田教諭	齋藤教諭	池田教諭	齋藤教諭	池田教諭	齋藤教諭	寺島直太郎	木村中	池田中	玉井義照
道弓	岡庭教諭	森本教諭	岡庭教諭	森本教諭	岡庭教諭	森本教諭	岡庭教諭	森本教諭	岡庭教諭	栗屋勝輔	吉廣	久雄	三井誠

九、一錢を無駄にする勿れ

- 十、愛國少年 一組 寺田健一
- 十一、非常時の少年 三組 白井輝夫
- 十二、正直な話 三組 大野政雄
- 十三、僕の抱負 二組 堀 正雄
- 十四、愁をすするな 一組 長岡秀雄
- 十五、四匹の動物の仲よく旅した話 三組 厚東雅夫
- 十六、笑ひ話 二組 村木 寛



- 十七、青年の務 一組 島村勝二郎
- 十八、識の人間 三組 植村一良
- 十九、閉會之辭

編輯餘録

◇毎年冬休暇前に渡す答の雑誌が印刷所の都合で多少おくれた事をお詫する。

◇依頼状は大抵出したつもりであるが今度は卒業生通信が例年に較べて量が少かつたやうだ。五年の人も卒業したら後輩のためにごし／＼寄稿して下さい。

◇英文欄は今度は都合で休載した。全然止めたのではないからそのつもりで。

昭和七年度校友會費收支決算報告

經常費（收入）

一、金參千四百拾壹圓五拾貳錢也 總收入高

内 譯

金五百九拾貳圓七拾八錢也 前年度繰越金
 金貳千貳百七拾圓四拾五錢也 生徒會費
 金百五拾九圓也 校友會入會金
 金貳百拾壹圓拾壹錢也 職員會費
 金貳拾貳圓六拾八錢也 預金利子
 金百五拾五圓五拾錢也 雜收入

支 出

一、金貳千七百七拾參圓六錢也

内 譯

金百七拾六圓五拾六錢也 劍道部
 金百四拾圓七拾錢也 柔道部
 金四百六拾七圓參拾壹錢也 競技部
 金貳百五拾壹圓貳拾壹錢也 球技部
 金百四拾八圓七拾五錢也 水泳部
 金百六拾八圓參拾參錢也 雜誌部
 金貳百圓八錢也 褒賞部

金百六拾四圓八拾五錢也

金八拾圓八拾六錢也

金四拾八圓參錢也

金五拾九圓拾六錢也

金參拾壹圓五拾錢也

金六百拾五圓七拾貳錢也

金貳百貳拾圓也

差引殘金六百參拾八圓四拾六錢也

基金之部（收入）

一、金千四百五拾八圓九錢也

内 譯

金千百圓也 債 券
 金貳百七拾五圓也 前年度ヨリ繰越
 金六拾五圓九拾五錢也 債券利子
 金拾七圓拾四錢也 預金利子

支 出

一金ナシ

差引殘金千四百五拾八圓九錢也

翌年度へ繰越

用紙部

開校式

卒業式

弓道部

園藝部

雜費

借入金年賦償還

翌年度へ繰越

總收入高

債 券

前年度ヨリ繰越

債券利子

預金利子

附 録

時山氏退筆塚建設顛末記

大村 武 一 (寄)

業ヲ解シ殊ニ私費ヲ投ジテ以テソノ業ニ盡ス君ニシテ初メテ能ク之ヲ爲スベキモノナリ明城瀧口翁ハ君ノ明
 木小學校長タル時君ノ人ト爲リヲ識リ後翁等ノ創建ニ成レル我縣立圖書館司書トシテノ君ノ功績ニ感ジ今ヤ
 ソノ退筆書牘ヲ蒐集シテ之ヲ不朽ニ傳ヘ更ニ貞珉ニ刻シテ後昆ヲ戒シム時山君ノ功績固ヨリ傳フベシト雖モ
 翁ノ故舊ニ厚ク人情ニ温ナルニアラズンバ何ンゾ今日ノ舉アランヤ誠ニ傳ヘラルベクシテ傳ヘラザル人ヲ
 傳フルニ其人ヲ得タリトイフベク傳ヘラル、者傳フル者肝膽相照シ意氣投合セル者トイフベキカ傳ヘラル、
 者固ヨリ地下ニ嘆スベク傳フル者ハ更ニ世人ノ仰止スベキモノニアラザルカ澆季ノ世人情紙ヨリモ薄シ余ヤ
 建碑除幕ノ式典ニ臨ミ感慨盡キザルモノアリ聊カ卑言ヲ述ベテ祝辭ニ代フ

昭和八年八月廿四日

山口縣立萩圖書館長 河内才三

碑は濱崎下之町萬福寺の墓地に在り。墓地の周圍は樹木を以て繞らし唯碑に對して西の方指月山峯を眺むるのみ。
 隣域に小林聯芳塔あり。先代小林作平氏は時山氏ニ故舊ありき。殊に此の地を選ばれしはまた明城翁の意の存する所
 なり。

碑文は現萩圖書館司書香川政一氏の撰にかゝる。曰く

時山君退筆塚

時山宮藏君者木間人也壯歲卒業山口師範學校歷任於椿西明倫諸學校訓導及明木校長會有感辭職而渡米居二十
 年而歸國大正十三年就任於萩圖書館司書矣初萩中學校之設瀧口吉良翁與菊屋剛十郎氏爲建設館君之在任拮据
 革館務懇惻進學生旁蒐鄉土資料使入館者興起而二氏設館之意得以達焉昭和七年十二月二十四日病沒享年五十
 九聞者深悼惜矣君恒慕吉田松陰先生之風晚年移居於松本翁藏君之用筆及書牘若干於石窠圖不朽銘曰

教授俊髦 藏書久勞 偉哉功高 永世傳毫

昭和八年孟夏

萩圖書館司書 香川政一 撰

碑石は高さ一尺五寸縦横三尺の石を二つ重ね更に高さ五寸縦横二尺五寸の石を積みて之の上に載せたり。碑石の形態
 上部尖りて前屈し腰部大にして人の座せるが如し。小林聯芳塔は傘をさしたるが如くして俱に自然石なり。二氏を見
 るにまた素樸なる自然の人にしてその性格の相違せること共に石塔の形態異なるが如し。

書牘若干(時山氏より明城翁に送られし書翰中殊に國家社會に關する事を述べたるもの及び圖書館務についての意見
 書等を殊に選ぶ)と大小二本の退筆を錫箱に密封し之を基石に寄を作りて收む。

始め此の企あるや翁余に時山氏生前使用の筆を求めらる。當時余退筆の義を知らず。辭書に退筆は秃筆とあり。更に
 蘇軾詩「退筆如山未足珍讀書萬卷始通神」にあるを知れり。退筆塚は尙書故實に「僧智永積年學書有秃筆頭十莖廢之號
 退筆塚」とあるに起れり。

幸に大小二本の筆を得て之を翁の許に送れり。數日を経て香川先生と共に招かれて行き建設の趣旨を聞きて杜甫が貧
 交行覆手の嘆翁が前に吟すべからずと思へり。退筆塚の設計者は明木の津守氏なり。氏は曩に松陰先生の誕生地を築
 き近く田中大將銅像建設地の庭園を設計したる人なり。宜なり退筆塚設計の妙人をして感嘆せしむ。字は石工伊勢島
 氏の鐫る所なり。

構築就りて除幕式を八月廿四日午前九時より舉ぐ。此の日の一點の雲翳なく爽風時に來りて花柴を揺がせり。方丈の讀
 經時山氏の靈を誘ひ來るかと思はれたり。次きて圖書館長の祝辭あり。最後に時山氏の遺子武子嬢の手によりて除幕
 なりぬ。母堂感激の涙あり。

時山氏地下にあるもまた感激の涙に咽ばん。此の日来賓に菊屋孫輔河内才三香川政一河野通毅氏等十有餘人吾も列し

て末席にあり。一同翁の美學に感動せり。誰か文章が「交りは紙子の切を譲りけり」の句を非なりとする者ぞ。吾明城翁に於て是を見る。

秋日落つること早し。碑前に低徊するに楚色垣根に逼り時雨遽に來りて遂に暗し唯一群の白菊はのかに見ゆるのみ。澆季の世、人心濁りて闇の如し。然るに翁の心遂に澆季の闇に隠れず。白菊のほの見ゆるが如し。即ち吟じて曰く、白菊を残して暗らし雨の宵。

(昭和八年十一月)

附四

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十一日發行

山口縣萩市
發行兼編輯者 須子五郎

山口縣萩市大字堀内第三百番地ノ三
印刷者 野村盛一

山口縣萩市大字瓦町七十三番地
印刷所 株式會社萩響海館
電話十八番

山口縣萩市
發行所 山口縣立萩中學校校友會

山 口 縣 立 中 學 校 友 會